

# 仮面ライダーブラック サンダー

特撮大好きマン

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

成風龍東は改造人間である彼を改造したのは、世界征服を企む悪の秘密結社ガルーダ、仮面ライダーブラックサンダーは人類の自由と平和のために戦うのだ！

# 目次

プロローグ	1
第1話 誕生！仮面ライダーブラックサンダー	5
第2話 恐怖のウィルス!! 蝙蝠強化怪人	22
第3話 壊れた友情！サソリ強化怪人！	28
第4話 さらわれた姉！サラセニア強化怪人！	37
第5話 大地震作戦！カマキリ強化怪人！	45
第6話 守れ！北条家の隠し財産！カメレオン強化怪人（前編）	52
第6話 激闘！カメレオン強化怪人（後編）	58
第7話 美波危うし！蜂強化怪人	67
第8話 新たなる怪人！コブラ強化怪人（前編）	72
第8話 甦る怪人！コブラ強化怪人（後編）	77
第9話 打倒仮面ライダーブラックサンダー！キメラ強化怪人	84
第10話 狙われた四姉妹！ヤモリ強化怪人	94

第11話	仮面ライダーブラックサン	155
ダーヴス怪人軍団	ウマ強化怪人	
102		
第12話	仮面ライダー2号&amp;amp; ;	
仮面ライダーブラックサンダー!!	サボ	
テン強化怪人		119
第13話	レスラー怪人登場!!	
ピラザ		
ウルス強化怪人(前編)		132
第13話	リベンジマッチ!!	
ピラザウル		
ス強化怪人(後編)		138
第14話	鋼鉄の体! ヒトデ強化怪人	
144		
第15話	大津波作戦!!	
カニ強化怪人		
強化怪人		195
第16話	立花モーターズピンチ!!	
毛		
虫強化怪人		160
第17話	親子のピンチ!!	
蛾強化怪人		
第18話	アトランティス計画!!	
ピラ		173
ニア強化怪人		
第19話	札幌壊滅!?	
ムササビ強化怪		
人		179
第20話	怒りのブラックサンダー!!	
キノコ強化怪人		186
第21話	大幹部の登場!!	
アリジゴク		

第22話 ガルーダスクール!! ムカデ

強化怪人 | 201

第23話 地底怪人!! モグラ強化怪人

| 205

第24話 クラゲ型宇宙人? クラゲ強

化怪人 | 211

第25話 化石が蘇る!? 三葉虫強化怪

人 | 215

第26話 ブラックサンダー敗北!!

リクイ強化怪人 | 220

ア



# プロローグ

〔成風龍東〕（19）

本作の主人公

世界征服を狙う秘密結社ガルターダによつて拉致され、強制的に身体改造手術を受けた事により仮面ライダーブラックサンダーに変身する。

父親と母親に先立たれて、立花藤兵衛に引き取られる。

城南大学の若き学者にして、知能指数500にしてスポーツ万能という超人的な能力の持ち主であつたことからガルターダに目を付けられ、バツタの能力を持った強化改造人間にされてしまった。だが脳改造寸前に幼なじみの新田美波の父、新田博士の手引きで脱出し、ガルターダと戦うことを誓つた。

〔仮面ライダーブラックサンダー〕

成風龍東が変身する8番目の仮面ライダー。

城南大学在学の若き学者である成風龍東が世界征服を企む悪の秘密結社ガルターダに拉致された後に改造手術を施され、バツタの能力を与えられた強化改造人間。脳改造される寸前に脱出し、人類の自由と平和を守るためガルターダと戦う事を決意する。

【新田美波】（19）

本作のヒロイン

成風龍東の幼なじみで海洋学者である新田博士の娘である。

城南大学に通っており、スポーツ万能で文武両道な優等生。

幼なじみである成風龍東に好意を抱いているが肝心の龍東には気付いてもらえない。

【立花藤兵衛】

初代仮面ライダーからストロンガーまでを支えてきた人物。

親を早くに亡くした成風龍東を引き取り実の息子のように育てた。成風の両親の知り合いである。

成風からは「おやっさん」と呼ばれ慕われている。

成風龍東が戦意を失った際に叱咤激励する一方で、彼が勝利した際には誰よりも暖かく迎える。

【相葉夕美】（18）

成風龍東と新田美波と同じく城南大学に通っている美波のよき友人。

【龍崎薫】（9）

立花モーターズによく遊びに来てる近所の小学4年生の女の子。

【片桐早苗】（28）



FBI捜査官で滝和也は直属の上司。  
戦闘能力は生身の人間であるため怪人には苦戦するものの、戦闘員相手なら全く引けを取らない。

【秘密結社ガルーダ】

デルザー軍団壊滅のあとデルザー軍団大首領が新たに組織した悪の秘密結社である。  
強化改造人間を使い世界征服を企んでいる。

構成員

首領

・ガルーダ首領

大幹部

・拘束のまゆ

・魅惑の奏

・忍のあやめ

・グラツシー春菜

その他構成員

・ガルーダ強化改造人間

・ガルーダ戦闘員

【ガルルーダ強化怪人】

世界征服を目論む犯罪組織「ガルルーダ」の実働部隊に位置する怪人。かつてシヨツカーが行っていた動植物の能力を人間に移植するという研究をもとにより強化され制作された生体兵器たち。

基本的に動植物と人間を融合させた姿をしており、ネーミングもモチーフになった生物からそのまま名づけられている。そのためか、モチーフになった生物の特性を強く受け継いでいる為、移植された動植物の能力や弱点がそのまま反映されている場合が多い。また、武器に力を注ぎ過ぎた挙げ句、それを失うと戦闘力が激減してしまう怪人もいる。

# 第1話 誕生！仮面ライダーブラックサンダー 蜘蛛強 化怪人

花の咲き乱れる草原の中。

蜘蛛の姿の怪人が、何かを狙っている。

その視線の先――

草原の中を歩く青年。

城南大学の若き学者・成風龍東が歩いている。

やがて龍東は歩みを止め、近くのベンチに腰をかけ立花藤兵衛と談笑する。

立花「いや〜今日もなかなかいい天気だ。しかし本当に日本は平和になったよ。」

立花藤兵衛は改めて日本が平和になったことを嘯み締める。

龍東「おやつさん、その話もう何度目だい？」

龍東が呆れ気味にそう言った。

立花「いいじゃねえか、本当に平和になったんだから。ところで龍東、そろそろ美

波に告白しないのか？（ニヤニヤ）」

龍東「何で今美波が出てくるんだよ！（焦）」

立花「そりゃあお前、いつまでたっても告白しようとしなからだろ。」

龍東「おやつさんに関係ないだろ!トイレ行つて来る!」

立花「逃げたな」

成風がトイレに向かつて歩いて行く。

その後ろ姿を見送る立花。

立花(まったく城南大学きつての秀才なんだが、恋愛になると奥手になっちゃうんだよな……)

トイレを済まし立花の下に戻るとする龍東。

やがて龍東に、5人の人が追つて来る。

追いかけて来るのは、黒服に身を固めた女たち。

龍東「なんだあの女の人たちは……?何だか嫌な予感がする。」

歩くスピードを上げる龍東。

5人の女は、なおも追つてくる。

すると今度は、前方からも同様の5人の女が……。

これでは挟み撃ちだ。

龍東「明らかに俺を狙っている!?!よし!」

挟み撃ちになる瞬間、龍東は高くジャンプし、前の女たちを飛び越える。

窮地を脱して後ろを振り向くと、女たちは敵わないと見えたか、逃げ去った。

龍東「何のためにあんな事をしたのか突き止めてやる！」

女たちを追う龍東。

その時突然、無数の蜘蛛の糸が飛び出し、龍東を絡め取ってしまう。

龍東「あ!?! ううっ………!」

そんな龍東に、不気味な笑い声を上げつつ、黒服の女性たちが近づいてゆく。

龍東の意識が、段々遠くなっていく……

龍東が意識を取り戻す。

そこは、円形の手術台の上。

手術陣が、龍東を囲んでいる。

龍東「ここは一体どこだ? ……俺を自由にしろ!」

どこからか、謎の声が響く。

謎の声「成風龍東! ようこそ我がガルダに来てくれた」

龍東「ガルダ………? いったい何のことだ!?!」

成風龍東が耳にしたガルダ

それは 世界のあらゆる所で活動している

悪の秘密結社なのだ

成風龍東はガルルーダに選ばれ 日本の人

里離れた秘密のアジトに運び込まれた

ガルルーダの狙いは 世界各国の優秀な人間を

改造しその意のままに動かして 世界征服を

計画する恐るべき組織なのである

謎の声「我々が求めている人材は、知能指数500、スポーツ万能の男!君は選ばれた栄光の青年だ!」

龍東「ふざけるな!俺はガルルーダに入ったつもりはないぞ!」

謎の声「フッフ……もう遅いのだ、成風。君の意志に 関わず、君は既にガルルーダの一員にほぼなっているのだ。君が意識を失っている間に、ガルルーダの科学陣が総力を結して君の肉体に改造を施した。君は今や改造人間なのだ!」

龍東「改造人間……?信じられるものか!」

謎の声「ならば、見せてやるがいい」

手術陣「お前の体に今から、10万ボルトの電流を流す。並みの人間なら一瞬にして死体になる。しかしお前は、仮面ライダー1号、2号、ストロンガーをもとに改造し、風力と電力エネルギーを蓄えられている」

手術陣が龍東の足に電線繋ぎ、スイッチを入れる。

電線に電流が流れる。

龍東「がああああーっ!?」

手術陣「君の体には、火傷ひとつ残らない。ただ、その苦痛は脳改造を行ってないから、脳改造が終わり、指令のままに動くようになれば、完璧なガルーダの一員になる！」

やがて、電流がやむ。

龍東「はあ、はあ……だ、誰が、死んでも、お前らの 思い通りの人間になるものか!？」

手術陣「誰も初めはそう思う!しかしやがてガルーダの一員であることに感謝するようなる!成風龍東の脳改造開始だ!」

そのとき、突然警報が鳴り響く。

扉が開き、1人の戦闘員が現れる。

戦闘員「発電機が何者かにやられました!」

手術陣「ただちに見つけ出せ!」

手術陣たちが手術室を駆け去る。残されたのは、張り付けにされた龍東のみ……  
龍東が両手足に力を込める。

手足を繋いでいた枷が引きちぎれた。たしかに改造によって、自身は常人をはるかに

上回る力が備わっているらしい。

そこへ1人の男が現れる。

それは龍東が通う城南大学の教授、新田博士であった。

龍東「あなたは……新田博士!博士は確か、行方不明になっていたはず……?」

新田「すべてはガルーダの……」

そのとき再び、警報が鳴る。

新田「はっ、いけない!ここから脱出するんだ!」

龍東「しかし……どうやって?」

新田「あの天井を破れば脱出できる」

龍東「……無理ですよ。あの高さでは」

新田「成風くん、君は鉄の枷を苦もなく切れた。並みの人間には不可能なことだが、君は改造人間なのだ。皮肉にもガルーダが、実験用に君の体に風力と電力を与えたために、恐るべきエネルギーが君の体に蓄積されてるのだ」

龍東「そんなことが……?」

新田「できる、今の君なら!」

龍東「……」

新田「ぐずぐずしてはられない。やってみてくれ、成風くん!」



意を決して龍東が大ジャンプ。

新田の言葉通り、常人を越えたジャンプ力で天井をぶち破る。

やがて、手術陣が戻って来た。

手術陣「あつ、いない!」「見ろ!天井から逃げたぞ!」

丘を縫って走る道路を、龍東がバイクで逃走。後部座席には新田を乗せている。

遠くからそれを見つめる先の蜘蛛の怪人、蜘蛛強化怪人……

木々の間には戦闘員たちが潜んでいる。

龍東の周辺、いつの間にか、霧が立ち込め始める……

突然、目の前に巨大な蜘蛛の巣。

バイクが転倒し、成風が丘から滑り落ちて行く。

成風「うわああああつ!」

新田「成風くん!成風くん!……成風くん!」

道路に残された新田に、龍東をさらった謎の女たち、そして戦闘員たちと蜘蛛強化怪人が現れる。

蜘蛛強化怪人「ガルーダを裏切ったな。裏切れば死あるのみ。もちろんたった一人の娘もな」

新田「娘……美波も!」

蜘蛛強化怪人「当たり前だ!死ぬ、新田……!」

新田「娘だけは頼む、見逃してくれ、殺さないでくれ……!」

そのときー

戦闘員「あ、あれは!」

1人の戦闘員が指をさすその先には、丘の上に立つ、1人の戦士の姿。その素顔を覆う仮面は、かつての仮面ライダー1号を彷彿とさせる。

彼こそ、ガルーダに敢然と挑む『仮面ライダーブラックサンダー』だ。

蜘蛛強化怪人「貴様あ……!」

ブラックサンダー「とおっ!」

ブラックサンダーが丘から飛び降りると、群がる戦闘員を次々になぎ倒す。そして蜘蛛強化怪人のもとから新田を救い、いずこかへ逃げて行く……

蜘蛛強化怪人「ぐぬぬ……」

ところ変わって、城南大学の校舎を出る新田美波。

いきなり目の前に、親友の相葉夕美が顔をだす!

夕美「わっ!」

美波「きやつ!びっくりしたあ……」

夕美「どうしたの、美波ちゃん?元氣ないよ。何かあったの?」

美波「…… ねえ、夕美ちゃん。誰か後をつけてない？」  
周囲を見回す夕美。

夕美「…… 別に？」

美波「この3日ばかり私、誰かにいつも見られてる気がして……」  
傍らに停まっている車の中で、1人の男が美波に目を光らせ、無線機を手に取る。

男「新田美波と、その友人が通過しました」

ガルーダのアジト。

蜘蛛強化怪人「よし。逆に娘を使って博士をおびき出せ」

男「侵入地点は？」

蜘蛛強化怪人「美波の自宅か、その途中」

美波たちが歩いていると、前方から男2人が歩いてくる。

後ろを振り向くと、同じく男2人。

4人の視線の先は美波――

美波「夕美ちゃん……」

そこへ1台の車がやって来て、停まる。運転席から顔を出す立花藤兵衛。

立花「よお！」

美波「おやじさん！」

美波と夕美はよく立花モーターズでお手伝いをしているのだ。

夕美「私、てつきり……」

立花「てつきり何だよ？」

美波「変な男が」

立花「変な男？」

周囲を見回しても、男たちは既に消えていた。

立花「誰もいないじゃないか。はは、大人をからかうもんじゃない。さあさあ乗んな

さい。店までドライブだ」

美波たちが車に乗り込み、車が走り出す。

立花「おやじさん、見つかったらしいよ」

美波「え、パパが!？」

立花「ここが居場所だ」

立花が美波に、居場所を記した紙切れを渡す。

やがて車は「立花モーターズ」に到着。

立花と美波が降りる。

立花「そんじゃ」

車が走り去る。

店内に入るなり、数人のガルーダ戦闘員が出現。

立花「なにをする!？」

襲い掛かる戦闘員が立花を叩きのめす。

そして美波を捕らえるが――

店に到着してからは顔が隠れて見えなかったが、それは美波の服を着た夕美であった。

戦闘員「この娘じゃない!」「車で行った方だ!」

一方、夕美の服に身を包んだ美波は、車で父の居場所を目指す。

美波「パパはやっぱり生きてたんだ。」

その車の窓には、一匹の蜘蛛が張り付いていた…………

ガルーダのアジト。

蜘蛛強化怪人「フフフ…………」

とある倉庫。龍東と新田が身を潜めている。

新田「はあ………… 私はこれで良かったのだろうか?もし、美波の身に万が一のこと

があつたら、私は…………」

龍東「落ち着いて下さいよ。博士のとつた行動は正しいんです。ガルーダの恐るべき野望を全世界に訴える、博士はたつた一人の証人じゃありませんか」

新田「わかつてはいる…………だが奴らと戦うには、私はあまりにも非力すぎ

る……」

龍東「及ばずながら……私も全力を尽くして、人間の自由と平和のために戦います！博士、もっと自信を持って下さい！」

その頃美波はちようど、倉庫へ到着していた。

そして倉庫の屋根の上には、蜘蛛強化怪人が……

龍東「博士、間もなく美波が来ます。元氣を出して……」

ひとまず新田に水を飲ませようと、龍東が流し台を見つけ、コップを手にして水道の蛇口をひねる。

だが取っ手が固く、なかなか回らない。

力任せに龍東がひねると、取っ手ごと千切れてしまった。

龍東「そうか……普通の人の何十倍もの力が俺にはあって、それがコントロールできないんだ……既に、人間でない改造された部分が……」

龍東たちの潜んでいる倉庫へ美波がやって来る。

話し声が聞こえ、何気なしに美波が中に入らないまま、入口に耳を近づける。

龍東「博士、俺の体は……俺の体は死ぬまで改造人間のままなんですか!?!」

新田「ああ……その通りだ……」

龍東「そんな……」

美波「この声、もしかして龍東？」

龍東が新田に背を向け、壁に掛かった鏡で、自分を見つめる。

龍東（第三者から見れば、俺はただの人間にしか見えないだろう……… だけど、博士とおやつさんだけは、俺の気持ちをわかってくれる）

新田のもとへ、無数の蜘蛛の糸が降りてくる………

新田「ううっ！ううっ、うわああーっ!!」

龍東が振り向くと、新田が蜘蛛の糸で首を締め付けられていた。

龍東「博士、博士!?!」

そのまま倒れた新田に、龍東が駆け寄る。

龍東「博士………!」

新田「うう……… ううっ………」

龍東「博士!」

龍東が糸を引き剥がしにかかる。

そこへやってきた美波。

美波「あっ!」

慌てて美波が駆け寄る。

美波「パパ!」

新田「ううっ……」

龍東「博士、博士!」

美波「パパ、パパ!」

龍東「博士!」

新田が息絶える。

龍東「博士……」

美波「パパ……」

そのとき、窓から蜘蛛強化怪人が覗いていることに龍東が気づく。

龍東「危ない!」

咄嗟に龍東が美波を連れて新田から離れる。

蜘蛛強化怪人が放った毒矢が、新田に命中。

新田の体が溶け、泡となって消滅してしまった。

龍東「美波!ここは危険だ……外に出よう!」

美波「ええ……」

そのとき、美波の背後に蜘蛛強化怪人が出現。

蜘蛛強化怪人が毒矢を放つ。

咄嗟に龍東が身をかわした隙に、蜘蛛強化怪人は美波をさらって姿を消す。



龍東「しまった……」

龍東が美波を探して倉庫の外へ駆け出す。

蜘蛛強化怪人は美波を抱えたまま、倉庫に到着したトラックの上に飛び乗る。

トラックが走り出す。すかさず龍東もバイクで後を追う。

龍東はバイクに乗りながら変身するとあの時の「仮面ライダー」になりバイクも「ターボサイクロン」に変形。たちまちスピードを増す。

仮面ライダーブラックサンダー……それは成風龍東が変身した姿だったのだ。

ガルーダのトラックの前に、仮面ライダーブラックサンダーが立ち塞がる。

トラックが停まり、美波を抱えたまま蜘蛛強化怪人が飛び降りる。

戦闘員もたちまち勢ぞろい。

蜘蛛強化怪人「出たか……今度こそ息の根を止めてやる！」

戦闘員たちがブラックサンダーを囲み、一斉攻撃。ブラックサンダーはそれを大ジャンプで交わす。そして強力なパンチ、キック、投げ技で次々に戦闘員をなぎ倒してゆく。戦闘員が一掃され、ブラックサンダーと蜘蛛強化怪人の一騎打ち。

蜘蛛強化怪人の鋭い爪がブラックサンダーの首を裂く。ブラックサンダーの手刀が蜘蛛強化怪人に炸裂。

蜘蛛強化怪人が上方に糸を吐き、上へと逃れる。

ブラックサンダーは大ジャンプで、たちまち追い付く。

パンチ、キック、投げ技の応酬。

そして仮面ライダーブラックサンダーの必殺技「ブラックサンダーキック」渾身のキックが、蜘蛛強化怪人に炸裂。

蜘蛛強化怪人「う……………う……………う……………ううっ……………」

倒れた蜘蛛強化怪人の体が溶け、泡となって消滅―

こうして仮面ライダーブラックサンダーはガルーダに初勝利を遂げた。

やがて、立花の車がやってくる。

変身を解いて美波を抱いている龍東に、なにかを悟り立花は無言で頷く。

立花「大丈夫か?」

龍東「気を失っている。あとは頼みます」

立花は自分の車に美波を乗せ、走り去る。

それを見送る龍東。

やがて龍東も、バイクで駆け去ってゆく……………

ガルーダとその身を犠牲にして戦う成風龍東

理解者であり協力者であった新田博士は

ガルーダの魔の手にかかってしまった

ガルーダの恐るべき怪人もまた待っている

## 第2話 恐怖のウイルス!! 蝙蝠強化怪人

ある日の夜、モデルの斎藤洋子は足早に自宅を目指していた。

洋子「はあはあ、誰か後をつけている? やだ、怖い……………」

やつの思いで自宅にたどり着き玄関の鍵を閉める、洋子は窓から外の様子を見た外には誰もいない。

洋子「おかしい…………… たしかに後をつけられていた…………… 気のせいだったのかな?

はあ…………… 早くシャワー浴びて寝ないと……………」

? 「キキキ!」

洋子「きやああああああああ」

洋子が後ろを振り向いた瞬間なものかが襲いかかり首を噛まれた。洋子は気を失ってしまった。

モデルの斎藤洋子を襲ったのはガルーダの新たな強化改造人間・蝙蝠強化怪人である。

蝙蝠強化怪人「よし、まず計画の第一段階の完了だ! あとはこの女を明日の球技大会に行かせれば……………」



龍東「俺にもよくわからないよ……」

モデルの斎藤洋子が突然の変死をしたため、たちまちニュースとなった。第一目撃者として龍東は新聞記者やテレビの取材に対応していた。

龍東は斎藤洋子の変死がガルダの仕業ではないかと思ひ彼女のアパートを訪れた。

龍東「うーんこれといって証拠がない……俺の考えすぎなのか？」

龍東は一旦立花モーターズに戻った。

龍東「ただいま」

立花「おう！龍東、どうだ収穫はあったのか？」

龍東「いや……これといって収穫はなかった……」

立花「あはは！だろうな悪の秘密結社がそう簡単に証拠を残さんだろう」

龍東「おやつさんは結構落ち着いているね……」

立花「まあ、俺はシヨツカーがいた頃からこんな感じだったからな」

その夜、成風龍東の幼馴染みの新田美波も斎藤洋子のアパートを訪れていた。

美波「この事件には絶対にガルダが関わっている……パパを殺したガルダを私は許さない！」

美波が斎藤洋子の部屋を搜索するも龍東と同様なんの成果も得られなかった。

美波「ダメ……なんもない、明日改めて龍東と一緒に探そうかしら……」

美波が斎藤洋子の部屋をあとにし廊下を歩いているといきなりガルーダの戦闘員に襲われたのだ。

美波「きゃあああああ！」

戦闘員「新田美波！貴様には死んでもらう！」

必死の思いで逃げるも美波は追い込まれてしまった。

美波（誰か助けて…… 龍東！）

戦闘員が剣を降り下ろそうとしたその時。

？「待て！」

全員が振り向くとそこには仮面ライダーブラックサンダーがいたのだ。

ブラックサンダーは戦闘員を次々になぎ倒し新田美波を救出したのだ。

翌日美波は龍東とともにまた斎藤洋子の部屋を訪れていた。

龍東「どうだ美波？なにか見つけたか？」

美波「特に何も…… 龍東は？」

龍東「こつちもダメだ…… 何もないや」

龍東と美波の搜索は夜までかかった。立花も搜索を手伝ったが何も見つからなかった。

立花「さあ、もう夜遅い今日は引き上げよう」

龍東たちが部屋をあとにしようと玄関のドアを開けるといきなり吸血鬼化した住人が美波に襲いかかり首もとを噛んだ。新田美波は倒れてしまった。

龍東「美波?!:..... 美波?!:..... 美波?!:.....」

蝙蝠強化怪人「ふははははははははははは!どうだ成風龍東!このヴァンパイアウイルスは!

龍東「貴様は新しいガルダーの改造人間か!」

蝙蝠強化怪人「その通りだ!」

龍東「そのヴァンパイアウイルスとはなんだ?」

説明しようヴァンパイアウイルスとはガルダーが開発したウイルスである。このウイルスに感染すると人間は吸血鬼となつて人に襲いかかるようになるのだ。

蝙蝠強化怪人「今から死ぬ貴様らに教えても仕方ないだろう!死ぬ!成風龍東!!」

蝙蝠強化怪人が龍東を掴みそのまま外へと放り出す。蝙蝠強化怪人は屋上へと飛翔する。

龍東はそのまま地上へと真つ逆さま。そのときベルトのウィンドサンダーダイナモが風を受け回転した。

すると龍東の姿はたちまち仮面ライダーブラックサンダーへと変化する。

変身し地面に着地すると屋上に向かって大ジャンプ。屋上へたどり着くと蝙蝠強化



怪人と戦闘員が待ち構えていた。

蝙蝠強化怪人「仮面ライダー！もうあの娘は助からん！」

ブラックサンダー「それでも俺は彼女を助けてみせる!!」

ブラックサンダーは襲いかかる戦闘員を次々と投げ飛ばしとうとう蝙蝠強化怪人と一騎打ちとなる。はげしい攻防が続くブラックサンダーは蝙蝠強化怪人を持ち上げる。

ブラックサンダー「ブラックサンダー스로ウイング！」

蝙蝠強化怪人はそのまま地面と激突した。

龍東「おやっさん……美波は？」

立花「安心しろ……無事だ」

龍東「良かった……」

こうしてガルーダの強化改造人間・蝙蝠強化怪人は仮面ライダーブラックサンダーの前に敗れた。だがガルーダは世界征服をあきらめたわけではない。次はどんな恐ろしい強化改造人間を送り込んでくるのか。

## 第3話 壊れた友情!サソリ強化怪人!

ある日のガルード秘密アジトではまた新たな強化改造人間が誕生したのだ。

サソリ強化怪人「シューシュー」

ガルード首領「新たな強化改造人間はできたか」

ガルード科学班「はい、首領この通り完成しました」

ガルード首領「よし、起きよ!サソリ強化怪人!」

首領が呼ぶとサソリ強化怪人は手術台から起き上がる。

サソリ強化怪人「ふふふ、これで龍東に勝つための力を手に入れた!これで龍東に勝つことができる!」

その頃、龍東は美波とデパートに買い出しに来ていた。

美波「ニンジンと豚肉とそれから…」

龍東「おいおい…まだ買うのか?カレーを作るならもう十分だろ…」

美波「ダメよ!もう少しで洗剤とかなくなっちゃいそうなんだから」

龍東「まるで主婦だな…」

一方、ガルード秘密アジトでは拉致されたが強化改造人間になれず戦闘員としても使

えない囚人たちが集められていた。

ガルーダ首領「お前たちは、強化改造人間といではおろか戦闘員としても使えない：しかしそんな悲しいお前たちに自由になるチャンスを与えよう」

囚人A「ほ、本当か？本当に自由になれるのか？」

囚人B「で？どうしたら自由になれるんだ！」

ガルーダ首領「では、説明しようお前たちはこのアジトを出た後砂漠を制限時間内に歩いてもらう制限時間が過ぎれば“死”あるのみだ」

ガルーダ首領の説明が終わった途端アジトの出口が開いたのだ。

囚人たちは我先にと走り出しだすと目の前にはガルーダ首領の説明通り砂漠が広がっていた。

必死に砂漠を走る囚人たち。

しかしガルーダ首領は囚人たちを逃がす気などなかったのだ。

ガルーダ首領「よし、キラースコーピオンを出せ！」

戦闘員「しかし、まだ制限時間は過ぎていませんが……」

ガルーダ首領「構わん、もとより逃がす気などないわ」

首領が命令すると戦闘員はキラースコーピオンを出撃させた。

キラースコーピオンは瞬く間に囚人たちを溶かしてしまった。

その様子を岩影から一人の老人が見ていた。

ガルード首領「あの囚人を使って成風龍東を誘き寄せろのだ!」

サソリ強化怪人「はは!」

買い出しを終えた龍東たちは立花モーターズに戻ってきた。

立花「いや、助かったよ美波!ありがとうな」

美波「いいえ、これくらい大丈夫ですよ」

立花「美波はいい嫁さんになるな!龍東、美波を嫁にもらったらどうだ?」

龍東 & a m p ; 美波「ええ☒」

龍東たちがそんなやり取りをしているとインターホンがなった。

龍東「はーい!今行きます!」

老人「助けてくれ!ガルードに追われているんだ!!」

立花「ガルードだと!?すまないが詳しく聞かせてくれないか?」

数時間後

老人「私はある日、突然奴らに拉致されたんだが強化改造人間にするには年を取りすぎている戦闘員としても使えないということですからと強制労働をさせられていたんだ」

龍東「それで脱走してきたということですか……」

老人「ああ他の脱走者はみんな殺されてしまったけれど……」

美波「ひどい……」

立花「しかし匿うにはここじゃすぐに見つかってしまふ」

龍東たちは脱走してきた老人を匿うためビジネスホテルに向かった。

龍東「ここならしばらくはガルーダに見つかるとはないだろう……」

老人「ありがとうございます…… 見ず知らずの私なんかのために……」

美波「いいんですよ！ 困ったときはお互い様ですよ！」

龍東「そうですよ！ 困ったときはお互い様ですよ」

そんな会話をしていると突然ノックが聞こえてきた。

美波「あら誰かしら？ おやじさんかな？」

龍東「いや…… おやつさんは用があるからまだ来ないはずだ」

老人「も、もしやもうガルーダが！」

龍東「落ち着いてください！ とりあえず俺が出ます…… 美波、おじいさんを頼んだ」

美波「うん…… わかった」

龍東は恐る恐るドアノブに手をかけ勢いよく開けたするとそこには親友の武内の姿があつた。

龍東「武内！ おまえか！」

武内「ああ！ でもびつくりしたよいきなり開けるもんだから」

龍東「いやあすまないすまない」

美波「武内くん!久しぶりね!」

武内「美波も久しぶり!」

龍東は今までの経緯を武内に説明した。

武内「なるほどな... よし!それなら俺にも協力させてくれ!」

龍東「ありがとう!武内!」

美波「武内くん本当にありがとう!」

すると近くから悲鳴が聞こえてきた龍東と武内はこの場を美波任せて悲鳴の聞こえてきた場所へと向かう。

龍東「武内はあつちを!俺はこつちを見てくる!」

武内「わかった!じゃあそつちは頼んだ!」

龍東と武内は左右に別れ搜索を開始した。

するとガルーダの女戦闘員が襲ってきたのだ。

しかし龍東と武内はあつという間に女戦闘員を蹴散らしたまた搜索を再開した。

老人「ああ... 私があつにいたのが奴らにバレたんだ... もうおしまい

だ... 皆殺しだ...」

美波「大丈夫ですよ!あきらめないでください!」

老人「お嬢さん！あぶない！」

美波「きやああ！」

部屋の天井からガルーダが開発したキラースコーピオンが大量に降ってきたのだ。

老人はキラースコーピオンの溶解液で溶かされてしまい美波もまた戦闘員たちによつて連れ去られてしまった。

龍東「しまった……遅かったか……」

武内「まだ間に合うかもしれない！追いかけてよう！」

龍東と武内はバイクで戦闘員の車を追う。

しばらく後を追うと車は停車した。

龍東「ここで止まっているとゆうことはここが奴らのアジトか……」

武内「そうかもしれない……よし！奴らに見つかるといけない屋根からこっそり侵入しよう」

そうして二人は屋根から侵入し中の様子を伺っていると運悪く武内が屋根裏の破損したところから誤って落下し捕らえられてしまう。

龍東「武内！」

武内「龍東……すまない……」

龍東は戦闘員たちを薙ぎ倒し美波を救出する。

次に武内を救出して脱出しようと出口へ向かおうとした時いきなり武内が足を止めた。

龍東「どうした武内?早く脱出するぞ!」

武内「ふふふ…… 龍東…… まんまと誘き寄せられたな!」

そう言つて武内はフェイスマスクを外す。

すると武内の姿はサソリ強化怪人へと姿を変えた。

龍東「そ、そんな武内が…… 強化改造人間だと……」

武内「そうだ!俺はお前に勝つために自ら改造手術を受けたのだ!」

龍東「なぜだ!武内!なぜお前が……!!」

武内「龍東よ…… 俺はお前に勝ちたかつたししかし俺とお前とでは圧倒的差があつたのだ…… だから俺はガルーダにこの力を与えてもらったのだ!」

龍東「武内……」

龍東はひとまず美波を安全な場所へ避難させる。

避難させた後、龍東は再び武内いやサソリ強化怪人のもとへと向かつた。

サソリ強化怪人「見つけたぞ!成風龍東!」

龍東「武内!悪魔に魂を売つたお前をもう親友だとは思わん!行くぞ!」

龍東は変身ポーズをとる。



右手を伸ばし、左手を胸と平行の位置で構える

右手と左手を反対の位置へ持っていく。

左手を引いて拳をつくる。

左手を右斜め上に突き出し同時に右手を引いて拳をつくる。

龍東「ライダー… 変身!!とお!!」

成風龍東から仮面ライダーブラックサンダーへと姿を変えた。

両者ならみ合い戦闘を開始した。

サソリ強化怪人は左手のハサミで攻撃、仮面ライダーは強力なパンチやキックを打ち

込む。

しばらく二人の攻防が続きそしてついに決着がつく。

ブラックサンダー「ブラックサンダー回転投げ!」

サソリ強化怪人「ぐわああああああ」

サソリ強化怪人は岩に勢いよくぶつけ体は赤い液体となりなくなってしまった。

ブラックサンダー「武内……」

そう言い残すとブラックサンダーはどこかへ去っていった。

親友だった武内はガルーダの強化改造人間だった。心に深い傷を負いながらも成風

龍東は戦い続けなければならない。ガルーダは今度はどんな恐ろしい怪人を送り込ん

で  
く  
る  
の  
か。  
。

## 第4話 さらわれた姉！サラセニア強化怪人！

ある日新田美波と友人の相葉夕美は遊園地へ遊びに来ていた。

美波「とっても楽しかったらね！夕美ちゃん！」

夕美「うん！とっても楽しかったね！龍東くんも来れば良かったのに……」

美波「龍東はあまり遊園地が好きじゃないからね……」

そんな会話をしながら植物が栽培されている温室へと向かった。温室を歩いていると1人で泣いている少女を発見した。

少女「うえくんお姉ちゃん」

美波「どうしたんだろ？迷子かな？」

夕美「でも……見た感じ中学生ぐらいだよ？」

美波「とりあえず聞いてみよう」

夕美「うん！そうだね」

美波と夕美は泣いている少女に駆け寄り訳を尋ねる少女の名前は城ヶ崎莉嘉だという。姉と一緒に遊園地に来ていたのだが突然目の前のサラセニアという植物に喰われてしまったと言うのだ。

美波「とりあえず龍東とおやしさんのところへ行くこう!」

夕美「うん!わかった!」

美波と夕美は莉嘉を連れて立花モーターズへ向かった。そして龍東と立花に今までの経緯を説明した。

莉嘉「う……う……お姉ちゃん……」

龍東「大丈夫だよ!お姉ちゃんはお兄ちゃんが取り戻すから!」

莉嘉「本当に?本当にお姉ちゃんは帰ってくるの?」

龍東「ああ!男に二言はない!」

美波「龍東……」

龍東「よし!じゃあ早速調査に行ってくるよ」

立花「おう……気を付けろよもしかしたらガルダが絡んでるかもしれないから……」

龍東は城ヶ崎莉嘉の姉がいなくなったとされる温室を調査していたすると話にあつたはずのサラセニアがなくなっていることに気付いた。サラセニアの周囲を調査しているとガルダの戦闘員がこちらに向かってきた龍東は近くに身を潜め後を追うことにした。

龍東「やっぱりガルダが絡んでいたか……後を追えば莉嘉ちゃんのお姉ちゃん

がいるかもしれない」

しばらく後を追うとガルーダの紋章が描かれている扉にたどり着いた戦闘員は扉の中へ入っていく続いて龍東も中へ入った。アジトの中を歩いているとどこからか女性の叫び声が聞こえてきた。

女性「誰か！誰か助けて！」

龍東「もしかしたら……急がないと！」

叫び声をたどって行くとある部屋にたどり着いたどうやら研究室らしい手術台には1人の女性が拘束されていた彼女こそ探していた城ヶ崎莉嘉の姉城ヶ崎美嘉だ。彼女は今人体実験にされようとしていたのだ。

研究員「それじゃ実験開始だ……」

美嘉「いや！死にたくない！」

研究員「安心しろ……成功すれば死ぬことは……う！」

龍東「大丈夫か！待つてろ今解放してやるからな！」

美嘉「あなたは？」

龍東「話は後だ！妹が待っている」

美嘉「莉嘉が！」

龍東は無事美嘉を救いだしアジトを脱出したしかしガルーダの戦闘員が待ち構えて

いた戦闘員を蹴散らし遊園地をあとにした1人の戦闘員を捕虜にして。

戦闘員「報告します…… 城ヶ崎美嘉を取り逃がし戦闘員103が捕らえられました」

ガルード首領「まぬけめ!サラセニア強化怪人…… 捕虜となつたまぬけな戦闘員をさつさと始末しろ!」

サラセニア強化怪人「ギギー!」

龍東たちは捕虜となつた戦闘員に尋問をしていたしかし戦闘員は一向に口を割らない。龍東は美波たちに戦闘員の見張りを任せ再び調査に向かった。

美波「ガルードの戦闘員を連れてきたって聞いたときは驚いたけど……」

夕美「案外普通の人間なんだね……」

美嘉「でも…… 普通の人間よりは強いんだって……」

莉嘉「なんでお姉ちゃんがそんなこと知ってるの?」

美嘉「監禁されているときにたまたま聞いたのよ…… ああ思い出したくもない……」

彼女たちが話しているといきなり夕美が悲鳴をあげた。

夕美「きやあ!」

美波「どうしたの夕美ちゃん?」

夕美「い、今…… 窓の外に何かいた……」

美波「何かと見間違えたんじゃないの？」

戦闘員103「き…… 来たんだ……」

美嘉「来たってなにが？」

戦闘員103「来たんだよ…… 俺を処分するために……」

美波「どうゆうこと？」

戦闘員103「ガルーダには血の掟があつてその1裏切り者又は捕虜となつた者は即処分せよ…… だから俺は処分されるんだ捕虜になつたから……」

戦闘員が恐怖で震えていると窓が割れる音がしたするとサラセニア強化怪人が部屋に入ってきたのだ。サラセニア強化怪人は戦闘員を見つける逃げようにも縛られていて思うように動けない戦闘員サラセニア強化怪人は戦闘員に抱きつき体液を吸収した。体液を吸収され尽くされた戦闘員の体は干からびてしまった。

夕美「きやあ！」

思わず夕美は悲鳴をあげてしまった。サラセニア強化怪人が振り向くそして夕美たちの方に向き直る。

サラセニア強化怪人「見たな！お前たちにも死んでもらう！まずはお前からだ！」

サラセニア強化怪人はツルを伸ばし夕美の首に巻き付けた。

美波「夕美ちゃん!」

美嘉「夕美さん!」

莉嘉「夕美お姉ちゃん!」

助けようにも恐怖で体が動かないこのままでは夕美は殺されてしまう全員が思ったその時サラセニア強化怪人の後ろがまぶしくひかりそこには我らがヒーロー仮面ライダーブラックサンダーが立っていた。

莉嘉「あ!」

美波「あの人は!」

美嘉「た、助かった……………」

夕美「ごほ……………ごほ……………」

ブラックサンダー「覚悟しろ!ガルーダの強化改造人間!」

サラセニア強化怪人「来たか仮面ライダー!」

仮面ライダーとサラセニア強化怪人の戦闘が開始された。やがて狭い部屋では不利と見たサラセニア強化怪人は窓から外へ飛び出した仮面ライダーも後を追った戦いの舞台は外へ移った2人の攻防が続くやがて仮面ライダーは宙を舞い必殺の“ブラックサンダーキック”をサラセニア強化怪人に打ち込んだ。こうして決着がついた。

ブラックサンダーはターボサイクロンにまたがると莉嘉の頭を撫でそのままどこか



へ去っていった。

莉嘉「あのお兄ちゃんは誰？」

夕美「あのお兄ちゃんはね仮面ライダーって言って私たちの強い味方だよ♪」

莉嘉「仮面ライダー？」

美嘉「ところでアタシを助けてくれたあの人は？ちゃんとお礼言いたいんだけど……」

美波「そう言えば龍東…… 調査に行ったきり帰ってきてない……」

夕美「明日改めてお礼を言いに行けば？今日はもう遅いし」

そして翌日城ヶ崎姉妹は助けてくれた成風龍東にお礼を言い城南大学に向かって  
いたちようと龍東が校門から出てきた。

龍東「あれ？君たちは昨日の……」

美嘉「昨日は助けてもらってありがとうございます」

莉嘉「本当にありがとうございます」

龍東「いえいえ…… 俺は特に何も……」

莉嘉「ん〜なんか似てる……」

龍東「似てるって誰にだい？」

莉嘉「昨日あのお化けを倒した仮面ライダーに……」

美嘉「言われてみると確かに……………」

龍東「まさか!俺は仮面ライダーみたいに強くないし……………」

莉嘉「でも…………… 雰囲気がすごく似てる!」

龍東「ははは…………… 困ったな〜」

美嘉「アハハハハハ」

こうして成風龍東の活躍によって姉妹の絆は守られたしかしガルーダはまだ世界征服を諦めない。次にガルーダはどんな怪人で挑んでくるのかまたどんな卑劣な作戦を立ててくるのか。

## 第5話 大地震作戦！カマキリ強化怪人！

ある日の地震研究所では異常な地震が観測された。地震研究所の若き研究員・青木慶は不審に思い何度も確認していた。

慶「やつぱりおかしい…… 初期微動もなしに地震が起きるなんて……」

慶が計測器をセットし直していると後ろから物音がした。

慶「だれ!? …… だれもないの……?」

しばらくするとドアの向こうにカマキリの影が移ったこれこそがガルーダが送り込んだ新たな強化改造人間・カマキリ強化怪人だ。

カマキリ強化怪人はドアを開け研究室に入り込んだ。

カマキリ強化怪人「青木慶！ 貴様にはガルーダの作戦に協力してもらおうぞ！」

慶「どんな作戦かは知りませんが…… 協力するわけにはいきません！」

カマキリ強化怪人「ならば…… 無理やりにも協力してもらおう!!」

カマキリ強化怪人は鎖を取り出しあつという間に青木慶を拘束する。慶は助けを求めますがすでに他の研究員は殺されてしまっていたのだ。こうして青木慶は連れ去られてしまったのだ。

ある朝の立花モーターズでは立花藤兵衛が新聞を読んでいた。

立花「美人研究員・青木慶行方不明か…… しかも他の研究員は無惨に殺されてい  
た……」

龍東「おやつさん…… その記事は本当なのか？慶が行方不明になったって」

立花「ああ…… 残念だが本当のことだ……」

龍東「そんな……」

立花「そういえば…… 青木慶はお前のもう一人の幼なじみなんだよな」

龍東「ああ……」

その時電話がなったのだ龍東が受話器をとると電話の声の主は行方不明になった青木慶からだ。

慶「あ…… あの…… な、成風くん……」

龍東「慶！慶なのか……！今どこにいるんだ！」

慶「今から場所を言うからそこへあなた一人に来て……」

龍東「わかった！早く場所を教えてくれ！」

慶は龍東に場所を指定して電話を切った。ガルーダは慶を脅し龍東に電話を掛けさせたのだ。

慶「はあ…… はあ…… こ、これでいいんですよね？」

カマキリ強化怪人「ああ……（苦勞）」

慶「成風くんになにをする気なんですか？」

カマキリ強化怪人「お前が知る必要はない…… お前はただ俺の命令に従えばいいのだ……」

一方龍東は慶に指定された場所へ向かっていたこれがガルーダの罠だと知っていないながらも慶を助けるために。

しばらくバイクを走らせ指定された場所へ着くとそこは何もないただの野原だった。

龍東「慶はどこにいるんだ……」

慶「成風くん！」

龍東「慶！無事だったのか……！」

慶「うん…… 命からがら逃げてきたの…… そしたらガルーダのアジトの入り口を見つけたの……！」

龍東「本当か！どこにある！」

慶「こつちよ……」

慶についていくと穴があった結構な深さがある。

龍東「ここが奴らのアジトの入り口か…… 結構深いな……」

慶「成風くん…… ごめん……！」

慶は龍東を突飛ばし龍東は穴の中へ落ちてしまった。

仮面ライダーブラックサンダーに変身すれば容易に脱出できるだろうが慶の前で変身するわけにはいかない。

龍東「慶!何のつもりだ!」

カマキリ強化怪人「ふはははは!よくやったぞ青木慶……あとはこの時限爆弾で成風龍東を吹き飛ばすだけだ……」

慶「ごめんなさい……ごめんなさい……ごめんなさい……」

龍東「貴様!新たな強化改造人間か……!」

カマキリ強化怪人は時限爆弾を穴へ落とすと泣いて謝っている青木慶を気絶させどこかへ連れ去る。

しかしそれが成風龍東に仮面ライダーブラックサンダーに変身させるチャンスを与えてしまったのだ。

龍東「よし!これで変身できる……!ライダー変身!……とお!」

時限爆弾が爆発したがしかし仮面ライダーブラックサンダーに変身したことにより穴を脱出したため無事だった。

ブラックサンダー「早く慶を取り戻さないと……!」

ブラックサンダーはアンテナで怪人の電波をキャッチし怪人が逃げた方向へ向かつ

た。

慶「うう……うう……ごめんなさい……ごめんなさい……成風くん……」

カマキリ強化怪人「今頃成風龍東は木っ端微塵だ！お前のせいだな……！ふはははは！」

ブラックサンダー「残念ながら成風龍東は生きているぞ！」

カマキリ強化怪人「貴様は……仮面ライダー！どうゆうことだ！」

ブラックサンダー「爆発する寸前に私が助けたのだ！」

カマキリ強化怪人「く……クソ！」

ブラックサンダー「カマキリ強化怪人！覚悟しろ！」

カマキリ強化怪人とブラックサンダーの激しい戦いが始まった。

途中戦闘員が介入してきたがなぎ倒し戦闘を続行した。カマキリ強化怪人は右手の鎌と鎖を駆使したがブラックサンダーは軽々と避ける。

ブラックサンダー「ブラックサンダーキック!!」

カマキリ強化怪人「ぐわはああああ……！」

ブラックサンダーキックを受けたカマキリ強化怪人は糸状となり消滅した。

戦いが終わり立ち去ろうとするブラックサンダーを青木慶は呼び止めた。

慶「待ってください……………！あ、あの…………… 助けていただいてありがとうございます！  
 した……………」

ブラックサンダー「……………」

慶「成風くんはどこにいるんですか？」

ブラックサンダー「しばらくすれば…………… あなたを向かえに来るでしょう…………… で  
 は」

慶（あの声…………… どころなく成風くんに似てる…………… もしかして……………）

龍東「おおい！」

慶「成風くん……………！」

龍東は無事慶を救いだしアジトをあとにした。慶を自宅へ送っていき帰ろうとした  
 龍東を慶は呼び止めた。

慶「成風くん…………… あなたに聞きたいことがあるの……………」

龍東「なんだい？急に」

慶「私を助けてくれたあの仮面ライダーってもしかしてあなたなの？」

龍東「どうして…………… そう思った？」

慶「声が似てたの…………… あの仮面ライダーとあなたの声が……………」

龍東「ははは！考えすぎだよ…………… 俺だってあの仮面ライダーに助けられたんだか



ら……」

龍東はバイクを発進させた。

こうして成風龍東の活躍によりガルードアの大地震作戦は阻止された。しかしガルードアはまた新たな強化改造人間を送り込んでくるに違いない。負けるな！我らの仮面ライダーブラックサンダー！

## 第6話 守れ!北条家の隠し財産!カメレオン強化怪人

### (前編)

北条「明日は加蓮の退院の日…… 久しぶりに家に帰ってくるのね楽しみだわ」

カメレオン強化怪人「その前にお前にはやることがある」

北条「あ…… あなたはだれ!」

カメレオン強化怪人「俺はカメレオン強化怪人…… 北条…… 貴様には北条家の

隠し財産の在り処を教えてもらうぞ……」

北条「私は知りません…… !そんなものの在り処なんて……」

カメレオン強化怪人「ほう…… しらを切るか…… ならこちらにも考えがある」

カメレオン強化怪人は舌を伸ばし北条の首をしめて気絶させた。

気絶させた北条を抱えたままカメレオン強化怪人は彼女の娘が入院している病院へ

と向かった。

病院へたどり着き娘の病室に入ると北条を起こした。

北条「あれ…… (ん)は……」

加蓮「お母さん…… !」

北条「加蓮……！」

カメレオン強化怪人「たしかお前の娘は手術が終わったばかりだな」

北条「それがどうしたって言うのですか……」

カメレオン強化怪人「やれ！」

戦闘員「イー！」

カメレオン強化怪人が戦闘員に命令すると戦闘員は手術が終わったばかりの加蓮を殴りはじめた。

加蓮「痛い……！痛いよ！やめて……！」

北条「やめて……！そんなことをしたら加蓮が死んでしまう……！」

カメレオン強化怪人「ならば言え！北条家の隠し財産はどこにある！」

北条「北条家の隠し財産は……」

龍東「言ってはだめだ！」

北条が隠し財産の在り処を言おうとしたとき間一髪龍東が駆けつけたのだあつという間に戦闘員をなぎ倒し加蓮を助けた。

カメレオン強化怪人は北条を連れ去りどこかへ消えてしまった。

龍東「しまった……逃げられたか……」

加蓮「どうしよう……このままじゃお母さんが……」

龍東「大丈夫!必ず俺が取り戻してみせる!」

加蓮「本当に……?」

龍東「ああ!約束する」

加蓮「お願い!お母さんを助けて!」

その翌日龍東は加蓮に呼び出され彼女の自宅へ向かった。

龍東「どうしたんだい?いきなり呼び出して」

加蓮「あなたに渡したいものがあるの……」

加蓮は時計の裏から何かの鍵を取り出した。

龍東「これは……?」

加蓮「それは隠し財産の鍵よ……あなたにその鍵を守ってほしいの……」

龍東「わかった……この鍵も守ってみせるよ」

加蓮「ごめんなさい……なにもかもあなたに押し付けてしまって……」

龍東「謝ることないさ!困ったときはお互い様だろ?」

加蓮「ありがとう……成風さんはやさしいね……」

龍東「そうかい?」

成風は加蓮に財産の在り処を教えてもらい20年前に隠した北条家の隠し財産を発見することに成功した。

龍東「これが…… 北条家の隠し財産……」

カメレオン強化怪人「その箱を渡してもらうぞ！」

龍東「お前に渡すものか！…… ライダー変身！」

龍東は仮面ライダーブラックサンダーに変身してカメレオン強化怪人と戦闘を開始した。

カメレオン強化怪人は戦闘では不利と見たか体の色を変え撤退した。

ブラックサンダー「手強い怪人だった…… まさにカメレオンだ……」

ブラックサンダーは成風龍東の姿に戻り城南大学へ向かった。

龍東は城南大学に着くと研究所へと向かった。隠し財産を持ち込み友人の赤羽根に調査を依頼した。

赤羽根「そういうことならまかせてよ！」

龍東「赤羽根…… 頼んだ……」

赤羽根は隠し財産が入っている箱を開けるため鍵穴に鍵を差し込みまわそうとするが鍵が錆びているのか折れてしまった。

赤羽根「あちゃ〜鍵が折れちゃった…… こうなったら南京錠を切るしかねえな……」

赤羽根が南京錠を切るためあらゆる工具を使うが傷ひとつつけられなかった。

戦闘員「イー!隠し財産が持ち込まれた場所が判明しました」

カメレオン強化怪人「どこだ!」

戦闘員「城南大学生化学研究所です」

ガルード首領「カメレオン強化怪人……取り戻してくるのだ……北条家の莫大な財産を我がガルードのものにするのだ……」

カメレオン強化怪人「イー!」

城南大学生化学研究所に持ち込まれたことを察知したガルードは深夜城南大学に侵入した。

カメレオン強化怪人「よし!引き上げるぞ!」

戦闘員「イー!」

引き上げる途中戦闘員の1人が何者かに捕まり気絶させられた。

龍東「へへ、悪いな……この服ちよつとの間借りるぞ」

カメレオン強化怪人「おい!最後の奴遅いぞ!」

戦闘員(龍東)「すみません……」

カメレオン強化怪人「まあいいだろう……早くトラックに乗り込め!」

戦闘員(龍東)(これでバレずに奴らの秘密基地に向かうことができる……)  
トラックは西の方に向かう。そしてガルード秘密基地に着いた。

カメレオン強化怪人「首領…………… 隠し財産を持ってきました……………」

ガルード首領「ごくろうであったカメレオン強化怪人…………… しかし貴様は隠し財産と共にネズミ一匹をここへ連れてきてしまった……………」

カメレオン強化怪人「な…………… なんですと…………… !?」

戦闘員（龍東）（しまった…………… バレたか……………）

ガルード首領「右から5番目の戦闘員…………… マスクを取れ……………」

カメレオン強化怪人「早くマスクを取れ！」

龍東「クソ…………… ! バレてしまつては仕方がない……………」

ガルード首領「貴様の行動は私にはお見通しなのだよ…………… 成風よ」

変装がばれ龍東は仮面ライダーブラックサンダーに変身し戦闘員たちと戦う。

しかしガルード首領が北条を人質にとつたためブラックサンダーは制止せざるを得なくなった。

ブラックサンダーが足を止めると床が開きブラックサンダーは深い穴へと落ちてしまった。

脱出しようとジャンプしたが床が閉じてしまいブラックサンダーは閉じ込められてしまったのだ。

## 第6話 激闘!カメレオン強化怪人 (後編)

密室に閉じ込められてしまったブラックサンダーすると天井が降りてきたのだこのままでは潰されてしまう。

ブラックサンダーは潰されまいと天井を支えるがなんと変身が解けてしまったのだ。

龍東「しまった! エネルギーが……」

仮面ライダーブラックサンダーのエネルギーは無限ではない。

蓄積されていた風力や電力がなくなると変身が解けてしまうのだ。

カメレオン強化怪人「ははは!! そのまま押し潰されるがいい」

龍東「まで: : !! その前にその箱を確認しなくていいのか?」

カメレオン強化怪人「どうゆうことだ?」

龍東「お前が持ってきた箱は偽物だ!」

カメレオン強化怪人「な……なんだと!」

カメレオン強化怪人が箱を確認するとたしかに偽物の箱だったのだ。

カメレオン強化怪人「き……きさま……!!」

龍東「こつちだってな…… お前たちの行動は…… お見通しなんだ……」



カメレオン強化怪人「本物の箱はどこだ!!」

龍東「ここから出せば……話してやる……」

ガルーダ首領「出してやれ……その男が言っていることは本当だろう……」

龍東「さすが首領……話がわかる……」

カメレオン強化怪人は龍東を穴から出した。

本物の箱の在り処を聞き出すと龍東を牢へぶちこんだ。

そこには偶然捕らえられていた北条加蓮の母がいた。

加蓮母「あなたは昨夜の……」

龍東「話は後です……ここから脱出しましょう……娘さんがあなたの帰りを

待ってます……」

加蓮母「わかったわ……」

龍東が牢を蹴破り脱出した。

すぐさま戦闘員が襲ってきたがなぎ倒し北条と共にガルーダ秘密基地からの脱出に成功した。

美波「ねえ……おやじさん……本当にここにガルーダが来るんですか？」

立花「ああ……奴らは間違いなくここに来る……」

立花藤兵衛と新田美波は本物の箱がある阪神工業大学でガルーダの出現を待ち構え

ていた。

立花「しかし前にもこんなことがあったな……」

美波「そうなんですか？」

立花は以前にもここを訪れたことがあるのだ。

シヨツカーからナチスの鉄箱を守るために。

立花「しかし……美波の助手姿は結構似合ってるな……」

美波「そ……そうですか☒☒」

立花「ああ、龍東が見たら喜ぶぞ」

美波「ええ!? そんなにですか! (今度試してみようかな……)」

そんな会話をしているとガルーダが襲撃してきた。

カメレオン強化怪人「見つけたぞ! その箱をこつちによこせ!」

立花「誰がお前らなんかに渡すか!!」

カメレオン強化怪人「ならば力づくで!」

いくら立花といえどただの人間。

強化改造人間に敵うはずもなくあつという間に叩きのめされてしまった。

戦闘員「この2人はどうしますか?」

カメレオン強化怪人「この2人は大事な人質だ……一緒に連れて行け!」

戦闘員「イー！」

立花と美波は箱ともどもガルーダに連れ去られてしまった。

龍東は加蓮母を自宅まで送ると急いで阪神工業大学へと向かった。

しかし龍東が着くころにはもうだれもいなかった。

龍東「クソ……！ やられたか……！！」

すると机の上に置き手紙があった。

内容は

“立花藤兵衛と新田美波を返してほしければこの場所へ来い”

龍東は急いで指定された場所へ向かった。

立花と美波を助けるために。

指定された場所へたどり着くとそこは遊園地。

辺りを見回すと敷地内の鉄塔の最上階に立花と美波を発見した。

龍東「おやつさん……美波……今いくぞ！」

龍東は鉄塔の階段を駆け上がる。

そして最上階にたどり着いた。

美波「龍東!! 来ちゃダメ!! これは罠よ!!」

立花「美波の言うとおりで!! 今すぐ逃げろ!!」

龍東「おやつさんたちを見捨てるわけには行かない…今助けるぞ!!」

龍東が立花たちに近づこうとした時立花たちの後ろからカメレオン強化怪人が現れたのだ。

カメレオン強化怪人「待っていたぞ……成風龍東よ……」

龍東「おやつさんたちをどうするつもりだ!!」

カメレオン強化怪人「コイツらはお前を倒すための人質だ……やれ!」

カメレオン強化怪人が命令を出すとどこからか戦闘員が現れ龍東を襲った。

カメレオン強化怪人(ふふふ……立花の前ならともかく……新田美波の前では

変身できまい……変身できなければやつはただの人間と変わらん……)

龍東(クソ……!美波の前で変身するわけにはいかない……どうすれ

ば……)

美波の前では変身できない龍東は生身のままで戦闘員たちと戦った。

しかし生身の体では限界があり龍東は追い詰められてしまった。

カメレオン強化怪人「生身の体でここから落ちればお前とて無事では済まないだろ

う……」

龍東「ここまでなのか……」

カメレオン強化怪人は舌を伸ばし龍東を攻撃した。

龍東は鉄塔の最上階から転落してしまった。

龍東「うわああああ……！」

立花& a m p ; 美波「龍東——！！」

カメレオン強化怪人は龍東を鉄塔の最上階から転落されると立花と美波をトラックの荷台に乗せ移動を開始した。

美波「うう……うう……龍東……」

立花「大丈夫だ……！龍東が死ぬはずがない……！」

カメレオン強化怪人は北条家の隠し財産が埋まっている場所へ着くと立花たちを連れていった。

そこには龍東が助けたはずの加蓮母と娘の加蓮の姿があった。

ガルルーダは龍東が去った後再び北条を襲撃したのだ。

カメレオン強化怪人「北条よ……お前が案内しろ……この地図の通りに……」

北条「はい……」

実は箱の中身は北条家の隠し財産の在り処を示した地図だったのだ。

北条が案内するとひとつの十字架がたっていた。

カメレオン強化怪人「ほほう、ここに北条家の隠し財産が埋まっているのか……掘

り出せ……!」

戦闘員たちが掘っている棺が出てきた。

カメレオン強化怪人「この中に隠し財産が……」

立花「ちくしょう…… 隠し財産がガルーダの手に渡っちゃうのか……」

北条「ごめんなさい…… 他に方法がないの……」

カメレオン強化怪人が棺に手をかけ棺を開けるとそこには北条家の隠し財産ではなく仮面ライダーブラックサンダーが入っていたのだ。

カメレオン強化怪人「ぶ…… ブラックサンダー……!」

ブラックサンダー「カメレオン強化怪人、覚悟しろ!」

カメレオン強化怪人「やれ!ブラックサンダーを始末しろ!」

戦闘員がブラックサンダーに襲いかかるがキック・パンチ・投げ技で次々になぎ倒しカメレオン強化怪人と一騎打ちとなる。

カメレオン強化怪人は舌を伸ばし攻撃するがブラックサンダーに避けられ強力なパンチをあげせられる。

次に体の色を変化させ周囲に溶け込むがすぐにブラックサンダーに見破られた。

ブラックサンダー「ブラックサンダー瓦割り!!」

カメレオン強化怪人「ぐはああああ……」

ブラックサンダー「ブラックサンダーキック!!」

カメレオン強化怪人「ぐわはああああ……!!」

ブラックサンダーがその場を立ち去ろうとしたとき後ろからカメレオン強化怪人が問いかけた。

カメレオン強化怪人「ひとつだけ教えろくれ…… 隠し財産をどこにある……」

ブラックサンダー「お前たちが来る前に別の場所に移し変えたのさ」

カメレオン強化怪人「そうか……」

そう言うときカメレオン強化怪人は爆散した。

龍東「本当に捨てるんですか？」

加蓮母「ええ…… また悪い奴らに狙われないためにも……」

龍東「そうですか……」

北条は隠し財産を海に捨てたのだ。

加蓮母「本当にありがとうごさいました…… いろいろとご迷惑をおかけしました」

龍東「いえいえそんなご迷惑だなんて……」

加蓮母「なんとお詫びすればいいのか……」

龍東「気にしないでください、あなたも無事で娘さんも無事だったんですからそれで

十分ですよそれでは」

加蓮 「ばいばい成風さん♪」

龍東 「ばいばい」

龍東はバイクを走らせ帰っていった。

加蓮 「ねえ…… お母さん」

加蓮母 「なに？」

加蓮 「アタシ成風さんのこと好きになっちゃった……」

☒☒

加蓮母 「まあ♪ふふ♪」

こうして成風龍東の活躍によって親子が守られた。

しかしそれが恋心に火をつけたことを成風龍東は知るよしもない。

さて次にガルーダはどんな強力な怪人を送り込んでくるのか。



## 第7話 美波危うし！蜂強化怪人

美波「ここが例の眼鏡店ね……」

美波は最近ある眼鏡店で商品を購入した人々が次々と蒸発してしまふという事件を聞きつけ単身調査へ向かっていたのだ。

美波「よし…… 龍東がいなくて不安だけどやらなきゃ！」

美波は店内へと入った。

店主「いらつしやいませ！」

美波「あの…… このお店のおすすめてありますか？」

店主「そうですね…… こちらのサングラスなんかはどうでしょうか？」

美波「それじゃあそのサングラスにします」

店主「毎度ありがとうございます……」

美波は店を出るとサングラスを調べたが特に変わった様子はなかった。

美波「このサングラスじゃなかったのかな…… せっかく買ったんだし着けてみようかな……」

美波はさっそく購入したサングラスを着けた。

美波「ふふ…… 龍東似合ってるって言ってくれるかな♪」

上機嫌で立花モーターズに帰ろうとした時突然どこからか声が聞こえてきた。

「新田美波よ…… ガルーダ秘密基地へ来い……」

実は美波が購入したサングラスには特定の周波数を持つ信号や映像を受信する特殊感覚装置がしかけられていたのだ。

美波はそのままガルーダの秘密基地へ誘導されていった。

美波「…… ここは？」

蜂強化怪人「やつと目覚めたか……」

美波「あなたは…… ガルーダの怪人……!」

蜂強化怪人「その通り…… 俺は蜂強化怪人だ…… この指揮を任されているのだ」

美波「私をどうするつもりなの？」

蜂強化怪人「お前は今からこの毒ガス製造工場で働いてもらうのだ」

美波「嫌よ…… そんなこと……」

蜂強化怪人「お前に拒否権はない…… すぐに枷を着けて働かせろ!」

美波「いや…… やめて…… 離して……!」

美波の失踪を知った龍東は眼鏡店を調査していた。

龍東「あの眼鏡店……なんか怪しい……」

龍東が張り込みをしていると閉店時間となり店主が出てきた。

龍東は店主の後を追った。

龍東「この事件……必ずガルーダが絡んでいる」

店主の後を追うとある廃墟にたどり着いた。店主は廃墟の中へと消えていった。

龍東「なるほどここがガルーダの秘密基地か……よし」

「ライダー……変身！」

龍東は仮面ライダーブラックサンダーに変身して廃墟の中へと入った。

見張りの戦闘員から身を隠しながら進みとうとう指令室へとたどり着いた。

ブラックサンダー「ここが指令室か……」

蜂強化怪人「待っていたぞ……ブラックサンダー!!」

ブラックサンダー「貴様がガルーダの新しい強化改造人間か……!」

蜂強化怪人「そうだ……ブラックサンダーよこれを見るがいい」

蜂強化怪人がレバーを引くと蒸発した人々が強制労働させられていたのだ。その中

には新田美波の姿があった。

ブラックサンダー「美波……! 貴様……今度は何をたくらんでいる」

蜂強化怪人「お前に教える義理はない」

ブラックサンダー「ならば……」

ブラックサンダーは戦闘を開始した。

蜂強化怪人に強烈なパンチを浴びせさらに投げ技をくらわせた。

蜂強化怪人はこれ以上の戦闘は不利とみてあとの戦闘は戦闘員に任せその場を去った。

戦闘員たちを倒し美波たちを助けようとしたとき突然緊急アラームが鳴り始めた。

蜂強化怪人は秘密基地に時限爆弾を仕掛けていたのだ。

ブラックサンダーは急いでドアを蹴破り強制労働させられていた人々を助けだし脱出した。

爆発寸前で全員を無事脱出させた。基地は大爆発し消え去った。

別のガルダの秘密基地では蜂強化怪人が首領に叱られていた。

ガルダ首領「馬鹿者……！ブラックサンダーにまんまとひねられおつてその上毒ガス製造工場まで失うとは……」

蜂強化怪人「申し訳ございません……首領」

ガルダ首領「まあいい……工場はまた建てればいい話だ……蜂強化怪人

よ……貴様には新しい任務を与えよう……」

蜂強化怪人「は……！」

ガルード首領「我が憎きブラックサンダーをこの世から抹殺するのだ……！」  
 蜂強化怪人「イー！」

蜂強化怪人は仮面ライダーブラックサンダーを抹殺するべく待ち伏せをした。

龍東「あれからガルードはなんの動きも見せないな……」

蜂強化怪人「成風龍東！貴様には死んでもらう!!」

龍東「やつと出たな蜂強化怪人……！ライダー……変身」

仮面ライダーブラックサンダーに変身し2度目の戦闘となった。

蜂強化怪人はサーベルで攻撃をする。ブラックサンダーはキック・パンチ・投げ技で  
 応戦する。

ブラックサンダー「ブラックサンダーキック!!」

蜂強化怪人「ぐわはああああ……！」

美波「ねえ龍東……似合うかな……」

龍東「うん……とつても似合ってるよ……」

立花「まったく……もどかしいなあ……」

こうして成風龍東の活躍によってガルードの毒ガス製造計画はなくなつた。

しかしガルードは世界征服をあきらめたわけではない。

また新たな怪人を送り込んでくるに違いないだろう。

## 第8話 新たなる怪人!コブラ強化怪人(前編)

ある場所にあるガルードのアジトで新しい強化改造人間が誕生した。

ガルード首領「起きよ!コブラ強化怪人!」

コブラ強化怪人「うおおおおお」

このコブラ強化怪人にはあらゆる物質を溶かすガスを噴出させることができる恐ろしいキバをもった強化改造人間なのだ。

ガルードはこのコブラ強化怪人を使って金保管所の金庫の壁を溶かし、金塊を奪おうとしていたのだ。

ガルード首領「行け!コブラ強化怪人!日本の金保管所へ!」

コブラ強化怪人「イー!」

ガルード首領に命じられコブラ強化怪人は金保管所へ向かった。

コブラ強化怪人「ここか……日本の金保管所は」

コブラ強化怪人が保管所の中へ入ろうとしたとき、警備員の人に声をかけられた。

警備員「お、おい……あんたそこで何をしている?」

コブラ強化怪人が振り向くと警備員は驚いた。

警備員「ば、化け物だー！ー！」

コブラ強化怪人「逃がさんぞ!!」

コブラ強化怪人はキバからガスを噴出させ、警備員に命中すると警備員の体はみるみるうちに溶けてしまった。

コブラ強化怪人「これで邪魔者はいなくなった……」

コブラ強化怪人は金庫の前にたどり着き壁を溶かそうとしたときとんだ邪魔者が現れた。

犬「ワンワン!!」

コブラ強化怪人「な……なんだこいつ！邪魔だ！あっちいけ！」

犬「ワンワン!!」

コブラ強化怪人「こいつ……!!」

コブラ強化怪人は犬の妨害に遭い、金塊を奪うどころではなくなったので、スゴスゴと退散していった。

ガルーダ首領「バカモンが！たった一匹の犬に吠えられたぐらいで退散するやつがあるか！」

コブラ強化怪人「申し訳ございません……」

ガルーダ首領「その妨害してきた犬が邪魔ならまずその犬から消すのだ！」

コブラ強化怪人「イー！」

コブラ強化怪人は昨夜、妨害してきた犬が飼われている家に到着した。

コブラ強化怪人「ここか……」

コブラ強化怪人は家のドアをガスで溶かし浸入した。その犬がいる部屋では飼い主の長谷川ふみもいた。

ふみ「よしよしよし…… ハヤテそろそろ散歩に行くか」

ハヤテ(犬)「ワン♪」

コブラ強化怪人「その必要はない……」

ふみ「うわ！化け物！」

ハヤテ(犬)「ウウウウウ…… ワンワン！」

コブラ強化怪人「鬱陶しい！」

コブラ強化怪人がガスを噴出し、ハヤテ(犬)に命中してしまった。

ふみ「ハヤテ！」

すると警備員と同じようにハヤテ(犬)の体もみるみるうちに溶けてしまった。

ハヤテ(犬)の骨だけが残った。

コブラ強化怪人「ふん！ガルーダの邪魔をするからだ！」

ふみ「お前！ゆるさないぞ！」



学校ではダウナー系のふみが怒りをあらわにしてコブラ強化怪人に殴りかかったがやはり女子高生の力では強化改造人間に敵うはずもなくあっけなく気絶させられてしまった。

コブラ強化怪人「お前は大事な人質だ……」

コブラ強化怪人は気絶したふみを抱え家をあとにした。ガルーダの秘密基地に戻る途中仮面ライダーブラックサンダーに変身した成風龍東が立っていた。

ブラックサンダー「待て！ガルーダの強化改造人間！」

コブラ強化怪人「出たな！仮面ライダー！」

ブラックサンダーは空中高く跳び一気に間合いをつめコブラ強化怪人の顔にパンチを打ち込んだ。

コブラ強化怪人は後方へ吹っ飛んだ。

ブラックサンダーは気絶しているふみを安全な場所に非難させるとすぐさま構えた。

コブラ強化怪人はキバからガスを噴出するがブラックサンダーはジャンプでかわしキックをくらわせる。

コブラ強化怪人も応戦するものの元々戦闘用に改造されているわけではないためまったく歯が立たない。

コブラ強化怪人がもう一度ガスを噴出しようとしたがどうしたものかガスが出てこ

ない。

コブラ強化怪人「しまった… ガスがきれた…」

ブラックサンダー「今だ!ブラックサンダーキック!!」

ブラックサンダーはジャンプし、必殺のブラックサンダーキックをくらわせた。

コブラ強化怪人「ぐわはああああ」

翌日、ふみは骨になってしまった愛犬のハヤテのお墓を立てていた。

ふみ「ハヤテ…:…:ごめんな…:…:」

そこへ成風龍東が花束とドッグフードを持ってやって来た。

龍東「僕も一緒にいいかな?」

ふみ「ええ…: ハヤテも喜びます…:」

龍東とふみはお墓の前で手を合わせた。

龍東(ハヤテ君…: 君の仇はとったよ…: どうか安らかに眠ってくれ…:)

ふみ(ハヤテ…: 今までありがとう…:)

一方、ガルーダの秘密基地ではブラックサンダーに倒されたはずのコブラ強化怪人が再改造手術をうけていた!

## 第8話 甦る怪人！コブラ強化怪人（後編）

コブラ強化怪人との戦いから1週間がたったある日また新たな事件が起きていた。

立花「ん〜最近ある生物研究所に犬・猫を買い取ってもらった人々が次々と失踪しているそうだな」

龍東「まさか：：： またガルーダが：：：」

立花「その可能性は十分あり得るな」

一方でとある生物研究所では犬・猫の買い取りが行われていた。

男性「すいません：：： この子を買取ってもらえませんか？」

男性？「では：：： 奥へどうぞ：：：」

白衣を来た男性に案内され男は研究所の奥へと向かった。案内された部屋に入るとそこには同じ白衣を来た男たちが立っていた。

その時、扉の鍵がしまる音があった。

男性「！：：： これは一体どうゆうことだ！」

男性？「貴様はガルーダのコンピュータによって戦闘員候補に選ばれたのだ：：：」

男性「ガルーダ!? 一体なんなんだそのガルーダって!!」

男性? 「いづれわかるさ…… つれて行け!」

戦闘員 「イー!」

男性 「やめろ…… !! 離せ…… !! 助けてくれー!!」

男性の叫びは誰の耳にも届かず連行されていった。

実はこの生物研究所はガルダの基地になっておりその地下には強化改造人間や戦闘員を作るための施設があるのだ。

そしてガルダはなぜ犬・猫を買い取っているのか。

それには別の目的があった。

研究員主任 「どうだ…… コブラ強化怪人の再生手術は……」

研究員A 「はい! 順調に進んでいます!」

研究員B 「今日採取した血液を使えば手術は終わります!」

研究員C 「それとコブラ強化怪人を戦闘にも対応できるようにしました!」

研究員主任 「よろしい…… 引き続き頼んだぞ……」

研究員A・B・C 「イー!」

そうガルダは犬・猫を買い取ってその血液で前回の戦いに敗れたコブラ強化怪人を再生しようとしていたのだ。

研究員が今日採取したばかりの血液を飲ませるとコブラ強化怪人は目を覚ました。

コブラ強化怪人「うおおおおお」

研究員A「おお……再生手術は成功だ……!!」

研究員B「では早速能力テストだ！」

研究員たちは場所を変え再生コブラ強化怪人の能力テストを行っていた。

研究員A「それでは能力テスト開始だ」

男性A「た……たすけてくれー!!」

女性A「私たちがなにをしたっていうのよ!!」

男性B「嫌だー！死にたくないよー!!」

女性B「おうちに帰してよ……」

研究員B「やれ！再生コブラ強化怪人！」

研究員Bが再生コブラ強化怪人に命令するとキバからガスを噴出させた。

ガスを噴出された男性Aと女性Aの体はみるみるうちに溶けてしまった。

男性A「がああああーっっ!?」

女性A「痛い痛い痛い痛い痛い痛いっ!!」

男性B「うわああああーっっ!!」

女性B「いやああああーっっ!!」

研究員B「よし……まずは成功だ……次!!」

また研究員Bが命令すると次は炎を噴出させた。

男性B「うがあああああーっ!!」

女性B「ぎやあああああーっ!!」

炎を浴びせられた男女はあつという間に骨となった。

研究員B「能力テストは成功だ…あとは仮面ライダーと戦わせるだけだ…」

ガルード首領「その前に再生コブラ強化怪人にはやつてもらおうことがある」

研究員B「首領…!?やつてもらおうこととは…?」

ガルード首領「つまり…前回奪えなかった金塊だ…!」

ガルードは前回、仮面ライダーや犬の妨害にあり金塊を奪い損ねたため再生コブラ強化怪人を使って再び金塊を奪おうとしていたのだ。

ガルード首領「行け!再生コブラ強化怪人!今度こそ金塊を奪うのだ…!」

再生コブラ強化怪人「イー!」

場所が変わり横浜港、ここに時価数千億円という金塊を積み込んだフレンドシップ号が寄港しようとしていた。

しかしいきなり再生コブラ強化怪人が戦闘員を率いて襲いかかってきた。

護衛についていた警備員たちは必死に抵抗したが強化改造人間に敵うはずもなく次々に倒されていった……。

金塊は再生コブラ強化怪人たちがガルーダの手に渡った。

ところがガルーダ秘密基地には仮面ライダーブラックサンダーが先回りしていた。

ブラックサンダー「待っていたぞ！コブラ強化怪人！」

再生コブラ強化怪人「おのれ……！出たな仮面ライダー……！」

ブラックサンダー「その金塊を返してもらおうぞ!!」

再生コブラ強化怪人「そうはいかない……かかれー!!」

戦闘員「イー！」

再生コブラ強化怪人が命令すると戦闘員は次々に仮面ライダーブラックサンダーに襲いかかる。

仮面ライダーブラックサンダーは戦闘員たちキック・パンチ・投げ技をお見舞いした。

戦闘員たちを蹴散らし仮面ライダーブラックサンダーは再生コブラ強化怪人と一騎

討ちになった。

ブラックサンダー「あとはお前だけだ!!」

再生コブラ強化怪人「仮面ライダー……前回の同じ様にいくとおもうなよ……」

ブラックサンダー「どうゆうことだ……!!」

仮面ライダーブラックサンダーが問いかけると再生コブラ強化怪人は炎を浴びせた。

しかし仮面ライダーブラックサンダーはジャンプでこれをかわした。

ブラックサンダー「なるほど…炎が吐けるようになったのか…」

これには仮面ライダーブラックサンダーも驚く。

再生コブラ強化怪人「次は…!」

次に再生コブラ強化怪人はキバからガスを噴出した。仮面ライダーブラックサンダーはこれもジャンプでかわした。

ブラックサンダー「今度はこっちから行くぞ!!」

仮面ライダーブラックサンダーは飛び蹴りをしてそこから右パンチ左パンチを交互にヒットさせ再生コブラ強化怪人を投げ飛ばす。仮面ライダーブラックサンダーの猛攻撃に再生コブラ強化怪人はフラフラになっていた。

ブラックサンダー「今だ!ブラックサンダー回転投げ!!」

仮面ライダーブラックサンダーは技の1つ「ブラックサンダー回転投げ」で再生コブラ強化怪人を投げ飛ばし

そして…

ブラックサンダー「ブラックサンダーキック!!」

彼の必殺技である「ブラックサンダーキック」を浴びせた。

再生コブラ強化怪人は爆散した。

こうして金塊を狙ったガルーダの作戦は失敗に終わったのだ。



しかしガルーダはまだ世界征服を諦める気はないようだ。仮面ライダーブラックサンダーⅡ成風龍東の戦いはまだ続くのだ。

## 第9話 打倒仮面ライダーブラックサンダー!キメラ強化怪人

ある日のガルルダ秘密基地ではまた新たな怪人が生み出されていた。

その名は「キメラ強化怪人」。この怪人は仮面ライダーブラックサンダーを倒すために生み出された怪人でこれまで敗れた歴代強化怪人の長所を多く取り入れた強化改造人間である。

研究員主任「首領：…キメラ強化怪人ができました」

ガルルダ首領「それではさっそく仮面ライダーを倒すのだ!!」

研究員主任「御言葉ですが首領：…キメラ強化怪人は歴代強化改造人間の長所を多く取り入れたため若くて美しい女性の生き血が必要なんです：。」

ガルルダ首領「バカモノ!!ならばさっさと若くて美しい女性の生き血を戦闘員たちに集めさせるのだ」

研究員主任「イー!!」

そうしてガルルダは若くて美しい女性の生き血を集めるべく結婚式場、女子校、芸能事務所など若くて美しい女性がいる場所を次々と襲撃しその生き血を集めていた。

その頃立花モーターズでは立花藤兵衛のもとにあるハガキが送られていた。

立花「ほく早苗の奴とうとう結婚するのか」

美波「早苗さんつてたしか龍東の知り合いの…」

立花「そうそうまだ龍東が幼い頃よく面倒を見てもらっていたよ」

夕美「わあ、いいな、結婚♪アタシも早く結婚したいな♪」

立花「夕美はかわいいからすぐいい人見つかるだろうよ」

夕美「えへへ☒そうかな☒」

美波「そうよ！夕美ちゃんきつとすぐにいい人見つかるよ！」

夕美「でも…美波ちゃんには確実に先を越されちゃうな…」

美波「え？なんで？」

夕美「だって美波ちゃんにはもういるじゃない」

美波「え…ええ！誰!？」

夕美「龍東くん」

美波「ち…ち…違うよ!!龍東とは別にそうゆう関係じゃ…☒☒」

立花「凶星だな…」

美波「おやしさん!!」

そして片桐早苗の結婚式当日立花モーターズの面々は列席していた。

しかしその中に成風龍東の姿はなかった。

美波「ねえ… おやしさん龍東は？」

立花「それが昨日から連絡がつかないんだ」

美波「龍東… 大丈夫かな…」

立花「ま、その内来るだろ」

そして片桐早苗の結婚式が始まった。

純白のウエディングドレスに身を包んだ新婦と黒いタキシードを来た新郎が入場してきた。

二人は誓いのキスを交わし結婚式は終わりを迎えた。

立花「早苗!! 結婚おめでとう!! 幸せにな!!」

早苗「ありがとうおやしさん!!」

新郎「それではみなさんありがとうございました」

新郎と新婦の二人は教会を後にした。

新郎「さあくここから家までドライブだ」

早苗「ふふ♪安全運転でお願いね♪」

新郎「ああもちろんだ」

早苗「あら… あれなにかしら？」

早苗が指をさした方向にはなんとキメラ強化怪人がいたのだ。

キメラ強化怪人「貴様の生き血もらった…!!」

新郎「バ…バケモノ!?…う!!」

早苗「あなた…!?!」

新郎はキメラ強化怪人強烈なパンチを受け気を失ってしまったのだ。

早苗はキメラ強化怪人に連れ去られようとしていた。

その時向こうからターボサイクロンに跨がった仮面ライダーブラックサンダーがやって来たのだ。

ブラックサンダー「そこまでだガルーダの強化改造人間!!」

キメラ強化怪人「出たな…貴様から片付けてやる!!」

仮面ライダーブラックサンダーとキメラ強化怪人の戦いが始まった。

ブラックサンダーはキメラ強化怪人の腹にパンチを打ち込むが全く効いていない。

今度はキメラ強化怪人がブラックサンダーを蹴り飛ばす。

ブラックサンダーは後方へと吹き飛ばされる。

キメラ強化怪人は立ち上がりとうとするブラックサンダーの背中を何度も何度も踏んだ。  
だ。

ブラックサンダーは一瞬の間隙をついてキメラ強化怪人の脚を払った。

ブラックサンダーはキメラ強化怪人に馬乗りになつて連続パンチを食らわせた。

キメラ強化怪人はブラックサンダーの背中を蹴つて脱出するとそのまま飛んで逃げていった。

ブラックサンダー「恐ろしい怪人だった…」

早苗「あ…あの助けてくれてありがとうございました…あなたは?」

ブラックサンダー「名乗るほどの者ではありません…」

仮面ライダーブラックサンダーはターボサイクロンに跨がりどこかへ走り去つてしまった。

変身を解除して龍東とは立花に今日の事を報告した。

立花「そうか…そんなことがあつたとは…」

龍東「ええ…しかし恐ろしい怪人でした」

立花「でも…このまま奴等が終わるはずない…また仕掛けてくるだろうな…」

龍東「俺もそう思います」

立花「そういえば最近…若い女性が狙われるという事件が相次いでいたな…」

龍東「犠牲者が増える前になんとか阻止できれば…」

立花「だつたら俺にいい考えがあるぞ」

翌日なぜか龍東はタキシードに身を包んでいた。

龍東「なぜだ……」

立花「やっぱり若くて美しい女性といえは結婚式だなと思っとな」

龍東「だつたらおやつさんでもよかつたじゃん……」

早苗「似合ってるわよ龍東くん♪」

立花たちがやり取りをしているとウエディングドレスに身を包んだ美波がやって来た。

美波「ど……どうかな……」

龍東「と……とつても似合ってるよ……」

美波「ありがとう……」

立花 & a m p ; 早苗 (そのまま結婚しろ)

立花が考えた作戦は龍東と美波で結婚式を行いキメラ強化怪人を誘きだすことである。

龍東と美波の結婚式が行われた。

そして誓いのキスの時が来た。

龍東「誓いのキスもするの!？」

立花「当たり前だろ」

早苗「やらないと結婚式にならないでしょ」

夕美「これも作戦の内だよ♪」

龍東「なら…やるか…」

美波「ええ…本当に…

龍東「美波…我慢しろ…」

美波「う…うん…わかった…

そして龍東と美波はキスを交わした。

龍東& a m p ; 美波「…

立花& a m p ; 早苗（計画通り）

結婚式が終わり二人は立花が用意していた車に乗り込んだ。

立花の予想通りキメラ強化怪人が飛んで来た。

立花たちは車を降りしばらく走った。

美波はドレスで走れないため龍東がお姫様だっこして走った。

美波「龍東大丈夫？重くない？」

龍東「全然重くないよ」

キメラ強化怪人が龍東たちの前に降りて来た。

キメラ強化怪人「無駄だ…我々ガルーダからは逃げられないぞ」

龍東「おやっさん…美波を頼む」



立花「わかった…」

美波を立花に任せ龍東は人のいない場所へ向かった。

龍東「ライダー… 変身…!!」

仮面ライダーV3に似た変身ポーズをとり飛び上がると龍東の姿から仮面ライダーブラックサンダーに変わった。

愛車であるターボサイクロンに跨がり美波たちのもとへ向かった。

キメラ強化怪人「来たな仮面ライダー!!今度こそ決着をつけてやる!!」

ブラックサンダー「行くぞ!!とお!!」

ブラックサンダーがターボサイクロンから飛び降り戦闘を開始した。

ブラックサンダーはキメラ強化怪人に飛び蹴りをし後方へと吹き飛ばした。

すぐさまキメラ強化怪人は立ち上がり車の上まで飛翔した。

ブラックサンダーも続いて車の上へとジャンプした。

車の上からブラックサンダーはキメラ強化怪人を投げ飛ばした。

ブラックサンダーは車の上からまた飛び降りをするがキメラ強化怪人に避けられパ  
ンチを食らってしまう。

ブラックサンダー「まずい… このままでは負ける…」

立花「ライダー!!ターボサイクロンを使い!!」

ブラックサンダー「よし!!」

ブラックサンダーはターボサイクロンの停めてあるところまで大ジャンプして跨がりそのままターボサイクロンを走らせた。

キメラ強化怪人「待て!!逃げるのか!!」

ブラックサンダー「逃げるつもりなどない!!」

ブラックサンダーはターボサイクロンを発進させキメラ強化怪人に向かって走らせる。  
る。

キメラ強化怪人は避けようと飛び上がった。

ブラックサンダー「ブラックサンダーターボサイクロンアタック!!」

ブラックサンダーはターボサイクロンごとジャンプしキメラ強化怪人に体当たりした。

キメラ強化怪人「ぐわああああああ……!!」

キメラ強化怪人は爆散した。

ブラックサンダーはそのままどこかへ走り去った。

後日立花モーターズでは龍東と美波がやり取りしていた。

龍東「ただいま」

美波「お帰りなさい……お風呂にする?ご飯にする?それともわ・た・し?」  
☒☒

龍東「じ……じゃあご飯で……」

美波「わ……わかった……」

強敵キメラ強化怪人を打ち破った仮面ライダーブラックサンダー  
しかしガルードは新たな怪人を作り出そうとしている。

## 第10話 狙われた四姉妹!ヤモリ強化怪人

ある日青木光学研究所では以前仮面ライダーブラックサンダーに助けられた青木慶の姉青木麗があるものを開発した。

麗「よし……明……いくぞ」

明「ええ……姉さん」

麗が引き金を引くと光線が出てその光線を浴びたねずみがたちまち骸骨になってしまった。

麗「実験は成功だ……」

明「姉さん……これを学会で発表するの……?」

麗「いや……これを学会で発表して方が一犯罪組織の手に渡ってしまったら大変なことになる……このチェンジボンライトの設計図はマイクロカプセルに保管して隠すことにしよう……」

明「わかりました……」

青木麗博士が開発したのは生物を瞬く間に骸骨にしてしまう恐ろしい道具「チェンジボンライト」だ。

青木麗博士はこのチェンジボーンライトが犯罪組織に悪用されないように設計図をマイクロカプセルに収め秘密の場所に隠すことにしたのだ。

ガルードダの情報工員「なるほど… チェンジボーンライトか…」

ガルードダは日本中の至るところに情報網を張り巡らしておりなんとガルードダの情報工員に聞かれてしまったのだ。

ガルードダ首領「なるほど… チェンジボーンライトを隠すことにしたのか…」

情報工員「はい首領… たしかに隠すことにするとおりました」

ガルードダ首領「その隠し場所はどこだ？」

情報工員「それが… 隠し場所までは行っておりませんでした…」

ガルードダ首領「仕方あるまい… ヤモリ強化怪人！ 出番だ!!」

ヤモリ強化怪人「キエー!!」

ガルードダ首領「青木麗の自宅に潜り込み隠したマイクロカプセルを奪うのだ!!」

ヤモリ強化怪人「イー!!」

ヤモリ強化怪人は青木麗の自宅に到着すると壁に張り付き中へと潜り込んだ。

その頃家の中では青木麗の妹の青木聖と青木慶が晩御飯の準備をしていた。

慶「今日も姉さんたち遅いのかな？」

聖「さあ… そればっかりはわからんな…」

慶「頑張りすぎて倒れなきやいいけど…」

聖「あとは犯罪組織とかに目をつけられてないといいが…」

慶「今回麗姉さんたちが開発したチェンジボーンライトが犯罪組織なんかの手に渡ったら日本が大混乱になってしまうもんね…」

聖「ああ……」

二人がそんな会話をしていると突然停電が起こった。

慶「きやつ!!」

聖「なんだ!?!」

突然の停電に驚いた二人の前に強化改造人間・ヤモリ強化怪人が現れた。

聖「誰だ!!お前は……!!」

慶「バ……バケモノ……」

ヤモリ強化怪人「俺はヤモリ強化怪人……貴様らの姉が開発したチェンジボーンライトの設計図は我々ガルーダがもらい受ける!!」

聖「な……なんだと!?!」

慶「そんなこと……させません!!」

ヤモリ強化怪人「ならば力づくで奪うまでだ……つれて行け!!」

戦闘員「イー!」

聖「な……何を……!!」

慶「やめて……!! 離して……!!」

ヤモリ強化怪人「よし……これであとはマイクロカプセルを探すのみ……」

青木麗の妹たちを誘拐した後ヤモリ強化怪人は家中を探しようとうマイクロカプセルを見つけ出したのだ。

ヤモリ強化怪人「あつたぞ……！マイクロカプセルがあつたぞ……ひひひひひ」

マイクロカプセルを秘密基地まで持ち帰りガルダはチェンジボーンライトを開発することに成功したのだ。

研究員主任「首領……チェンジボーンライトが完成いたしました」

ガルダ首領「そうか……では早速試してくるのだヤモリ強化怪人……」

ヤモリ強化怪人「イー！」

ヤモリ強化怪人はチェンジボーンライトを使って次々と罪もない人々を骸骨にしているのだ。

ガルダ首領「なかなか素晴らしい……このチェンジボーンライトを更に巨大化させるのだ……そして飛行機やコンピュータを破壊するのだ!!」

研究員主任「しかし首領……そのためには青木麗の協力が必要です……」

ガルダ首領「ならば連れてくるのだ青木麗を!!」

研究員主任「イー！」

ある日助手であり妹の青木明を乗せて青木麗は車を走らせていたがその途中ヤモリ強化怪人たちの襲撃を受ける。

麗「なんだ… お前たちは…？」

ヤモリ強化怪人「青木麗… 貴様には我々ガルーダの秘密基地に来てもらう」

麗「ガルーダ…？なんだそれは…」

明「まさか… 犯罪組織なんじゃ…」

麗「お前たちの目的はなんだ…」

ヤモリ強化怪人「巨大チェンジボンライトを開発することだ…」

麗「ならば協力はできん…」

ヤモリ強化怪人「貴様に選択の余地はない… 連れていけ!!」

戦闘員「イー！」

麗「何なんだ… !!こいつら… !!」

明「ち… ちよつと!!どこさわって…」

このままでは連れていかれると思ったその時車の後ろの方から仮面ライダーブラツクサンダーがやって来たのだ。

ヤモリ強化怪人「やはりきたか… 仮面ライダー」



ブラックサンダー「ガルルーダの新たな強化怪人… 貴様らの好きにはさせない… !!」

ヤモリ強化怪人「仮面ライダー… !! 貴様と遊んでる暇はないのだ… 戦闘員どもやれ!!」

ヤモリ強化怪人が命令すると戦闘員たちはブラックサンダーと戦闘を開始した。

ブラックサンダーは戦闘員を投げ飛ばす。

戦闘員はブラックサンダーにキックやパンチを打ち込む。

ブラックサンダーは華麗に交わしカウンターを決める。

次々と戦闘員が倒されていくのを見て形勢不利と判断したヤモリ強化怪人は青木麗だけを連れ去り逃げてしまった。

ブラックサンダー「しまった… !!」

青木麗を連れ去ったガルルーダは協力を求めている。

青木麗「だから何度も言っているだろ… 協力はしないと…」

ガルルーダ首領「強情な方だ… しかしこれを見ても同じことが言えるかな？」

ガルルーダ首領が命令すると戦闘員が先に捕らえていた妹たちを連れてきた。

聖&amp;mp;慶「姉さん!!」

麗「聖… !! 慶… !!」

ガルード首領「協力しないと言い続けるのなら妹たちはどうなるか……」

麗「ま……待て!!わかった……協力する……協力するから妹たちを助けてくれ……」

ガルード首領「よかろう……ただし助けるのは巨大チエンジボーンライトを完成させてからだ」

ガルード首領に脅され青木麗は巨大チエンジボーンライトを完成させた。

ガルードは実験をするために外へ運び込んだ。

ヤモリ強化怪人「ご苦労だったな青木麗……それでは実験を開始する」

青木麗「……………」

聖&amp;mp;慶「……………」

ヤモリ強化怪人が飛行機に照準を合わせようとしたとき仮面ライダーブラックサンダーが現れた。

ブラックサンダー「待て!!」

慶「あの人はあの時の……」

聖「慶……知ってるのか……」

慶「ええ……以前助けてもらったの」

ヤモリ強化怪人「また来たか仮面ライダー!!」

ヤモリ強化怪人は実験を中断してブラックサンダーと戦闘を開始した。

ブラックサンダーはヤモリ強化怪人の腹にパンチを打ち込んだ。

パンチを受けたヤモリ強化怪人は怯むがブラックサンダーに掴みかかった。

ブラックサンダーはヤモリ強化怪人の手を払って投げ飛ばした。

青木麗は戦闘員の隙を突いてチェンジボーンライトに向かって走り出した。

ヤモリ強化怪人「しまった!! や… やめろ… !!」

青木麗「食らえ!! バケモノ!!」

ヤモリ強化怪人「ぎゃあああああああ… !!」

青木麗が巨大チェンジボーンライトのスイッチを押しヤモリ強化怪人は消滅した。

青木麗「道具っていうのは使い方や使う人によって善にも悪にもなるものだ」

ブラックサンダー「このチェンジボーンライトはわたしが破壊します」

青木麗「お願いします…」

こうして巨大チェンジボーンライトは破壊され設計図は焼却処分してこの世から抹消された。

# 第11話 仮面ライダーブラックサンダーvs怪人軍団 ウマ強化怪人

ある夜、原子力研究所では二人の警備員が見回りをしていた。

警備員A「いや〜見回りっていつてもなにも起こらないから暇だよな〜」

警備員B「ほんとほんとと毎日こうだと楽なんだよな〜」

警備員A「お：： おい！あれはなんだ!!」

警備員Aが指を指した方向には蝙蝠のバケモノが飛んできた。

蝙蝠強化怪人「キキー！」

警備員A「ぎやああああああっつっ!!」

警備員B「バ：： バケモノめ!!」

警備員Bが逃げようと振り返ったそのときサソリのバケモノがそこに立っていた。

サソリ強化怪人「シユシユ」

警備員B「ああああああっつっ!!」

こうして二人の警備員は殺害されてしまった。

二人の警備員を殺害したのはかつて仮面ライダーブラックサンダーに倒された蝙蝠

強化怪人とサソリ強化怪人だ。

ガルダは原子力研究所を襲撃するために二人の強化改造人間を再生したのだ。

蝙蝠強化怪人「よし……片付いたな……」

サソリ強化怪人「早速中へ入るか……」

サソリ強化怪人が研究所へ入ろうとした時、突然電気がはしつたのだ。

サソリ強化怪人「ぐわああああああああつっつ!!」

蝙蝠強化怪人「おい!!大丈夫か!!」

サソリ強化怪人「バ……バリヤだ!!この鎖にバリヤがはつてある!!」

蝙蝠強化怪人「なに?バリヤだとそれなら……」

蝙蝠強化怪人が鎖を飛び越えようとしたがそれも無駄に終わった。

蝙蝠強化怪人「ぐわああああああああつっつ!!」

サソリ強化怪人「ここは一旦引き下がろう……」

二人の強化改造人間は基地に戻り首領にこのことを報告した

首領「バカモンっ!!まんまとそのバリヤに捻られてきたのか!!」

蝙蝠強化怪人「しかし首領……あのバリヤを破壊するのは我々の力だけではどうに

も……」

首領「やる前からあきらめるなバカモンが!!なにか策はないのか?」

研究員主任「首領……それでしたらとっておきの物があります」

首領「おお！それはなんだ？」

研究員主任「これです……」

研究員主任の手にはボールのようなものがあつた。

研究員主任「これはバリヤ破壊ボールです……これがあればバリヤは一撃で破壊できます……」

首領「でかしたぞ!!それでは早速使おうではないか!!」

研究員主任「お言葉ですが首領……このバリヤ破壊ボールはその破壊力ゆえ30mの距離から投げ込まなければならぬのですがガルーダの強化改造人間の中にそのような能力を持ったものがないのです……」

首領「バカモンっ!!ならばその能力を持った強化改造人間を作ればいいのだ!!」

場所は変わりサッカー場ではサッカーの試合が行われていた。

ガルーダが狙いをつけたのは殺人シユートとして恐れられているプロサッカー選手の不動明王だ。

サッカーの試合が終わり不動は選手控え室へと向かっていった。

不動「ま……俺がいればこんなもんだろ」

鬼道「あまり自分を過信するなよ不動……」

不動「はいはいわかってますよ鬼道くん」

佐久間「鬼道：．．そろそろ行こう」

鬼道「ああ不動行くぞ」

不動「わかりい俺はちと休憩してからいくわ」

鬼道「わかった：．．あまり遅くなるなよ」

不動「ああ」

そう言つて鬼道と佐久間は選手控え室を後にした。

二人が選手控え室を出た途端どこからか笑い声がしてきた。

？「ケケケケ：．．」

不動「誰だ!!笑つてやがるのは!!」

？「わたしだよ：．．不動明王くん：．．」

そう答えると壁から笑い声の主が正体を現した、その正体はカメレオン強化怪人。

この怪人もかつて仮面ライダーブラックサンダーに倒された怪人の一体だ。

不動「なんだてめえは？」

カメレオン強化怪人「不動明王：．．君はガルーダに選ばれた：．．わたしと一緒に来て

もらおう：．．」

不動「ふざけんなっ!!このバケモノがっ!!」

不動はカメレオン強化怪人を蹴飛ばし、ドアから出ようしたがそこには強化改造人間  
第1号・蜘蛛強化怪人が待ち構えていた。

蜘蛛強化怪人「我々からは逃れられない…。」

蜘蛛強化怪人は口から糸を吐き出し不動を捕らえた。

そして不動はそのまま連れ去られ強化改造人間にされてしまった。

研究員主任「首領…ウマの脚力を持つ新たな強化改造人間ができました…これで  
バリヤを破壊することができます…。」

そのころ片桐早苗と新田美波は原子力研究所近辺の張り込みをしていた。

早苗「あの車怪しいわ…研究所の周りを何周もしている…。」

美波「あ…車が研究所から離れて行きます」

早苗「さくって尾行開始よ！」

早苗は車を走らせ、不審な車を追っていくとある屋敷にたどり着いた。

早苗「こんなとこに屋敷があったなんて知らなかったわ…。」

美波「わたしも知りませんでした…。」

早苗「とりあえずあたしは中へ入ってみるわ…美波ちゃんはここで待っていてね…。」

美波「わかりました…くれぐれも気をつけてくださいね」

早苗「わかったわ…。」



そう言つて早苗は門を飛び越え中へ入つていった。

屋敷の中には人の気配がしない。

屋敷の中を歩いているうちに早苗はある部屋にたどり着いた。

その部屋には白い布がかけてある人形のようなものがあつた。

早苗「何かしらこれ？」

早苗が恐る恐る布をはがすとそこにはキメラ強化怪人が立っていた。

早苗「ひつ!! っつてだたの人形じゃないびっくりしたわもうっ!!」

布をはずしていくと今までに仮面ライダーブラックサンダーに倒された10体の強化改造人間の姿があつたのだ。

早苗「まるで本物みたいね... 今にも動き出しそうで怖いわ...」

？「なくにしてるのかな？ 人の家で？」

早苗「っ!!」

早苗が驚いて振り向くとそこには強化改造人間にされてしまったはずの不動明王が立っていた。

早苗「ごめんなさい... 勝手に入つてしまつてすぐに出ていくわ...」

不動「ま... いいさ... それよりもよくできてるでしょその人形たち...」

早苗「え... ええ... よくできてるわ（あまりいい趣味だとは言えないけど...）」

不動「作るのにさうとう苦労したさ……」

早苗「そ…… そうなの」

不動「ああ……」

早苗「それではあたしはこれでおいとまさせてもらうわ……」

不動「ああ…… 気をつけて帰りなよ……」

早苗は部屋を後にした。

不動「ふうく危ない危ない…… もう動いていいぞ……」

不動が命令するとそれまで人形のように動かなかった強化改造人間たちが一斉に動き出した。

ヤモリ強化怪人「なぜ始末しなかった…… せっかくのチャンス…… !!」

不動「うるせえよ…… 今FBIの犬を殺しちまったらあとあと面倒だろうが……」

カマキリ強化怪人「しかし…… また来るぞあのFBIの女……」

不動「まかせろあの女は俺が始末する……」

そう言って不動がフェイスマスクをゆっくり剥がすとウマ強化怪人の顔が現れた。

ウマ強化怪人「ヒヒーン!!」

その頃、早苗たちは屋敷を後にして立花モーターズへ向かっていた。

早苗「あの屋敷にはガルーダに繋がるものはなにもなかったわ……」

美波「あつたのは… ガルーダの怪人の人形だけ…」

早苗「そう…」

そんな会話をしていると車の側面から大量の岩が転がってきた。

早苗 & a m p ; 美波「きゃあああああああああああつっつ!!!」

岩は早苗の車に命中し車は横転してしまった。

早苗と美波は何とか車から脱出するが早苗は重症を負ってしまった。

美波「早苗さんっ!!大丈夫ですか!?!」

早苗「いたた… あまり大丈夫じゃないわね…」

美波が早苗を安全な場所へ運ぼうとするとガルーダの強化改造人間・ウマ強化怪人が姿を現した。

ウマ強化怪人「ヒヒーン!!」

美波「ガルーダの怪人!!」

ウマ強化怪人「なんだ… もう一人いたのか… てめえも一緒に死になっ!!」

ウマ強化怪人が足元にあつた岩を美波たちに向かって蹴った。

すると美波たちの後ろからターボサイクロンに跨がった仮面ライダーブラックサンダーがやって来て岩を粉碎したのだ。

美波「ブラックサンダー!!」

ブラックサンダー「早く安全なところへっ!!」

美波「は……はい!!」

ウマ強化怪人「来たか……ブラックサンダー」

ブラックサンダー「貴様が新しい強化改造人間だな」

ウマ強化怪人「そのとおりだ……くらえ!!俺の殺人シユートの……!!」

ウマ強化怪人が岩を蹴り飛ばし、仮面ライダーブラックサンダーを吹っ飛ばした。

ブラックサンダー「ぐわっ!!」

美波「ブラックサンダーっ!!」

ウマ強化怪人「ふはははは……どうだ俺の殺人シユートの威力は」

ブラックサンダー「なんて威力だ……」

ウマ強化怪人「それじゃあもう一度だっ!!」

ウマ強化怪人はもう一度、岩を蹴り飛ばし仮面ライダーブラックサンダーを吹っ飛ばした。

ブラックサンダー「ぐわああああっ!!」

仮面ライダーブラックサンダーは吹っ飛ばされた衝撃で崖から落ちてしまった。

ブラックサンダー「クソっ!!負けた……」

美波「ブラックサンダーが負けた……」

ウマ強化怪人「ふははははっ!!」

仮面ライダーブラックサンダーはウマ強化怪人の前に完敗したのだ。

そして美波は早苗をなんとか病院へ連れていった。

美波「早苗さん…大丈夫かな…?」

立花「ううん…今はなんとも言えないな…」

その頃、ウマ強化怪人に完敗した成風龍東Ⅱ仮面ライダーブラックサンダーは特訓していた。

ブラックサンダー「とおっ!!ブラックサンダーキックっ!!」

ブラックサンダーはウマ強化怪人に勝つために何度も何度もブラックサンダーキックを岩に打ち込んでいた。

ブラックサンダー「はあはあ…だめだこのままでは…」

立花「やってるな龍東」

ブラックサンダー「っ!!おやつさん…」

立花「懐かしいな…今のお前を見ると猛や隼人たちを思い出すな…」

ブラックサンダー「今外国で戦っている先輩ライダーたちのことですね」

立花「ああそうだ…どれ龍東…俺が特訓してやる」

ブラックサンダー「本当ですかっ!!」

こうして仮面ライダーブラックサンダーはかつて先輩ライダーたちが受けてきたであろう立花の特訓を受けることになった。

しばらくして立花が仮面ライダーブラックサンダーにあることを聞いた。

立花「ところでお前のベルトって回転するのか？」

ブラックサンダー「ああ風力によって回転するんだ」

立花「手で回せるのか？」

ブラックサンダー「やってみます」

立花が持ち場につきブラックサンダーはベルトの真ん中にあるウィンドサンダーダイナモに手をかけた。

立花「よし・・・龍東行くぞ!!」

ブラックサンダー「お願いします!!」

ブラックサンダーが合図すると立花は岩を転がした。

ブラックサンダーはウィンドサンダーダイナモを回転させた。

そしてブラックサンダーキックを放つと岩は跡形もなくなった。

ブラックサンダー「やった!!これだ!!」

立花「やったな!!龍東!!」

ブラックサンダー「ありがとう!!おやっさん!!」

立花と龍東は早苗のいる病室へ着いたがそこに早苗の姿はなかった。

立花「あれ……早苗はどこ行ったんだ？」

龍東「ん？おやつさん……なんか置いてあるよ」

立花「これは……!？」

立花が見たのは早苗がFBIに所属していることを証明する物だった。

立花「早苗のやつFBIに所属していたのか……」

龍東「知らなかったな……」

一方、早苗はあの屋敷に再び潜入していた。

早苗「いって……まだ頭が痛いけど滝さんに託されたんだから……」

早苗は屋敷の奥へと入っていくとガルーダの秘密基地らしき場所へとたどり着いた。

首領「ようこそFBIの片桐早苗っ!!」

早苗「あなたがガルーダの首領ねっ!!」

首領「そのとおりだ……そして早苗……貴様の目的である怪人たちはもうここにいない……」

早苗「なんですすって!!じゃあどこに行ったの？」

首領「原子力研究所だ……だが貴様にはここで死んでもらう……」

首領が言い終わった瞬間、戦闘員たちが出てきた。

戦闘員たち「イー！」「イー！」

早苗「このまま殺されてたまるものですかっ!!」

早苗は迫り来る戦闘員たちをなぎ倒していく。

そこへ仮面ライダーブラックサンダーが駆けつけた。

早苗「ブラックサンダーっ!!」

ブラックサンダー「大丈夫かっ!!」

早苗「ブラックサンダーっ!!あたしはいいから原子力研究所へ行っっ!!怪人たちはそこにいるわっ!!」

ブラックサンダー「わかったっ!!」

そしてブラックサンダーは秘密基地を後にした。

そのころ、ウマ強化怪人は原子力研究所にいた。

ウマ強化怪人「よし：：この距離なら余裕だな」

ウマ強化怪人が足元にバリヤ破壊ボールを置き、蹴り飛ばした。

しかし間一髪のところ、仮面ライダーブラックサンダーが駆けつけバリヤ破壊ボールを投げ返した。

ウマ強化怪人「また来たか：：仮面ライダー：：」

ブラックサンダー「今度は負けないぞっ!!」



するとどこからか怪人軍団が出てきた。

ブラックサンダー「お前たちは倒したはずの強化改造人間たちだなっ!!」

蜘蛛強化怪人「驚いたか仮面ライダーっ!!」

蜂強化怪人「我々強化改造人間は死なんのだっ!!」

コブラ強化怪人「貴様にやられた箇所を直せば」

キメラ強化怪人「この通りだっ!!」

ウマ強化怪人「ふははははは…俺一人に負けたお前が1対1でどうやって勝つ? 勝算はあるのか?」

ウマ強化怪人が仮面ライダーブラックサンダーを煽るがそれを無視しターボサイクロンを発進させた。

怪人軍団の間をくぐり抜けしばらく進んだあとUターンし、再び怪人軍団もとへと向かって行った。

ターボサイクロンを止めると怪人たちが周りに集まってきた。

ブラックサンダー「ライダー……ファイトっ!!とおっ!!」

仮面ライダーブラックサンダーは迫り来る怪人たちを次々と投げ飛ばした。

そして大ジャンプし、怪人にスワローキックを決めた後、サソリ強化怪人の攻撃をかまし腹にパンチを打ち込みそして背中に強力なチョップを決めた。

キメラ強化怪人に回転チョップをし、蹴りをいれた。

そしてブラックサンダーは起き上がろうとしている蜘蛛強化怪人を蹴り転がしたあと、カメレオン強化怪人を掴み巴投げをした。

サソリ強化怪人とコブラ強化怪人に両腕を掴まれ拘束されるがジャンプして一回転したあとコブラ強化怪人を投げサソリ強化怪人を空中に投げ飛ばした。

サラセニア強化怪人が自身の蔓で仮面ライダーブラックサンダーの腕に絡めるがすぐにほどこいて逆にムチとしてサラセニア強化怪人に打ち込む。

続いて蜘蛛強化怪人が棒を取り出すが奪われコブラ強化怪人と共に打ちのめされる。カマキリ強化怪人が鎖を仮面ライダーブラックサンダーの腕に巻き付け鎌で斬りつけようとするが鎖でガードされ投げられる。

カマキリ強化怪人に続いて蜂強化怪人が飛びかかるが腹にパンチを受けそのままカマキリ強化怪人の上に落ちてそのまま共に倒された。

そして仮面ライダーブラックサンダーはどうとうウマ強化怪人と一騎討ちになる。

ブラックサンダー「ライダー……ファイトっ!!」

ふたりはにらみ合い先に仕掛けたのは仮面ライダーブラックサンダーだった。

ブラックサンダー「ブラックサンダーキックっ!!」

自身の必殺技である「ブラックサンダーキック」を放つがあまり効果がなさそう

だった。

ウマ強化怪人「こうなればライダーもろともバリヤを破壊してやるっ!!」

ブラックサンダー「よし：： おやつさんとの特訓の成果を見せる時だっ!!」

仮面ライダーブラックサンダーはウインドサンダーダイナモに手をかけた。

ウマ強化怪人「くらえっ!!必殺の殺人シユートをつ!!」

ウマ強化怪人がバリヤ破壊ボールを蹴ると同時に仮面ライダーブラックサンダーはベルトのウインドサンダーダイナモを回転させそのまま飛び上がった。

ブラックサンダー「ブラックサンダー電光キックっ!!」

仮面ライダーブラックサンダーの新たな必殺技 “ブラックサンダー電光キック” だ。

ベルトのウインドサンダーダイナモを回転させたことによつてウマ強化怪人のキックの何倍の威力にも増し見事蹴り返すことができたのだ。

蹴り返されたバリヤ破壊ボールはウマ強化怪人の手元に戻り再生怪人軍団共々爆散した。

ブラックサンダー「やったぞ：： 勝ったぞっ!!」

立花「お〜いブラックサンダーっ!!勝ったのか」

ブラックサンダー「はい!!怪人はすべて倒しました」

立花「そうか!!さすがだぞブラックサンダー!!」

仮面ライダーブラックサンダーはターボサイクロンに跨がりどこかへと走り去ってしまった。

夕美「すごいよね… ブラックサンダーは」

美波「え？」

夕美「だってさ自分の命をかけてまで人のために戦っているんだから」

美波「そうね…」

後日、早苗は立花たちに自分の正体を明かした。

美波「早苗さんってFBIの人だったの!？」

早苗「今まで黙っててごめんなさい… 隠すつもりはなかったのよ…」

立花「まあわざわざ人に言うことでもないから… でも早苗がFBIってことは滝もいるんだろ？」

早苗「ええ滝さんはあたしの上司よ」

立花「そうかそうか…」

仮面ライダーブラックサンダーの活躍でガルーダの作戦はまたまた失敗に終わった。ガルーダは今度はどんなに怪人を送り込んでくるのか……

誰にもわからない……

# 第12話 仮面ライダー2号& a m p ;仮面ライダーブ ラックサンダー!! サボテン強化怪人

メキシコのとあるダムが突然爆発し決壊した。

ダムを爆発させたのはガルダーダメキシコ支部の幹部であるサボテン強化怪人だった。

サボテン強化怪人「我々の作戦は成功だ… このメキシコはガルダーダのものだ!!」

首領「サボテン強化怪人よ… メキシコ征服おめでとう…」

サボテン強化怪人「は!!首領ありがとうございます」

首領「そんな優秀な君に新たな任務を任せたい…」

サボテン強化怪人「その任務とは…?」

首領「今現在我々ガルダーダの世界征服計画で著しく遅れている場所が一ヶ所ある…」

サボテン強化怪人「その場所は?」

首領「仮面ライダーブラックサンダーのいる日本だ…!!」

サボテン強化怪人「仮面ライダーブラックサンダー…」

首領「サボテン強化怪人は日本へ行き仮面ライダーブラックサンダーをこの世から抹

殺するのだ…」

サボテン強化怪人「イー！」

一方片桐早苗はFBI特捜部が発した通信をキャッチした。

早苗「なるほど… ガルーダメキシコ支部の幹部が羽田着603便で日本に向かったからレディ3と協力して幹部を倒せと… 瑞樹ちゃんに会うのは何年ぶりかしら…」

レディ3こと川島瑞樹は片桐早苗の同期であり親友である。

早苗は空港でレディ3を出迎えた。

早苗「久し振りね!!」

瑞樹「ほんと… 久し振りね!!」

早苗「そんじや行きますか!!」

瑞樹「ええ!!」

二人は車に乗り某所に向かっていたがその道中ラジオ番組でとんでもないニュースが流された。

アナウンサー「さきほどの603便からFBI捜査官の遺体が発見されました」

早苗（あれ… その便は瑞樹ちゃんが乗っていたはず… まさか… !!）

早苗がラジオのボリュウムを上げようと手をのばしたとき突然レディ3に手を掴まれた。

早苗「痛つ… !!なにするのよ!!」

早苗がレディ3の方を見ると不気味な笑みを浮かべておりその手はサボテンになっていた。

早苗「え……」

瑞樹? 「バレてしまったわね…… もう隠す必要はないの…… わかるわ」

レディ3の姿からサボテン強化怪人の姿に変わったのだ。

サボテン強化怪人「貴様にも死んでもらうっ!!」

早苗「そうやすやすと殺されてたまるかっ!!」

二人は車の中でハンドルの奪い合いになりその結果車は崖の下へと転がり落ちていった。

早苗「あいたた……」

サボテン強化怪人「片桐早苗おとなしく殺されろっ!!」

早苗「それは無理な相談ね…… こっちだってFBIとしてのプライドがあるんだから」

そうしてサボテン強化怪人と片桐早苗の戦いが始まった。

まず早苗はサボテン強化怪人を背負い投げをしたあと腹の辺りにチョップを決める。

さらに追い討ちをかけようとしたが顔を蹴られて怯む。

次はサボテン強化怪人が早苗を押し倒し首をしめた。

早苗「あああ……」

サボテン強化怪人「そのまま死ねっ!!」

その時偶然居合わせた立花藤兵衛に脇腹を蹴り飛ばされサボテン強化怪人は吹き飛んだ。

立花「早苗大丈夫か!?!」

早苗「ゲホ……ゲホ…… おやつさんありがと……」

サボテン強化怪人「クソっ!! あと一歩だったのに……」

サボテン強化怪人は戦闘員を呼び出し再び二人に襲いかかった。

多勢に無勢で立花と早苗はどうとう追い込まれてしまった。

立花「くそう…… ここまでか……」

早苗「あきらめないで…… きっと仮面ライダーが来る……」

サボテン強化怪人「やれっ!!」

二人が殺されそうになった時どこからか「とおく!!」という声が聞こえサボテン強化怪人たちの前に立ちはだかった。

サボテン強化怪人「きさまは何者だ!?!」

仮面ライダー2号「オレは南米からやって来た仮面ライダー2号だっ!!」

サボテン強化怪人「仮面ライダー2号だど!?!」



仮面ライダー2号「早く逃げるんだっ!!」

立花「わかった!! 気を付けろよ!!」

仮面ライダー2号「はいっ!!」

二人が逃げたのを確認すると仮面ライダー2号はサボテン強化怪人の方へ向き直った。

サボテン強化怪人は自身の武器サボテンバットを取りだし仮面ライダー2号目掛けて降り下ろす。

仮面ライダー2号は前転でかわす。

その後サボテン強化怪人に右手と左手を交互に連続パンチを当てる。

途中戦闘員が割って入るがキックで蹴散らす。

形成逆転されてサボテン強化怪人は撤退していった。

仮面ライダー2号「よし……なんとか退けたか……」

翌日片桐早苗と立花藤兵衛はガルード秘密基地に潜入していた。

早苗は戦闘員の服を着て変装をしていた。

早苗（戦闘員って男しかいないのかしら？ この服……胸がすぐくきついんだけど……）  
心の中で愚痴りながらもサボテン強化怪人がいる司令部にたどり着いた。

サボテン強化怪人「というわけだ……日本にあるダム各所にこのサボテン爆弾を仕

掛け決壊させるのだ……」

戦闘員（早苗）「その爆弾にはそれほどの威力があるんですね」

サボテン強化怪人「そのとおりだが……なぜ見張り担当の服を来た戦闘員がここにいるのだ？」

戦闘員（早苗）「あははは……服を間違えたみたいね」

サボテン強化怪人「さては貴様スパイだな……」

早苗「まさかガルーダが役職によって服を変えていたなんてサーチ不足だったわね」

サボテン強化怪人「今すぐ捕まえる!!」

早苗は戦闘員を蹴散らし立花が待っている場所へと走った。

立花と合流し二手に分かれ逃げたものの辺りにはサボテン爆弾があり身動きが取れなくなってしまう。

立花「くそう……囲まれたか……」

？「お困りのようですね……」

立花「誰だ……!?!」

立花が声のする方へ振り向くとそこには懐かしの人物が立っていた。

（BGM：かえってくるライダー）

立花「隼人っ!!」

隼人「お久しぶりです… おやつさん」

立花「あの時に聞こうと思ったがどうして日本に!？」

隼人「龍東からサボテン強化怪人が日本にやって来たという情報をキャッチしたので来ました」

立花「そうだったのか… 今龍東はどこにいるんだ？」

隼人「龍東は今ここに向かっていますその内来るでしょう」

立花「そうかわかった…」

隼人「サボテン強化怪人と戦闘員は俺にまかせてください」

立花「隼人… 頼んだぞ…」

隼人「ええ… へ…ん…し…ん!とおく!」

雄叫びを上げて天高く舞い上がった一文字隼人は仮面ライダー2号に変身した。

サボテン強化怪人「クソっ!! またお前か…」

仮面ライダー2号「サボテン強化怪人… 覚悟しろっ!!」

(BGM: レッツゴー!! ライダーキック)

仮面ライダー2号はサボテン強化怪人の顔にパンチを決めさらに脇腹にキックを決めた。

サボテン強化怪人はサボテンバットを取りだし振り回すが仮面ライダー2号はジャ

ンプでかわした。

仮面ライダー2号は着地したあとサボテン強化怪人の背中にチョップを打ち込み飛び蹴りを炸裂させた。

さらに追い討ちをかけようとしたがサボテン強化怪人に投げられてしまいサボテン爆弾の上に落下しかけたもののそこに仮面ライダーブラックサンダーが駆けつけ窮地を潜り抜けた。

ブラックサンダー「先輩…大丈夫ですか？」

仮面ライダー2号「ああ…問題ない」

サボテン強化怪人「くそう… またもやこちらが不利か…」

サボテン強化怪人はまたもや撤退していった。

ブラックサンダー「あつ!! まで!!」

仮面ライダー2号「追うなっ!! 罠かもしれない…」

ブラックサンダー「はい…」

翌朝成風龍東の部屋に幼馴染みの新田美波が訪れた。

美波「龍東くゝ入るよ?」

龍東「おう」

美波「なんか龍東宛てになにか届いてるみたい…」

龍東は小包みをあけたら中にはサボテン爆弾が入っていた。

龍東「美波っ!!伏せろっっ!!」

美波「きゃっ!!」

サボテン爆弾は爆発しテーブルは粉々になった。

龍東「クソっ!!ガルーダめ…」

同じころ立花モーターズにも小包みが届けられていた。

立花「なんだろうな?これは…」

早苗「さあ…」

夕美「見た目はそんな怪しいものでもなさそうだけど…」

薫「とりあえずあけようよ!!」

慶「慎重にね…」

立花が小包みをあけるとサボテンが入っていた。

夕美「わあきれいなサボテン♪」

立花「なんだただのサボテンか…」

早苗「ビクビクしてたのがバカみたいじゃない…」

薫「トゲが痛そうだね…」

慶「ふふ…そうだね♪」

そういつて薫がサボテンのトゲに手を伸ばした時に一文字隼人と成風龍東が駆けつけた。

隼人「待つんだっ!!」

龍東「そのトゲに触れちゃいけないっ!!」

立花「どういうことだ?」

龍東「こういうことです」

龍東がサボテンを外に投げたとたんにサボテンは爆発した。

全員「……………」

隼人「俺たちが来るのがもう少し遅ければおやつさんたちは今頃…………」

早苗「ところであなたは…………?」

隼人「申し遅れました…俺は一文字隼人だよろしく」

早苗「よろしく」

美波「よろしくお願いします」

夕美「よろしくお願いします♪」

薫「よろしくお願いしますー!」

慶「よろしくお願いします」

挨拶が終わり夕美が窓の方を見ると誰かが部屋の中覗いていた。

夕美「美波ちゃん…今不審な人が外にいたよ」

美波「きつとガルーダよ…行きましょ！」

二人は逃走する不審者を追うがガルーダの戦闘員に囲まれてしまった。

美波「しまった!!」

夕美「どうしよう美波ちゃん…」

戦闘員たちが美波たちに襲いかかろうとしたその時

?「待て!!」

(BGM:レッツツゴー!!ライダーキック)

戦闘員たちが振り向くとサイクロン号に跨がった仮面ライダー2号とターボサイクロンに跨がった仮面ライダーブラックサンダーがいた。

美波&amp;mp;夕美「仮面ライダーっ!!」

仮面ライダー2号と仮面ライダーブラックサンダーはあつという間に戦闘員を蹴散らし二人のピンチを救った。

そこへサボテン強化怪人が現れた。

サボテン強化怪人「仮面ライダーめ…決着をつけてやる!!」

仮面ライダー2号「来いっ!!」

ブラックサンダー「ずっと逃げてたやつが勝てると思うな!!」

サボテン強化怪人「ガルーダに逆らう者は死だっ!!」

こうして仮面ライダー2号& a m p ; 仮面ライダーブラックサンダーとサボテン強化怪人の戦いが始まった。

サボテン強化怪人はサボテンバットを振り回しながら走ってきた。

仮面ライダー2号と仮面ライダーブラックサンダーはジャンプで避けた。

二人は着地すると即座にサボテン強化怪人に腕組みをし腹部にダブルパンチを打ち込んだ。

サボテン強化怪人が怯んだ隙に仮面ライダーブラックサンダーは一気に距離を詰めパンチを浴びせ続いて仮面ライダー2号が怪人目掛けて飛び蹴りを炸裂させた。

そして二人は天高く舞い上がり必殺技を浴びせた。

仮面ライダー2号「ライダー……」

ブラックサンダー「ブラックサンダー……」

2号& a m p ; ブラックサンダー「キックつつつつつつ!!」

こうしてサボテン強化怪人は敗れた。

後日一文字隼人は南米へと戻ることになった。

隼人「おやっさん……」

立花「隼人……体に気を付けて元気でやれよ……」



隼人「はい……」

龍東「……」

隼人「龍東……」

龍東「はい……」

隼人「日本は任せたぞ」

龍東「はいっ!!」

一文字隼人は南米へと戻っていった。

はたしてガルーダはどのような怪人を送り込んでくるのか……

# 第13話 レスラー怪人登場!! ピラザウルス強化怪人

## (前編)

ある日ガルードはピラザウルスと人間を合体させた強化改造人間のピラザウルス強化怪人を完成させた。

このピラザウルス強化怪人は体に埋め込んだ毒霧発生装置は巨大恐竜をも死滅させるほどの威力を持っていた。

ガルードは毒霧の威力を試すため観光ツアーを装って人々をバスの中へと誘い込んだ。

バスが発進してしばらく進むと運転手はバスを停止させた。

不審に思った乗客の一人が運転手にたずねる。

乗客「おい!なんでこんなところでバスを止めたんだ!」

運転手「なんでかって?それはな……」

運転手が運転席から立ち上がるとそこに立っていたのはガルードの強化改造人間・ピラザウルス強化怪人だった。

ピラザウルス強化怪人「みんなここで死ぬからだ!!」

乗客たち「うああああああっつつつつ!!」「バ……バケモノだっ!!」「早くバスから降りるんだっ!!」

乗客たちが必死にバスのドアを開けようとするがびくともしない。

ピラザウルス強化怪人は額から毒霧を発生させた。

すると乗客たちの体はあつという間に骨になってしまった。

研究員主任「よし！実験は成功だよくやったぞピラザウルス強化怪人！」

ピラザウルス強化怪人「……」

研究員主任が声をかけるもピラザウルス強化怪人はピクリとも動かない。

研究員主任「おい？ピラザウルス強化怪人どうした？」

ピラザウルス強化怪人「……」

しばらくするとピラザウルス強化怪人は倒れてしまった。

いや死んでしまったのだ。

研究員主任「なんとということだ体に埋め込んだ毒霧発生装置に肉体が耐えきれなかったのか……」

研究員主任は基地に戻り首領に報告した。

首領「なるほど……つまりピラザウルスが発散する毒霧に耐えられる肉体を持った人物が必要ということか……」

研究員主任「はい…」

首領「ならば! コンピューターで毒霧に耐えられる肉体を持った人物を割り出すのだ!!」

研究員主任「イー!」

ガルードの研究員や戦闘員がコンピューターを使いついに毒霧に耐えられる肉体を持った人物を探し出したのだ。

研究員主任「首領! ついに発見しました!」

首領「でかしたぞ!! その人物は誰なのだ!!」

研究員主任「彼女の名前は、桐野アヤ。女子プロレスラーです」

首領「ならば早速ここに連れてきて改造手術を行うのだ!!」

戦闘員たち「イー!」

一方女子プロレスラーの桐野アヤは試合が終わり友人と別れ一人で帰っている最中だった。

アヤ「いや、今日もいい試合ができたな♪」

アヤが今日の試合を思い出していると突然ガルードの戦闘員たちに襲われ連れ去られてしまった。

アヤ「う、ん、こ、こ、は、…、?」

首領「ようこそ桐野アヤ」

アヤ「だ……だれだ!？」

首領「私は秘密結社ガルダの首領である」

アヤ「ガルダ……？」

首領「桐野アヤ……貴様には今から改造手術を受けてもらう」

アヤ「ふざけるな……!!なんであたしが……!!」

首領「貴様に拒否権などない……やれ!!」

アヤ「いや……やめろ……やめろおおおおお」

しばらくして桐野アヤは記憶を消されピラザウルス強化怪人に改造されてしまった。

研究員主任「首領……改造手術は成功です」

首領「では手始めに憎き仮面ライダーと戦わせるのだ!!」

研究員主任「イー!」

その頃成風龍東はランニングに出掛けていた。

そしてガルダの強化改造人間・ピラザウルス強化怪人の襲撃を受けたのだ。

龍東「お前はガルダの強化改造人間だな!!」

ピラザウルス強化怪人「その通りだ……成風龍東!!仮面ライダーに変身して俺と戦え

!!」

龍東「いいだろう…ライダー…変身っ!!」

龍東は変身ポーズをとり天高く舞い上がり仮面ライダーブラックサンダーへと変身した。

ブラックサンダー「いくぞ!!ガルーダの強化改造人間!!」

ピラザウルス「来いっ!!仮面ライダー!!」

こうして仮面ライダーブラックサンダーとピラザウルス強化怪人の戦いが始まった。

まず仮面ライダーブラックサンダーがピラザウルス強化怪人の右腕を掴み腹にパンチを数発打ち込んだあと顔に一発食らわせる。

次にピラザウルス強化怪人が仮面ライダーブラックサンダーの顔を掴みアイアン・クローを炸裂させる。

あまりの激痛に声をあげるも腕を掴み背負い投げで脱出した。

今度は仮面ライダーブラックサンダーの胸目掛けてローリング・ソバットを炸裂させた。

見事命中して後方に吹っ飛ぶ仮面ライダーブラックサンダー。

このままでは負けると判断しベルトにあるウインドサンダーダイナモを逆回転させて疑似爆発を引き起こしその隙に撤退した。

龍東「はあ…はあ…なんとか逃げられたか…しかしもう一回変身するにはあと

「一時間かかるのか？」

説明しよう仮面ライダーブラックサンダーのベルトの真ん中にあるウインドサンダーダイナモは逆回転させることによって疑似爆発を引き起こすことができる。

しかし疑似爆発を起こすには大量のエネルギーが必要なので使用すると次に変身するときは一時間のエネルギーチャージしなければならないのだ。

## 第13話 リベンジマッチ!!ピラザウルス強化怪人（後編）

前回の戦いで仮面ライダーブラックサンダーを撤退まで追い込んだガルーダの強化改造人間・ピラザウルス強化怪人は桐野アヤの姿に戻り覆面レスラー・デビルマスクを名乗って日本のプロレス界に旋風を巻き起こしていた。

観客「うおおおおお!!」「デビルマスクつええっ!!」

しかしそんなデビルマスクの戦い方にどこか覚えのある女性がいた。

その名は「中野有香」である。

有香（あのデビルマスクの戦い方……どことなくアヤちゃんに似ている……）

試合が終わった後デビルマスクはリングを降り控え室に戻った。

そしてマスクを取りイスの背もたれに引っかけた。

アヤ「はあ……どいつもこいつも弱すぎて相手になんねえな……結局あんどきだつて

仮面ライダーの奴逃げやがって」

彼女が愚痴をもらしていると誰かがドアをノックする音が聞こえてきた。

アヤ「開いてるぞ!」



有香「失礼します…」

アヤ「なんだおまえファンかなにかか？」

有香「アヤちゃん！やっぱりデビルマスクの正体はアヤちゃんだったんだね！」

アヤ「なんだよおまえ…？」

有香「アヤちゃん忘れたの？あたしのこと？」

アヤ「知るかよ！今日会ったばかりの奴！」

有香「え…」

有香はショックで言葉が出なくなつた。

ピラザウルス強化怪人こと桐野アヤは改造手術を受ける際記憶を消されてしまったため友人である中野有香のことをまったく覚えていないのである。

有香「……よ」

アヤ「あ？」

有香「ひどいよ!!」

有香は泣きながら控え室をあとにした。

アヤ「なんだ？あいつ…」

有香は大切な友人に自分を忘れられたショックで泣いているとちようどランニングに出掛けていた成風龍東に話かけられた。

龍東「どうしたんだい？こんなところで？」

有香「実はプロレスをしている友人がいて…その友人があたしのことを忘れてしまったんです」

龍東「どうゆうこと？」

有香「それがあたしにもわかりません……」

龍東「そっか…でもきつと思いついて出してくれるさ」

有香「本当ですか…？」

龍東「それがいつになるかわからないけど……」

有香「お兄さんの言葉信じてみます……」

龍東「うん」

こうして龍東と有香は別れお互い自宅へと戻っていった。

そのころガルダの秘密基地ではピラザウルス強化怪人に新たな命令が出された。

首領「ピラザウルス強化怪人よ…次のチャンピオンタイトルをかけたタイトルマッチには日本の政治家や経済界の要人たちが顔を揃えることになっている…そこでおまえの毒霧によって要人たちを抹殺し日本を大混乱に陥れるのだ!!」

ピラザウルス強化怪人「イー！」

そしてチャンピオンタイトルをかけたタイトルマッチの日。

意気揚々と試合のリングに上がるデビルマスクだったが挑戦者コーナーから姿を現したのは我らがヒーロー仮面ライダーブラックサンダーだった。

観客「仮面ライダーだ!!」「すげえ本物だ…!!」「こっち向いてくれ〜」

デビルマスク「か…仮面ライダーっ!?!なぜここに…」

ブラックサンダー「デビルマスク…いやピラザウルス強化怪人!!俺は貴様にリベンジしにやって来た!!」

ブラックサンダーがデビルマスクを指差しながら言う会場がざわつき始めた。

デビルマスクはマスクを脱ぐとそこにはピラザウルス強化怪人の姿があった。

ピラザウルス強化怪人が姿を現すと会場は大混乱になった。

大混乱になった会場を立花モーターズのメンバーが誘導した。

立花「みんな!!こっちだ!!」

美波「あわてないでください!!」

一方で仮面ライダーブラックサンダーとピラザウルス強化怪人のタイトルマッチが始まった。

ブラックサンダーは前回同様ピラザウルス強化怪人の腕を掴み腹にパンチを数発打ち込み顔に一発食らわせる。

ピラザウルス強化怪人は走り込んで自分の腕を横方向に突き出しブラックサンダー

のど元目がけて叩きつける。『ラリアット』をお見舞いした。

ラリアットを食らい倒れるがすぐに起き上がり、ピラザウルス強化怪人の背中目がけて飛び蹴りを食らわせた。

ピラザウルス強化怪人はケンカキックをするがジャンプでかわされてしまった。

ブラックサンダーはジャンプで回避したあとそのまま必殺技の『ブラックサンダーキック』炸裂させた。

ブラックサンダー「ブラックサンダー…キックつつつつ!!」

ピラザウルス強化怪人「ぐはあああつ!!」

ピラザウルス強化怪人はそのまま倒れ桐野アヤの姿に戻っていった。

アヤ「うくん…あれ?ここは?あたしはなにをして…」

有香「アヤちゃん!!」

アヤ「おお有香…」

有香「思い出してくれたんだね!!」

アヤ「は?あたしが忘れるわけないだろ…変な奴だな…」

こうしてガルードの強化改造人間・ピラザウルス強化怪人は我らがヒーロー仮面ライダーブラックサンダーによって敗れた。

しかしガルードはまだ世界征服をあきらめたわけではない。

また強力な強化改造人間を送り込んでくるだろう。

## 第14話 鋼鉄の体!ヒトデ強化怪人

ある日のこと山で登山していた園田海未一行は休憩をしていた。

凜「ね〜海未ちゃん… あとどれくらいで山頂に着くのかにや〜?」

海未「そうですね… ここからですとあともうすこしですよ」

穂乃果「海未ちゃん… それさつきも言っただけでなかつた?」

海未「そうですね?」

真姫「ええさつき言っただけじゃない…」

絵里「でも確実に山頂に近付いているわね」

希「そうやね♪みんなもう少しがんばろ♪」

全員「おー!」

園田一行が休憩を終え歩いているとなにやら怪しい建物が建っており周りにはヒトデの模様がある真っ黒な服とマスクを被っていた。

にこ「なにあれ?」

花陽「映画の撮影でしょうか?」

真姫「そんなわけないでしょ」

ことり「そしたらあの建物とあの人たちはここでなにをしてるんだろう？」  
？「見たな!!」

全員「!!」

声のする方へ全員が振り向くとそこにはガルーダの新たな強化改造人間・ヒトデ強化  
怪人が立っていた。

ことり&amp;mp;穂乃果&amp;mp;凜「ひっ!!」

にこ「な…なによあれ…」

絵里「ヒトデのお化け…」

希「嘘やろ…」

真姫「意味わかんない…」

花陽「誰か助けて!!」

海未「みなさん!!ひとまず逃げましょう!!」

海未が全員に指示を出すと一斉に走り出した。

ヒトデ強化怪人「逃げられると思うな!!ガルーダの秘密基地を見た以上は生きては帰  
さん!!」

ヒトデ強化怪人は戦闘員を従え園田一行を追いかけた。その内8人が捕らえられて  
しまった。

ヒトデ強化怪人「あと一人はどうした？」

戦闘員「途中で見失ってしまいました…」

ヒトデ強化怪人「バカモノ!!すぐに探し出せ!!」

戦闘員「イー!」

その頃立花モーターズのメンバーはたまたま園田一行と同じ山にキャンプにやって来ていた。

薫「ねー見て見て!水がキレイだよ!」

龍東「ああ!ここは空気が澄んでるからな」

美波「ほんと…都会とは全然違うね」

夕美「きれいなお花とかいっぱい咲いてそう」

慶「みなさくンバーベキューの準備できましたよ」

薫&amp;龍東&amp;美波&amp;夕美「はくい」

慶に呼ばれテントの方へ戻ると立花藤兵衛がお肉などを焼いて待っていた。

立花「さあ!いっぱい食べろよ肉はやまほどあるからな!」

莉嘉「わくい♪あたしおなかぺこぺこだったんだ!」

美嘉「こら莉嘉!すいませんアタシたちまで招待してもらって…」

龍東「気にしない気にしないこうゆうのは大人数でやるから楽しいんだから」



立花「龍東の言うとおりで…… さあ遠慮なく食べな！」

美嘉「ありがとうございます」

加蓮「それじゃ遠慮なく♪」

立花たちがバーベキューを楽しんでいると突然トランシーバーから声が聞こえてきた。  
た。

「ヒトデのお化けが出た」と。

立花「ヒトデのお化けが出たってことは……」

龍東「まさかガルーダが……」

薫「えく怖いよ……」

夕美「大丈夫だよ薫ちゃん」

龍東「おやつさん……俺はこの辺りを探ってみます」

立花「わかった…… くれぐれも無茶はするなよ」

龍東「はい！」

龍東は山の奥へと消えていった。

一方で片桐早苗はFBIからの情報をキャッチし調査に来ていたのだ。

そしてガルーダの秘密基地を発見した。

早苗「ここが情報にあった秘密基地か…… よくし」

早苗は辺りの搜索を開始した。

戦闘員「大変です!!FBIの片桐早苗が:」

ヒトデ強化怪人「なんだと!!おのれ:。ここを嗅ぎ付けたのか:。」

首領「ヒトデ強化怪人よ!!今すぐ片桐早苗を始末しろ!!」

ヒトデ強化怪人「イー!」

早苗が辺りを探索していると空からヒトデ強化怪人が飛んできた。

早苗「出たわね:。ガルーダの強化怪人:。」

ヒトデ強化怪人「FBIの犬早苗よ:。お前には死んでもらう!!」

早苗「そういつてやすやすやられるアタシじゃないわよ」

早苗は近くに落ちていた木の棒を拾いヒトデ強化怪人に殴りかかったが一瞬で折れてしまった。

早苗「嘘:。」

ヒトデ強化怪人「ふははは:。そんなものではこの俺の鋼鉄の体にキズひとつ付けられないぞ:。」

早苗「クソっ!!」

早苗はヒトデ強化怪人の体にキックやパンチを打ち込むが鋼鉄の体を持つヒトデ強化怪人にはなすすべがなかった。

早苗「もう！なんて頑丈な体なの…」

ヒトデ強化怪人「片桐早苗… 死んでもらうっ!!」

ヒトデ強化怪人が早苗に止めをさそうとしたときターボサイクロンに跨がった仮面ライダーブラックスンダーが現れたのだ。

早苗「仮面ライダー!!」

ヒトデ強化怪人「出たか… 仮面ライダー」

ブラックスンダー「行くぞっ!!とおく!!」

ブラックスンダーはターボサイクロンから降りるとヒトデ強化怪人との戦闘を開始した。

ブラックスンダーはヒトデ強化怪人の体にキックやパンチを打ち込んだがまるで効かない。

ヒトデ強化怪人「仮面ライダーよ… 貴様の力はそんなものか…」

ブラックスンダー「なんて頑丈な体してるんだ…」

ヒトデ強化怪人が飛び上がるとブラックスンダーもそれに合わせて飛び上がり空中戦を開始した。

しかし全く歯が立たず谷底へ転落してしまった。

ヒトデ強化怪人「ふははははは!!思いしかったか仮面ライダーっ!!おい!!」

戦闘員「イー!!」

ヒトデ強化怪人「仮面ライダーの死体を探しだして持ってこい!!」

戦闘員「イー!!」

戦闘員は仮面ライダーブラックサンダーの遺体を搜索し始めた。

戦闘員A「おい!見つけたか?」

戦闘員B「いや:~どこにもないぞ」

戦闘員A「そんなはずはない!徹底的に探すぞ!!」

戦闘員B「イー!!」

戦闘員たちは別の場所へと去っていった。

龍東「ふうくなんとか撒けたか:~ いてて」

一方立花たちはガルルダから命からがら逃げてきた綾瀬絵里を保護していた。

美波「おやつさん:~ あの娘は?」

立花「今はテントでぐっすり眠っているよ」

早苗「怖かったですよね:~」

夕美「かわいそう:~」

その頃成風龍東はガルルダの秘密基地に潜入して武器庫にあつた爆弾で格納庫を爆破し捕らわれていた園田一行を救出した。

救出に向かう途中龍東はヒトデ強化怪人と戦闘員の会話を聞いていた。

ヒトデ強化怪人「早く消火しろ!!」

戦闘員「イー!」

戦闘員がホースを持ってきて消火活動をしていると誤ってヒトデ強化怪人に水をかけてしまった。

ヒトデ強化怪人「バカモノ!!俺の体に水をかけるな!!」

戦闘員「すみません!!」

龍東（なるほど……やつは水に弱いのか……）

龍東たちはガルーダの秘密基地を脱出したがすでにヒトデ強化怪人が待ち構えていた。

ヒトデ強化怪人「おのれ……よくもやってくれたな成風龍東っ!!」

龍東「クソっ!!先回りしてやがったか……君たちは早く逃げるんだ!!」

海未「しかし……」

龍東「早くっ!!」

海未「わ……わかりました……」

海未はみんなを連れその場を離れた。

龍東「よし……ライダー………変身っ!!」

龍東は変身ポーズを取り空中高く舞い上がると仮面ライダーブラックサンダーの姿に変身した。

ブラックサンダー「行くぞっ!!」

ヒトデ強化怪人「来いっ!!」

ブラックサンダーはヒトデ強化怪人の体にキックやパンチを打ち込んだ。

ヒトデ強化怪人「俺の体にそんなものではキズひとつ付けられないわっ!!」

ブラックサンダー「よし…ならば!!」

ブラックサンダーは振り向くと一気に走り出した。

ヒトデ強化怪人「む…逃げることか!!ライダー!!」

ヒトデ強化怪人は飛び上がりブラックサンダーを追った。

しばらくブラックサンダーを追いかけて降り立つとそこは川だった。

ヒトデ強化怪人「しまった!!」

ブラックサンダー「俺を追いかけるのに夢中でここに誘き出されていることに気付か

なかつたようだな」

ヒトデ強化怪人「ク…クソっ!!」

ブラックサンダーはヒトデ強化怪人にパンチを打ち込んだ。

水に浸かって柔らかくなった体には効果が抜群だった。

さらにキックや投げ技で徐々に追い詰める。

ブラックサンダーを追い打ちをかけようと倒れ込んだヒトデ強化怪人の上に乗るが背中を蹴られ滝へ落ちかけてしまった。

ヒトデ強化怪人は起き上がりブラックサンダーの手を踏んづけた。

ヒトデ強化怪人「死ねっ!! 仮面ライダーっ!!」

しかしブラックサンダーはとっさにヒトデ強化怪人の足を払った。するとヒトデ強化怪人は滝壺へと落ちていった。

ヒトデ強化怪人は絶命した。

ブラックサンダー「はあ… はあ… 恐ろしい怪人だった…」

仮面ライダーブラックサンダーは変身を解いて立花たちの所へ戻っていった。

海未「いろいろとありがとうございました」

絵里「本当にありがとうございました」

龍東「いえいえ困ったときはお互い様ですからそれでは」

そう言うとき龍東はバイクを発進させた。

凜「あの人がすごくかっこいい人だけにや」

穂乃果「だよね、穂乃果たちを助けてくれたんだから」

ことり「もしかしたら自分が死んじゃうかもしれないのに…」

希「せやな… だからうちらはあの人には感謝せなアカンのや…」

真姫「ま… そうね」

こうしてガルーダの新たな強化改造人間・ヒトデ強化怪人は我らがヒーロー仮面ライダーブラックサンダーに敗れた。

しかしガルーダは次なる使者を送り込んでくるに違いないだろう。



## 第15話 大津波作戦!! カニ強化怪人

九州・四国・大阪で地震が発生し津波によって漁船転覆などの被害が出ていた。

しかし各地地震観測所の地震計が破壊されるといふ事件が同時に発生しており地震の規模・震源地は不明だった。

そんな時氣象庁にガルーダの強化怪人・カニ強化怪人が現れた。

カニ強化怪人「この配電室を破壊すればいいのか……楽な任務だな」

カニ強化怪人は氣象庁の配電室に侵入した。

そして配電室にある装置を破壊した。

しばらくして氣象庁の職員が駆けつけるとカニ強化怪人が待ち構えていたのだ。

職員「バ、バケモノだー!」「うあああああああつ!!」

カニ強化怪人は腰を抜かして動けなくなっている職員2人に泡を浴びせた。

泡を全身に浴びた職員2人は跡形もなく溶けてしまった。

カニ強化怪人「よし……準備工作は順調だ……」

九州・四国・大阪での地震は北海道で大津波を発生させるガルーダの準備工作だったのだ。

ガルーダの仕業だと悟った成風龍東は単身北海道に乗り込んでいた。

龍東「よし！北海道に着いたぞ……しっかし寒いなくここは……」

龍東は北海道の寒さに身を震わせながらガルーダの秘密基地の在り処を探った。

戦闘員「報告します！成風龍東が北海道にやって来ました！」

首領「おのれ成風龍東め!!カニ強化怪人よ……計画の実行を急ぐのだ!!」

カニ強化怪人「イー！」

龍東が北海道に乗り込んだことを知ったガルーダは計画の実行を急いだ。

カニ強化怪人「ここが中央気象台だ……戦闘員たちよ攻撃開始っ!!」

戦闘員たち「イー！」

カニ強化怪人は中央気象台にたどり着き戦闘員たちと共に襲撃し逃走した。

龍東「しまった遅かったか……だが奴らはそう遠くに行つてないはずだ……」

龍東は変身ポーズを取る。

龍東「ライダー……変身っ!!」

天高く舞い上がり仮面ライダーブラックサンダーに変身しその後を追った。

一方カニ強化怪人はある港に車を停めた。

カニ強化怪人「ここまで来れば仮面ライダーとて見つけれまい」

ブラックサンダー「待っていたぞっ!!ガルーダの強化改造人間っ!!」

カニ強化怪人「仮面ライダー… いつの間につ!!」

ブラックサンダー「行くぞっ!!とおっ!!」

ブラックサンダーはカニ強化怪人・戦闘員たちのところまでジャンプし戦闘を開始した。

迫り来る戦闘員の攻撃をかわしつつ反撃し戦闘員たちを蹴散らしていった。

戦闘員を蹴散らしてカニ強化怪人と一騎打ちとなった。

カニ強化怪人「仮面ライダーっ!!今は貴様と遊んでいる暇はないのだ」

カニ強化怪人は海へと潜っていった。

ブラックサンダー「待てっ!!」

ブラックサンダーもカニ強化怪人の後を追って海に潜っていった。

ブラックサンダーはバッタの強化改造人間なのだが海に潜ることが可能であるのだ。

カニ強化怪人の後をしばらく追うとガルーダの秘密基地にたどり着いた。

カニ強化怪人「仮面ライダーっ!!なぜバッタの強化改造人間の貴様がここまで来れる

んだっ!!」

ブラックサンダー「それは俺を改造した奴か首領に聞いてみるんだな」

カニ強化怪人は左手にある巨大なハサミを振り上げ襲いかかるがそれを避ける。

避けた後カニ強化怪人の背中にキックを食らわせた。

カニ強化怪人は基地の自爆装置を作動させ脱出した。

自爆装置が作動したことに気づいたブラックサンダーも基地を脱出した。

そして基地は木っ端微塵になった。

陸にあがった2体の強化改造人間は睨みあっていた。

カニ強化怪人「仮面ライダー… 貴様のせいで我々の計画が失敗に終わった…」

ブラックサンダー「貴様たちの作戦を成功させるわけにはいかないのだっ!!」

2体の強化改造人間は掴み合いになった。

ブラックサンダーはカニ強化怪人を投げ飛ばした。

カニ強化怪人は再び巨大なハサミを振り上げるが掴まれ腹部に2発パンチを受け背負い投げられた。

カニ強化怪人は泡を浴びせようとするがブラックサンダーはジャンプで回避してそのまま「ブラックサンダーキック」を食らわせた。

ブラックサンダー「ブラックサンダーキックっ!!」

カニ強化怪人「ぐはああああああっ!!」

カニ強化怪人は爆散した。

今回も仮面ライダーブラックサンダーの活躍でガルーダの大津波作戦は失敗に終わった。

しかしガルーダの世界征服の野望はまだ終わらないのだ。

## 第16話 立花モーターズピンチ!! 毛虫強化怪人

ある日のこと、立花モーターズのメンバーはオートバイでドライブに来ていた。しかし、免許を持っていないメンバーは車で同行していた。

しばらくしてある山里の村に立ち寄った。

立花「ひとまず、この村でひと休みしよう」

龍東「そうですね、みんな一旦休憩にしよう！」

一同「賛成!!」

ちなみに今回のドライブに来たのは、立花藤兵衛・成風龍東・片桐早苗・新田美波・相葉夕美・北条加蓮・城ヶ崎美嘉の7人である。

女性陣4人が村を探検していると大荷物を持った村人たちがぞろぞろとやって来たのだ。

美波「あの、すみません…。そんな大荷物を持ってどこに行かれるのですか？」

村人A「実はここ最近、この村に巨大な人喰い毛虫が出るようになって…。もう何人もの村人が被害にあってるんだよ…。」

村人B「じゃからわしらは、この村から避難するんじやよ…。」

夕美「そうなんですか…」

村人A「あんたらも早く逃げたほうがいいよ」

美嘉「わかりました…」

村人たちは山を降りていつてしまった。

加蓮「なんか、怪しい」

美嘉「あたしもそう思った」

夕美「これってもしや…」

美波「ガルダが絡んでるかもしれないかもしれない」

ガルダの仕業と察知した4人は村の探索を開始した。

しばらく歩くと村の一角にある滝にたどり着いた。

美嘉「この滝の裏…道があるっぽい」

加蓮「もしかしてここがガルダの秘密基地？」

夕美「どうする？行ってみる？」

美波「行ってみましょ…」

4人が滝の裏に足を踏み入れよとした時、ガルダの戦闘員が現れた。

美波「やっぱりこの先に秘密基地があるのね!!」

戦闘員「その通り！だからお前らを行かせるわけにはいかないのだ！」

いくら戦闘員とはいえ美波たちの力では太刀打ちできずそのまま捕らえられてしまったのだ。

一方、龍東たちはいつまでも4人が帰って来ないので立花と片桐の3人で捜索に出ているのだ。

龍東「お〜い！美波！夕美ちゃん！どこ行っちゃ〜！」

立花「加蓮！美嘉！いるなら返事しろ〜！」

早苗「みんな〜どこ行っちゃったの〜？早く帰ってらっしゃい〜！」

いくら探しても4人の姿は見当たらず3人は別々に探すことにした。

しばらく探していると立花の前にガルーダの戦闘員が現れた。

立花「くそ！こんなところにまでガルーダがいるのか!？」

戦闘員「立花藤兵衛を捕らえろ!!」

戦闘員たちは一斉に立花に襲いかかった。

立花もガルーダに捕らわれてしまったのだ。

同じ頃、早苗も戦闘員に襲われ必死に抵抗したが数に圧倒され、ガルーダの秘密基地に連れ去られてしまった。

立花モーターズのメンバーたちが次々に捕らわれていく中、龍東は村の一角にある滝であるものを発見した。



龍東「これは……美波の手帳だ！ということはこの滝の裏にガルーダの秘密基地が……よし！」

龍東は変身ポーズをとる。

龍東「ライダー……変身！」

龍東は仮面ライダーブラックサンダーに変身して、単身ガルーダの秘密基地に乗り込んだのだ。

しばらく歩くと急に床が開き、ブラックサンダーは落ちてしまったのだ。

ブラックサンダー「しまった！罠にかかったか……」

？「そうだ！まんまと引っ掛かったな！」

ブラックサンダー「誰だ!!」

すると突然、照明がついてそこには十字架に捕らえられた立花たちとガルーダの新怪人・毛虫強化怪人の姿があった。

ブラックサンダー「どうゆうことだ!?!」

毛虫強化怪人「今からこいつらの処刑を行うのだ……お前はそこで見ているがい……」

ブラックサンダー「やめろ……やめろー……!!」

ブラックサンダーが叫ぶも毛虫強化怪人はレバーを下ろした。

レバーを下ろすと十字架に電流が走った。

立花「があああああああつ!!」

早苗「くあああああああつ!!」

美波「あああああああつ!!」

夕美「ぐううううううつ!!」

美嘉「はああああああつ!!」

加蓮「うああああああつ!!」

電流に苦しんでいる立花たちを見てブラックサンダーは

牢屋をこじ開け、立花たちを救出したのだ。

ブラックサンダー「おやっさん!大丈夫ですか!?!」

立花「ああ…ありがとうな…」

ブラックサンダー「さあ!早く逃げるんだ!」

ブラックサンダーがみんなに指示を出すときみんなは基地の外へと脱出した。

ブラックサンダーはみんなが脱出したのを確認すると毛虫強化怪人を追って基地の

外へと出た。

ブラックサンダー「待て!!ガルーダの強化改造人間!!」

毛虫強化怪人「くそう…仮面ライダーめ…」

毛虫強化怪人は口から炎を吐いてブラックサンダーを遠ざけようとしたがジャンプで避けられた。

ブラックサンダーはジャンプで回避した後、毛虫強化怪人に飛び蹴りを喰らわせた。飛び蹴りを喰らった毛虫強化怪人は後方へと吹っ飛んだ。

ブラックサンダー「もう観念しろ!!」

毛虫強化怪人「黙れ!! 貴様に負けるわけにはいかんのだ!!」

毛虫強化怪人は左パンチを喰らわせようとしたが左腕を掴まれ腹部にパンチを2発受けた。

その後、背負い投げを受けた。

起き上がり、もう一度炎を吐いたがまたもやジャンプで避けられた。

ブラックサンダーはジャンプで回避した直後、自身の必殺技である「ブラックサンダーキック」を放った。

ブラックサンダー「ブラックサンダー……キックっ!!」

毛虫強化怪人「がああああああつ!!」

ブラックサンダーキックを受けた毛虫強化怪人は白い繭となって川へと落ちていった。

ブラックサンダー「勝ったのか？俺は……」

毛虫強化怪人がいなくなったことでまた村に住めるようになり村人たちが戻ってきたのだ。

村人A 「いや、本当にありがとう!!」

村人B 「あんたたちは英雄じゃ!!」

立花 「いやいや、私たちはそんなもんじゃないですよ」

美波 「そうですよ、この村を救ってくれたのは仮面ライダーのおかげですよ」

村人A 「おお、そうかそうか」

立花 「では、我々はこれで」

こうして仮面ライダーブラックサンダーこと成風龍東は毛虫強化怪人に勝つことができた。

しかし毛虫強化怪人は白い繭となって川を下っていつてしまった。

それだけが成風龍東が心残りであるのだ。

## 第17話 親子のピンチ!! 蛾強化怪人

ある日、成風龍東はバイクで大阪に向かっていった。

龍東（早く大阪へ行かないと…このままでは伊集院さんが危ない!!）

なぜ、成風龍東が大阪へ向かっているのか。

それは、理科大学で繭を急速に成長させる“カクウーングロウエジエンド”を伊集院恵が発明したからだ。

この発明を聞きつけたガルーダが伊集院恵を襲うかもしれないと予感したからだ。龍東がバイクを走らせていると突然白い繭が目の前に転がってきたのだ。

龍東「この繭は…まさか!?’

すると、白い繭の中からは成虫になった蛾強化怪人が姿を現した。

蛾強化怪人「また会ったな成風龍東….’

龍東「貴様!?’生きていたか!?’

蛾強化怪人「そうだ!!あの程度で死ぬ俺ではないわ!!.’

龍東「くそ!.’

蛾強化怪人「死ね!!成風龍東!!.’

蛾強化怪人は手からロケット弾を発射した、成風龍東は瞬時にかわして変身ポーズをとる。

龍東「ライダー……変身!!とお!!」

成風龍東は仮面ライダーブラックサンダーに変身し、蛾強化怪人との戦闘を開始した。

ブラックサンダーは距離を詰めようと接近しようとするが、そうはさせまいと蛾強化怪人が手からロケット弾を発射してくる。

ブラックサンダー「くそ!これでは近付くことができない……」

蛾強化怪人「どうした?仮面ライダーもう終わりか?」

ブラックサンダー「くそう……どうすれば……」

仮面ライダーブラックサンダーが蛾強化怪人に足止めをくらっている間に、カクウインググロウエジエンドを発明した伊集院恵が拉致されてしまったのだ。

恵「私をここに連れてきて何をさせるつもりだ!」

首領「伊集院恵よ……お前には、カクウインググロウエジエンドを量産してもらおう!!」

恵「一体何のために?」

首領「これのためだ!!」

すると白衣を着た戦闘員が大量の繭が置いてある台車を運んできたのだ。

恵「これは繭？まさか!？」

首領「その通り……カクウインググロウエジエンド”を使ってこの繭たちを急速に成長させ蛾強化怪人を量産するのだ!!」

恵「ふざけないで!!誰がそんな恐ろしい計画に協力するものか!!」

首領「ほう……協力してもらえないか……ならば仕方ないお前の娘には死んでもらう」

恵「そんな!」

一方、伊集院恵の娘・伊集院舞は学校からちようど帰宅したところだった。

家の門に入ろうとした途端、ガルーダの戦闘員に襲われたのだ。

舞「あなたたち誰ですか!？」

戦闘員「伊集院舞!お前は我々と一緒に来てもらう!!」

舞「嫌!!やめてください!!」

舞が戦闘員たちに誘拐しようとしたその時だった。

美波「待ちなさい!!」

夕美「あなたたちの思い通りになんてさせないから!!」

なんと立花モーターズのメンバーたちが駆けつけてきたのだ。

戦闘員A「くそう：． やれ！相手は女子供だ！」

戦闘員B「そうだ！成風龍東がいなければ我々の敵ではない！」

戦闘員たちをが襲いかかるも、立花モーターズのメンバーたちは各々の武器で対抗した。

そして美波たちは戦闘員たちの撃退に成功し、1人の戦闘員を捕らえたのだ。

捕らえた戦闘員を立花モーターズへ連れていった。

立花「お前たち大手柄だぞ！」

美波「ありがとうございます」

夕美「でも、怖かった〜」

一方、龍東は拉致した伊集院恵の居場所を聞き出すため、戦闘員を締め上げていた。

龍東「さあ言え!!伊集院恵はどこにいる!!」

戦闘員「知らん!!」

龍東「嘘をつくな!!居場所を言え!!」

すると突然、窓ガラスが割れロケット弾が飛んできたのだ。

龍東は間一髪避けたが、椅子に縛りつけられ身動きが取れない戦闘員には命中し、跡形もなく吹き飛んでしまった。

龍東「今のは：．」



龍東は急いで後を追うと、そこには蛾強化怪人がいた。

龍東「やはりお前の仕業だったか!!」

蛾強化怪人「くそう……あの間抜け共々貴様も葬つてやろうと思つたがまあいい……」

龍東「今度こそ決着をつけてやる!!」

蛾強化怪人「はたしてそんな暇があるのかな?」

龍東「どうゆうことだ!」

蛾強化怪人「立花モーターズに戻ればわかるだろう」

そう言うのと蛾強化怪人は飛び立ってしまった。

龍東が急いで立花モーターズに戻るともぬけの殻になっていた。

龍東「くそ!! やられた!!」

龍東はすぐにバイクを発進させ、バイトに跨がったまま変身ポーズをとった。

龍東「ライダー……変身!!」

仮面ライダーブラックサンダーに変身し、助けに向かった。

捕らわれた美波たちは伊集院舞と一緒に十字架に張り付けられていた。

美波「私たちをどうするつもりなの?」

蛾強化怪人「お前たちには死んでもらう」

恵「やめて!! 娘と無関係なその人たちを殺さないで!!」

蛾強化怪人「黙れ!!こいつらを殺した後、お前にも死んでもらう」

?「そうはさせないぞ!!」

蛾強化怪人「誰だ!!」

蛾強化怪人が振り返ると仮面ライダーブラックサンダーが立っていた。

蛾強化怪人「貴様!?!なぜここに!?!」

ブラックサンダー「俺のアンテナでお前の発する電波をキャッチしたからだ!!」

蛾強化怪人「くそ!!かかれ!!」

蛾強化怪人が命令すると戦闘員たちが襲いかかってきたがブラックサンダーに蹴散らされてしまった。

蛾強化怪人「ええい!役立たずめ!!」

蛾強化怪人がロケット弾を発射するもジャンプで避けられた。

ジャンプで避けた後、ブラックサンダーは蛾強化怪人を掴み空中高く舞い上がった。

ブラックサンダー「ブラックサンダースクリーン投げ!!」

ブラックサンダーの新必殺技を受けた蛾強化怪人は爆散した。

こうして蛾強化怪人との戦いは終わった。

しかしガルーダはまた新たな怪人を投入してくるだろう。

負けるな仮面ライダーブラックサンダー。

## 第18話 アトランティス計画!! ピラニア強化怪人

ある日のプール施設では、次期オリンピックピック候補選手の西島權が練習を行っていた。マネージャー「權！あなたまた記録更新よ！これなら選手に選ばれるのは間違いないわね」

權「でも、あたしは今の記録に満足せずまだまだ伸ばしていきたいですよ」

マネージャー「頑張ってるね、でも無理はしないようにね」

權「わかってます、それじゃもうひと泳ぎしてきますね」

そう言ってる權は泳ぎでした、しばらく泳いだのちに彼女は行方不明になった。

一方、立花モーターズでは立花が新聞を読んでいた。

立花「次期オリンピック候補選手の西島權が行方不明か…」

龍東「またですか…」

立花「これで何件目になるんだろうな…」

龍東「ただの失踪事件なんですかね？」

立花「今のところはなんとも言えない」

龍東（もしかしたら…）

行方不明になった西島權はある施設にいた。

それは、ガルダーダの海底基地だ。

ガルダーダは日本近海にあるウラニウムに目を付け、海底工場を建設する。アトランティス計画を進めていたのだ。

計画遂行のための作業員として、次期オリンピック候補選手や体力の若者を次々と拉致していたのだ。

一連の失踪事件をガルダーダの仕業とにらんだ成風龍東は海岸に調査に向かった。

龍東「この事件……確証はないがきつとガルダーダが絡んでいるに違いない！必ず証拠を見つけ出してやる！」

龍東が海岸を調査しているとその前にガルダーダの戦闘員とピラニア強化怪人が現れた。

ピラニア強化怪人「待っていたぞ!!成風龍東!!」

龍東「やはりこの事件はお前たちの仕業か!!目的はなんだ!!」

ピラニア強化怪人「敵であるお前に教えるものか!!かかれ!!」

ピラニア強化怪人が戦闘員たちに命令を出し、戦闘員は龍東に襲いかかった。戦闘員たちを蹴散らして変身ポーズを取る。

龍東「ライダー……変身!!とお!!」

龍東は仮面ライダーブラックサンダーに変身する。

そしてピラニア強化怪人とにらみ合う。

2人は掴み合いになり、海中へと落ちてしまった。

海中では、いくら仮面ライダーといえどバツタの強化改造人間では、ピラニアの強化改造人間であるピラニア強化怪人に太刀打ちできずにいた。

しかし、突如ピラニア強化怪人は海中深くにその身を隠した。

仮面ライダーブラックサンダーから成風龍東の姿に戻り岸へとあがってきた。

龍東（なぜあいつは止めを刺さなかった…あの戦いはどう考えても奴の勝利は確かだった…それなのになぜ？）

その頃、片桐早苗と同僚の佐藤心は海中を探索していた。

心「あくあ海に来るなら水着でも持つてくるんだったな〜」

早苗「そうね〜でもあたしたちは遊びに来た訳じゃないからね〜」

心「ですよ〜」

そんな会話しながら探索を続けているとガルダの襲撃を受け、ガルダの海底基地に連れ去られてしまった。

偶然、その現場を目撃した龍東は2人を救出するため仮面ライダーブラックサンダーに変身し、海底基地に侵入した。

ブラックサンダー（ここに早苗さんたちがいることは間違いないだろう…。そして行方不明になって人々も…）

しばらく基地の中を歩いていると突然、部屋の扉が閉まったのだ。

ブラックサンダー「しまった!!」

ピラニア強化怪人「罠にかかったな仮面ライダー!!」

ブラックサンダー「貴様!!」

ピラニア強化怪人「そのまま窒息させてやる」

ピラニア強化怪人がレバーを引くと壁から海水が流れこんでかきたのだ。

あつという間に部屋は海水で満たされたのだ。

ピラニア強化怪人「ふはははは！仮面ライダーは死んだのだ!!これで我々の計画を邪魔する奴はいない」

？「それはどうかな？」

ピラニア強化怪人「誰だ!!」

ピラニア強化怪人が振り返るとそこには仮面ライダーブラックサンダーが立っていたのだ。

ピラニア強化怪人「な…なぜだ!?なぜお前は生きている!？」

ブラックサンダー「天井を突き破ってそこから脱出したからだ!!」

ピラニア強化怪人「く…くそ！」（こうなったらこの基地を爆破して仮面ライダーもろとも…）

ピラニア強化怪人は基地の起爆スイッチを押し基地を後にした。

基地は木つ端微塵になった。

ピラニア強化怪人「ふはははは！どうだ仮面ライダー！！」

ブラックサンダー「それで俺を倒した気になるな！！」

ピラニア強化怪人「な…なに！！だが、あそこにいた作業員は皆殺しになった」

ブラックサンダー「残念ながら、全員無事だ」

ピラニア強化怪人「ええい！！計画は失敗…どうせ俺は首領に処刑されるこうなったら仮面ライダーを道連れにしてやる！！」

ピラニア強化怪人はブラックサンダーに掴みかかるも背負い投げられ右肩にチョップを受ける。

距離を取った後、右ストレートを喰らわせようとしたが右腕を掴まれ、腹部そして顔にパンチを受け怯む。

ピラニア強化怪人が怯んだ隙に空中高く舞い上がり「ブラックサンダーキック」を喰らわせた。

ブラックサンダー「ブラックサンダーキック！！」

ピラニア強化怪人「ぐはあああつ!!」

ピラニア強化怪人を倒した後、行方不明になっていた人々は無事に帰宅した。そして、龍東と美波は海水浴に来たのだ。

美波「ね：：ねえ龍東／／／」

龍東「ん？」

美波「この水着：：似合ってるかな？／／／」

龍東「う：：うん、とってもよく似合ってるよ／／／」

美波「ありがとう／／／」

こうして仮面ライダーブラックサンダー・成風龍東によってガルダの強化改造人間は敗れた。

しかし、ガルダは世界征服を諦めてはいない。

また新たな強化改造人間を作りだし挑戦してくるだろう。



# 第19話 札幌壊滅!?! ムササビ強化怪人

北海道にある研究所では新型液体燃料の開発に成功したのだ。

その液体燃料は僅か100CCで爆発的なエネルギーを発生させることが実験の結果分かった。

研究員A 「これはすごい…」

研究員B 「これならエネルギー問題は解決しますよ!」

研究員A 「しかしまだ実験の段階だ、これは貯蔵庫に入れておこう」

研究員B 「わかりました」

研究員はすぐに貯蔵庫に液体燃料を入れたのだった。

この新型液体燃料のことを聞きつけたガルーダは新たな強化改造人間・ムササビ強化怪人を生み出したのだ。

首領 「ムササビ強化怪人よ… 貴様には最近開発された新型液体燃料を奪ってきてほしいのだ」

ムササビ強化怪人 「イー!!」

首領の命令を聞くとムササビ強化怪人は新型液体燃料を奪うため貯蔵庫へと向かっ

た。

貯蔵庫に着いたムササビ強化怪人はそこにいた警備員を殺害し、新型液体燃料を奪うことに成功した。

ガルードはこの新型液体燃料を使い札幌を壊滅させようと企てていたのだ。

早苗「さつきムササビみたいなのが飛んでいったけど…」

龍東「恐らくガルードの強化改造人間、行ってみましょ」

成風龍東と片桐早苗は研究所に向かったが、既にムササビ強化怪人に奪われてしまっ  
た。

龍東「一足遅かったか…」

早苗「完全にやられたわね」

龍東「まだ遠くに行つてないはずです、追いかけてましょ！」

龍東と早苗はムササビ強化怪人を追った。

しばらく追うとこちらに気付いたムササビ強化怪人が降りてきた。

ムササビ強化怪人「やはりきたか、成風龍東！そしてFBIの片桐早苗！」

龍東「当然だ！」

早苗「あんたたちの好きにはさせないわ！」

ムササビ強化怪人「いつも我々の邪魔をするお前たちには死んでもらう!!」

龍東「早苗さん、来ますよ」

早苗「わかつてるわ」

こうしてムササビ強化怪人VS成風龍東& a m p ; 片桐早苗の戦いが始まった。

ムササビ強化怪人はまず空を飛び2人めがけて体当たりしてきた。

2人は左右へ避けた。ムササビ強化怪人は早苗の前に降りたと同時に顔を蹴った。

その後、ムササビ強化怪人は早苗の上に乗リ顔を殴打する。

なんとかムササビ強化怪人を退けようともがくが一般人の力では強化改造人間には

通じないのだ。

しかし龍東が後ろから蹴り飛ばし早苗は解放された。

龍東「早苗さん！こいつは俺が引き受けますその間に逃げてください」

早苗「そんな無茶よ！大学生のあなたにそんなこと任せられないわ！」

龍東「大学生です早苗さん、俺にはもうひとつの姿がありますから」

早苗「もうひとつの姿？」

龍東「いまからそれを見せます、しかしこのことは美波たちには黙っててください」

早苗「わかったわ……」

龍東は変身ポーズを取る。

龍東「ライダー……変身!!とお!!」

龍東は仮面ライダーブラックサンダーに変身した。

早苗（う：・ 嘘!? 龍東くんがあの仮面ライダーだったなんて）

ブラックサンダー「早苗さん、今のうちに逃げてください、必ず液体燃料は取り戻しますから!!」

早苗「わかったわ」

早苗は指示通りバイクで撤退したと見せかけて近くの木に身を隠した。

そして仮面ライダーブラックサンダーとムササビ強化怪人との戦いが始まった。

まずブラックサンダーは液体燃料を取り戻すためムササビ強化怪人に向かってジャンプした。

しかしムササビ強化怪人は空へ飛び回避した。

その後ブラックサンダーを踏みつけるように降りてきた。

それによって後方へと吹き飛んだブラックサンダー。

追い打ちをかけようと近付いてきたムササビ強化怪人に両足でキックを打ち込んだ。

キックされたことで液体燃料の入ったアタッシュケースを手離したのだ。

アタッシュケースは早苗が隠れていた木の近くに飛んできたのだ。

早苗（今がチャンス!!）

早苗はすぐに木の陰から飛び出しアタッシュケースを回収してバイクで走り去った。

ムササビ強化怪人「しまった！すぐに追いかけてなければ！」

ブラックサンダー「そうはさせるか!!」

ムササビ強化怪人は早苗を追うため空を飛ばうとしたが寸前でブラックサンダーに阻止された。

ムササビ強化怪人「くそう… 仮面ライダー!!必ず奪い返してやるからな!!」

ブラックサンダー「絶対にお前たちの思い通りになんかささせないぞ!!」

ムササビ強化怪人は退却した。

戦いが一段落した仮面ライダーブラックサンダーは変身を解いて早苗の元に向かった。

早苗「いや〜にしても驚いたわ、あなたが仮面ライダーだったなんて」

龍東「今まで黙っててすみません…」

早苗「いいのよ、誰にだって隠しておきたいことはあるんだから♪」

龍東「そう言ってもらえると助かります」

早苗「ところでこのことを知ってるのってあたしの他にいるの?」

龍東「あとおおやっさんだけです」

早苗「なるほどね」

一方、ガルーダの基地ではムササビ強化怪人が首領にお叱りを受けていた。

首領「ばかもの!! まんまと仮面ライダーどもに奪われおつて!!」

ムササビ強化怪人「も… 申し訳ございません、首領」

首領「謝罪している暇があるならさっさと新型液体燃料を奪い返すのだ!!」

ムササビ強化怪人「イー!!」

ムササビ強化怪人が任務に向かった後、首領は一人でに呟いた。

首領「私が結成したシヨツカーやデストロンなどごとく仮面ライダーに壊滅させられてきた、このままではガルーダも潰されかねないな、はてどうするか…」

新型液体燃料を取り戻すことに成功した龍東たちは安全な隠し場所を探していた。しかし彼らの前に再びムササビ強化怪人が立ち塞がった。

龍東「また出たか!」

ムササビ強化怪人「さあ、そのアタツシケースを渡してもらおうぞ!!」

早苗「絶対にこのケースは渡さないわ!」

ムササビ強化怪人「ならば力づくで奪うのみ」

龍東「それしか頭にないくせに、早苗さんここは俺に任せてください」

早苗「わかったわ」

早苗が立ち去ったのを確認すると龍東は変身ポーズを取った。

龍東「ライダー…:…: 変身!!とお!!」

龍東は仮面ライダーブラックサンダーに変身し、再び戦闘を開始した。

ムササビ強化怪人はブラックサンダーに右手でパンチをするが受け止められ腹部にパンチを2発喰らったのだ。

ブラックサンダーは背負い投げした後、距離を取り空中高くジャンプした。

ブラックサンダー「ブラックサンダーキック!!」

ムササビ強化怪人「キイイイイイイイイイ」

ムササビ強化怪人は爆散し、仮面ライダーブラックサンダーは勝利した。

ムササビ強化怪人との戦いが終わり、新型液体燃料は無事安全な場所に移されたのだ。

## 第20話 怒りのブラックサンダー!! キノコ強化怪人

ガルードはとある刑務所に服役している無期懲役犯の身柄を確保し、キノコ強化怪人に改造した。

首領「キノコ強化怪人よ、早速だが貴様に任務を与えよう」

キノコ強化怪人「一体どんな任務でしようか？」

首領「簡単な任務だ、子供たちを誘拐してくるのだ」

キノコ強化怪人「イー！」

ある日の立花モーターズでは先月からよくお手伝いに来てくれる向井拓海がやって来たのだ。

拓海「こんちやーす」

藤兵衛「おう！今日も来てくれたのか」

拓海「おうよ！バイクいじるのが楽しいしな♪」

龍東「おやつさん、心強いメンバーが加わりましたね」

藤兵衛「ああ、まったくだ」

一方、ガルードはキノコ強化怪人を使って、次々と子供たちを誘拐していったのだ。



薫たちが公園で遊んでいるとキノコ強化怪人が現れた。

薫「おまえはガルーダの悪い奴だ!!」

仁奈「キノコのお化けでござえますか!!」

キノコ強化怪人「おまえたちも我々と一緒に来てもらおうぞ!!」

薫までもがキノコ強化怪人の毒キノコ胞子を浴び、連れ去られようとしていた。

薫を迎えに来ていた龍東は仮面ライダーブラックサンダーに変身してガルーダの後を追う。

キノコ強化怪人「やはり来たか、仮面ライダー」

ブラックサンダー「ガルーダめ、逃がさんぞ!」

ブラックサンダーはターボサイクロンのスピードを上げガルーダの車の上に飛び移り運転手を引きずり下ろした。

たちまち車は止まり中からキノコ強化怪人や戦闘員が飛び出してきた。

ブラックサンダー「子供たちは返してもらおうぞ!!」

キノコ強化怪人「仮面ライダー!!子供たちは渡さんぞ!!戦闘員どもかかれ!!」

キノコ強化怪人の命令に従い戦闘員たちがブラックサンダーに襲いかかってきた。

ブラックサンダー（くそう…このままでは薫たちが…）

美波「仮面ライダー!!」

夕美「戦闘員は私たちに任せて!!」

慶「あの怪人をやっつけてください!!」

ブラックサンダー「みんな… わかった!!」

立花モーターズのメンバーは自分たちが持ってきた武器で戦闘員たちを撃退し、見事薫たちの奪還に成功したのだ。

キノコ強化怪人「しまった… 覚えていろよ!!」

任務に失敗したキノコ強化怪人は退散した。

すぐさま薫たちを病院へ連れて行ったが一向に目を覚ます様子がない。

美波「先生、薫ちゃんたちは?」

先生「今のところ、意識を失っているだけで命に別状はないみたいですが…」

美波「そうですか…」

夕美「ねえねえ、薫ちゃんたちの顔についているのはなんだろう?」

慶「よく見ると胞子っぽいけど…」

そう、キノコ強化怪人が発する毒キノコ胞子を浴びた人間はたちまち意識を失い、死にいたらしめるのだ。

このままでは薫たちの命が危ないのだ。

龍東「くそ!! 一体どうすれば…」

藤兵衛「解毒剤があればいいのだが……」

龍東「恐らく、奴らのアジトに解毒剤があるはずなんだ」

藤兵衛「問題はどこにあるかだ……」

拓海（これがガルーダのやり方なのか……こんな間違っている！）

拓海はどこかへと出かけていった。

藤兵衛「拓海の奴どこに行つたんだ？」

龍東「さあ？」

拓海が出かけた先はガルーダのアジト。実は拓海はガルーダを送り込んだスパイだつたのだ。

拓海「おい、ここを通せ」

戦闘員「合言葉は」

拓海「我が偉大なるガルーダのために」

戦闘員「よし、通れ」

拓海はアジトの中へ入り、解毒剤のある部屋へとたどり着いた。

拓海「よし！これさえあればあいつらが助かるんだな」

キノコ強化怪人「そこで何をしている!!」

拓海（しまった!!）

キノコ強化怪人「貴様、解毒剤を持って何をするつもりだ？」

拓海「いや、研究員の奴らに持ってこいって頼まれてまして……」

キノコ強化怪人「そんなはずあるか！貴様、ガルーダを裏切るつもりだな!!」

キノコ強化怪人は毒キノコ胞子を拓海に浴びせたのだ。

拓海は毒キノコ胞子を浴びたが命からがら逃げきり薫たちがいる病院へとたどり着いた。

藤兵衛「拓海?! どうしたんだその顔!!」

拓海「へへ、ちよつとしくじっちゃった」

龍東「拓海、その手に持っているものは？」

拓海「これは解毒剤だ」

藤兵衛「どうやって奴らのアジトを？」

拓海「もう隠す必要がないから言うぜ…… アタシはガルーダのスパイだ」

龍東「な…… なんだって!？」

藤兵衛「拓海…… それは本当なのか」

拓海「ああ、本当だ…… それより解毒剤を薫たちに」

龍東「まずはお前からだ！拓海！」

拓海「いや…… アタシは…… 後でいい…… 早くしろ！」

龍東「わ… わかった」

龍東は解毒剤を薫の顔にかけると胞子がなくなり目を覚ましたのだ。

薫「あれ？ここはどこ？」

龍東「薫！」

薫「あ！龍東お兄ちゃん！」

龍東「よかった…」

藤兵衛「龍東！この調子で他の子供たちにも解毒剤を」

龍東「わかってる」

龍東と藤兵衛は拓海が持ってきてくれた解毒剤を子供たちの顔にかけていった。

龍東「よし！後は拓海だけだ！」

拓海「いや… それは… お前が… 飲め」

龍東「なに言ってるんだ!!このままじゃ死ぬぞ!!」

拓海「アタシは… 悪魔に魂を売って… 今まで… 悪いこと… たくさんしてきた… これは償いだ…」

龍東「バカなことを言うな!!さあ早く!!」

拓海「もう… 手遅れだ… ここまで… 胞子が… まわっちまったら…」

龍東「そんな…」

拓海「龍東… その解毒剤を飲めば… 奴の毒キノコ胞子を… 無効化できる…」  
龍東「本当か!？」

拓海「ああ… だから龍東… 頼む… あいつを… 倒してくれ…」

龍東「わかった… 必ず倒す!!」

拓海「ありがとうな…」

そして拓海はゆっくり目を閉じた。

龍東「おやつさん…」

藤兵衛「なんだ…」

龍東「奴は俺が倒す!!」

藤兵衛が龍東を見るとその目は怒りに満ちていた。

その頃ガルーダは第2の作戦の準備を進めていた。

キノコ強化怪人「作戦開始!!」

戦闘員たち「イー!!」

キノコ強化怪人たちが作戦場所へ向かおうとしたとき、仮面ライダーブラックサンダーが現れた。

キノコ強化怪人「仮面ライダー!!」

ブラックサンダー「見つけたぞ!! キノコ強化怪人!!」

ブラックサンダーは襲いかかってくる戦闘員たちを蹴散らしていった。  
キノコ強化怪人「くそう…。こうなればオレー人でも作戦実行だ！」

キノコ強化怪人は作戦場所へ向かおうとしたがブラックサンダーが先回りしていた。

キノコ強化怪人「仮面ライダー！毒キノコ胞子の力を受けてみる！」

キノコ強化怪人は毒キノコ胞子を浴びせたがブラックサンダーには全く効かなかった。

キノコ強化怪人「なんで貴様には毒キノコ胞子が効かないんだ!？」

ブラックサンダー「キノコ強化怪人、もはやその毒キノコ胞子に力はない!!」

キノコ強化怪人「な…。なんだと!？」

ブラックサンダー「拓海が持つてきてくれた解毒剤のおかげでな…。拓海に代わって  
お前を倒す!!」

キノコ強化怪人「くそ!!あの裏切り者め!!」

ブラックサンダーは怒りにまかせパンチやキックをキノコ強化怪人に浴びせた。

激しいパンチやキックを浴びたキノコ強化怪人は壁にもたれかかった。

そしてブラックサンダーは拓海の名前を叫んだ。

ブラックサンダー「たくみー!!」

ブラックサンダーは力いっぱいキノコ強化怪人を殴り飛ばした。

最後に「ブラックサンダーキック」を放った。

ブラックサンダー「ブラックサンダー……キック!!」

ブラックサンダーはキノコ強化怪人を倒すことができた。

後日、龍東は拓海のお墓参りにやってきた。

龍東「拓海……敵は取ったぞ……だからゆっくり眠ってくれ……」

龍東は頬を涙で濡らした。



## 第21話 大幹部の登場!! アリジゴク強化怪人

ある日の夜、1組のカップルがドライブを楽しんでいた。

男「今日はとても楽しかったな」

女「ええ、とっても楽しかったわ♪」

しばらく車を走らせていると突然動かなくなってしまった。

男「あれ?おかしいな... 故障か?」

女「それにしても急ね」

男「ちよつと見てくるわ」

男が車を降りてみると後輪が砂にはまっていたのだ。

男「な... なんだよこれ」

女「どうしたの?」

男「タイヤが砂にはまっているんだ」

女「なんでそこだけに砂が?」

カップルが話し合っていると車がいきなり沈みはじめたのだ。

男「今度は沈みはじめた!」

女「ど……どうしよう!」

男「とりあえず車から降りるんだ!!」

女は車を降りたが砂に足をとられ、思うように動けないのだ。

女「な!?!砂に足をとられて動けない!」

男「僕もさつきからうまく歩けないんだ」

そうしているうちにカップルと車は砂の中へと消えていった。

するとカップルたちが消えた砂の中からガルーダの強化改造人間・アリジゴク強化怪人が現れた。

アリジゴク強化怪人「実験は成功だ、次の段階に入るとするか」

翌日、アリジゴク強化怪人は次々と日本中の幹線道路を破壊していったのだ。

それと同時にガルーダの基地は慌ただしくなっていた。

戦闘員A「おい!聞いたか!」

戦闘員B「ああ!今日ここに大幹部が来るらしい!」

ガルーダは中近東支部から最高指揮者を呼び寄せ、日本に大攻勢をかけようと画策していたのだ。

そして最高指揮者“拘束のまゆ”が基地に到着したのだ。

まゆ「ここがまゆの新しい赴任先ですか♪うふふ♪」

まゆがしばらく廊下を歩いていると一人の戦闘員の前で歩みを止めた。

まゆ「そのあなた..」

戦闘員「は... はい！」

誰もが殺されると思った途端、まゆは戦闘員のベルトのずれを直した。

まゆ「ベルトが曲がっていましたよ♪ガルダの一員なら身だしなみはきちんとしてくださいね♪」

戦闘員「はい！すみませんでした！」

やがて指令室に着き、左手に持っているリボン型の鞭をかがけこう続ける。

まゆ「我が偉大なるガルダ栄光のために!!」

まゆは向き直り、アリジゴク強化怪人に向かって指示をだす。

まゆ「アリジゴク強化怪人、あなたは引き続き幹線道路の破壊を続けてください♪」

アリジゴク強化怪人「イー!!」

まゆ「戦闘員の方々はアリジゴク強化怪人のサポートをお願いしますね♪」

戦闘員「イー!!」

まゆ「それでは作戦開始です♪うふふ♪」

一方、首都圏の幹線道路が次々と陥没するニュースを耳にした成風龍東と片桐早苗はガルダの仕業とにらみ、行動を開始した。

龍東「次に奴らが仕掛ける場所はここに違いない……」

早苗「そうね……ここからは2手に別れて調査しましょ」

龍東「わかりました」

幹線道路を調査している龍東の前に突如、砂嵐が発生した。

龍東「うわ!?!なんだこの砂嵐は!?!」

するとアリジゴク強化怪人が現れた。

アリジゴク強化怪人「待っていたぞ、成風龍東」

龍東「やはり貴様らの仕業か……行くぞ!!」

龍東は変身するため構える。

龍東「ライダー……変身!!とお!!」

龍東は仮面ライダーブラックサンダーに変身し、戦いに挑む。

ブラックサンダー「貴様らの好きにはさせんぞ!!」

アリジゴク強化怪人「ふはははは、仮面ライダーよ……お前はもうすでに罠にかかっているのだ」

ブラックサンダー「なんだと!?!うわ!?!」

ブラックサンダーはアリジゴク強化怪人の人工あり地獄に吸い込まれ、体の自由が奪われてしまったのだ。

ブラックサンダー(しまった!!このままではやられる!!)

アリジゴク強化怪人「そのまま死ぬがいい仮面ライダー!!」

ブラックサンダー(何かいい方法はないのか…このままでは…)

するとブラックサンダーはあることを思い出したのだ。

ブラックサンダー(そうだ!たしかベルトの横にあるダイアルを回せば…)

ブラックサンダーがベルトの横にあるダイアルを回すと一人でターボサイクロンがやってきてロープを射出し、ブラックサンダーを救出した。

ブラックサンダー「よし!行くぞ!」

アリジゴク強化怪人「く、くぞ!!仮面ライダーめ!!」

アリジゴク強化怪人は自身の巨大な顎でブラックサンダーを挟もうとしたがジャンプで避けられ顔にキックを受けた。

さらにブラックサンダーはアリジゴク強化怪人の腹部にパンチを打ち込み背負い投げた。

背負い投げた後、ブラックサンダーは空中高く飛び「ブラックサンダーキック」を放つ。

ブラックサンダー「ブラックサンダーキック!!」

ブラックサンダーキックを受けたアリジゴク強化怪人は爆散した。

「まゆ「やはり仮面ライダーは強敵ですね♪」  
ガルーダは最高指揮者“拘束のまゆ”を呼び寄せ、日本に大攻勢をかけようとしている。」

仮面ライダーブラックサンダーの戦いはより一層厳しいものになるだろう。

## 第22話 ガルーダスクール!! ムカデ強化怪人

ある日、ガルーダの基地では大幹部・拘束のまゆが自身の部下であるムカデ強化怪人を呼び出した。

ムカデ強化怪人「まゆ殿、何の用でしょうか？」

まゆ「ムカデ強化怪人… あなたにはこれから頭脳優秀な子どもたちをここに連れてきてほしいのです♪」

ムカデ強化怪人「子どもたちを連れてきてなにを？」

まゆ「子どもたちを教育してジュニアガルーダ隊を結成し、破壊工作をしてもらおうと思ひまして♪」

ムカデ強化怪人「なるほど… ならばこのムカデ強化怪人、今から子どもたちをここに連れてきます」

まゆ「頼みましたよ、ムカデ強化怪人♪うふふ♪」

ムカデ強化怪人「イー!!」

ムカデ強化怪人は次々と頭脳優秀な子どもたちを誘拐していった。

そして立花モーターズに出入りしている薫までも狙われたのだ。

薫「おまえガルーダだな!!」

ムカデ強化怪人「うるさい! さっさとつれて行け!」

戦闘員「イー!!」

薫「やめろ!! 放せ!!」

薫はガルーダによって連れ去られてしまった。

薫の声を聞き、駆けつけた龍東は仮面ライダーブラックサンダーに変身し、片桐早苗とともに後を追った。

しかし2人の前に再生されたキメラ強化怪人とサラセニアン強化怪人が現れた。

サラセニアン強化怪人「待て!! 仮面ライダー」

キメラ強化怪人「お前の相手は俺たちだ!!」

ブラックサンダー「また再生したのか… しつこい奴らだ」

ブラックサンダーがキメラ強化怪人とサラセニアン強化怪人と戦っている間にムカデ強化怪人は誘拐した子どもたちを戦闘員にするため教育を行っていたのだ。

銃や剣の扱い方や爆弾のセットの仕方などを教えた後、ムカデ強化怪人は催眠電波で子どもたちを操り、成風龍東と片桐早苗を襲うように命令した。

一方、再生サラセニアン強化怪人と再生キメラ強化怪人を倒した龍東たちはひとまずホテルで様子を見ることにしたのだ。



龍東「いてて… やっぱりキメラ強化怪人は手強かったな」

早苗「あいつらのせいで薫たちを見失っちゃたわ」

龍東「薫ちゃんたち無事だといいですけどね…」

早苗「そうね、心配だわ」

龍東の早苗が薫たちの身を案じていると2人の前に催眠電波によって操られたジュニアガルダ隊が現れたのだ。

龍東「薫ちゃん!」

早苗「どうしたの!?! その格好は!?!」

ジュニアガルダ隊「成風龍東と片桐早苗はガルダの敵」

ジュニアガルダ隊は銃を取りだし2人の命を狙う。

龍東「やめるんだ!! 薫ちゃん!!」

早苗「そうよ!! そんな物騒な物は捨てなさい!!」

2人の呼びかけに答えることなく発砲するジュニアガルダ隊、龍東は早苗を抱え窓から飛び降りた。

飛び降りる途中でベルトに風圧をかけ仮面ライダーブラックサンダーに変身した。

ブラックサンダー「大丈夫ですか? 早苗さん」

早苗「え… ええ、なんとか…」

ムカデ強化怪人「始末し損ねたな役立たずどもめ!!」

ブラックサンダー「出たな!!ガルーダの強化改造人間!!」

ムカデ強化怪人「こうなれば俺がお前を始末してやる!!」

ムカデ強化怪人はブラックサンダーにパンチを仕掛けようとしたが受け止められ腹部にパンチをくらう。

パンチを受け怯んだところを持ち上げそして

ブラックサンダー「ブラックサンダー回転投げ!!」

そして

ブラックサンダー「ブラックサンダーキック!!」

ムカデ強化怪人は爆散し、子どもたちの催眠も解けた。

まゆ「仮面ライダー… 次の作戦は成功させてみせますよ♪うふふ♪」

## 第23話 地底怪人!! モグラ強化怪人

ガルダは新しく地底を自由自在に活動できる強化改造人間・モグラ強化怪人を作り出し、地下から躍り出ては誘拐し、ガルダの秘密基地に運び込んでいた。そして誘拐された人々は奇怪な手術によりモグラ人間に改造していたのだ。

モグラ強化怪人「ふふふ、作戦は順調に進んでいるな」

まゆ「うふふ♪この作戦がうまくいけば東京を火の海にすることができますね♪」

ガルダはこのモグラ人間を利用して石油コンビナートを破壊し、東京湾を火の海にする作戦を企てていたのだ。

首領「拘束のまゆよ、作戦はうまくいっているのか？」

まゆ「はい首領♪作戦は順調に進んでおります♪」

首領「そうか、引き続き作戦を進めるのだ！」

一方、龍東たちは全日本モトクロス選手権に向けて練習を行っていた。

藤兵衛「龍東! どんどんタイムが上がっているぞ！」

龍東「本当ですか!」

藤兵衛「ああ! これなら優勝も夢じゃないな」

龍東「よし、あとは体調管理とバイクの整備しないと」

龍東は選手権で使用するマシンを整備するためガレージに向かった。

美世「あ！龍東くん」

龍東「どうも美世さん」

美世「どうしたの？こんなところに来て」

龍東「俺も自分が乗るバイクを整備しないとイケないなと思ったので手伝いに来ました」

美世「それは助かるな♪なら早速手伝ってもらおうかな♪」

2人はマシンの整備を済ませ美世は自宅へと帰っていった。

美世が帰っていった直後、龍東は美世の忘れ物に気付き届けにいった。

美世に追い付くとなんとガルーダの怪人・モグラ強化怪人に連れ去られようとしていたのだ。

美世「誰か助けて!!」

龍東「美世さん!!今助けます!!」

龍東は美世を助けるべく変身ポーズをとる。

龍東「ライダー……変身!!とお!!」

龍東は仮面ライダーブラックサンダーに変身して、美世を助けようとするが、モグラ

強化怪人の罠にかかり、地底深くに引き込まれてしまった。

ブラックサンダー「しまった!!」

モグラ強化怪人「ふはははは、まんまと罠にかかってくれたな仮面ライダー」

ブラックサンダー（くそ……なかなかこの穴から抜け出せない……）

モグラ強化怪人「あの女は連れていかせてもらおう」

ブラックサンダー「待て!!」

美世は連れ去られてしまった。

そして美世はガルダーの秘密基地に運び込まれていた。

美世「こ……ここは？」

まゆ「うふふ♪お目覚めになりましたか？」

美世「あなたは誰？」

まゆ「はじめまして♪まゆはガルダーの大幹部、拘束のまゆです♪以後お見知りおきを♪」

を♪」

美世「ガルダー？」

まゆ「美世さん、あなたにお願いがあるんです♪成風龍東が全日本モトクロス選手権に使用するマシンにある細工をしてほしいのです♪」

美世「ある細工？」

まゆ「はい♪マシンの燃料タンクに爆発性のある液体を入れてほしいのです♪」

美世「そんなことやるわけないでしょ!!」

まゆ「いいんですか? 断れば弟さんの命がないですよ♪」

美世「そ… そんな」

その後、美世はガルーダから解放され翌日立花モーターズへと向かった。

龍東「美世さん! 無事だったんですね、良かった」

美世「うん… 心配かけてごめんね」

龍東「いいいえ、無事ならそれでいいんですよ」

一通り挨拶をすませた美世は1人ガレージに向かい龍東が使用するマシンの燃料タンクに爆発性のある液体を注入した。

美世(ごめんね龍東くん… これも弟のためなの…)

そして全日本モトクロス選手権当日、立花モーターズのメンバーは龍東のモトクロスでの活動を見るべく会場へ向かったのだ。

レースが始まり、選手たちは一斉にバイクを発進させた。

そのなかで龍東は先頭を走っていた。しかししばらくバイクを走らせていると突然龍東が乗っているバイクが爆発したのだ。

藤兵衛「龍東!!」

美波「そんな… 龍東!!」

立花たちが駆け寄り辺りを探したが成風龍東の姿は見当たらない。

美世「ごめんなさい… あたしがいけないの… あたしがガルーダの言いなりになつたから…」

藤兵衛「美世… なぜだ、なぜそんなことを？」

美世「そうしないと弟の命はないって脅されたの… だから…」

美世弟「姉さん…」

ブラックサンダー「大丈夫だ、彼は生きています」

美世弟「仮面ライダー!!」

美波「龍東は生きていますか」

ブラックサンダー「ああ! 彼は私が安全な場所に避難させた」

美波「良かった…」

ブラックサンダー「みんな聞いてくれ、彼女は悪くない… 悪いのはそこにいる奴だ!!」

ブラックサンダーが指をさした先にはモグラ強化怪人がいた。

モグラ強化怪人「くそう… バレてしまつては仕方ない、俺自身が仮面ライダーを始末してやる」

モグラ強化怪人は右腕を振り上げ迫ってきたがブラックサンダーは前転で回避した。

前転で回避したあとブラックサンダーはモグラ強化怪人に飛び蹴りを食らわせた。

飛び蹴りを受けたモグラ強化怪人は後方へと吹き飛んだ。

ブラックサンダーは場所を変えるためセメント工場に向かつて走り出した。

モグラ強化怪人はブラックサンダーを追いかけ同じくセメント工場へと向かった。

ブラックサンダー（このセメントの中に奴を落とせば）

しばらくしてモグラ強化怪人がたどり着き両者は掴み合いになった。

そしてブラックサンダーは距離をとりモグラ強化怪人をセメントの中へと蹴り落とした。

モグラ強化怪人「うわあああああつ!!」

モグラ強化怪人はセメントの中へと消えていった。

まゆ「またしても失敗……やはり仮面ライダーはまゆたちにとっては邪魔な存在ですね……」



## 第24話 クラゲ型宇宙人？ クラゲ強化怪人

ある日の朝、龍東が新聞を読んでいるとある記事に目を向けた。

龍東「クラゲ型宇宙人を目撃したか・・・」

龍東はその真偽を確かめるため、クラゲ型宇宙人を目撃したという少女の元に向かった。

龍東が少女の家にたどり着くと既に早苗が訪れていた。

3人は早速、クラゲ型宇宙人の出現現場に向かった。

するとガルーダ戦闘員と強化改造人間・クラゲ強化怪人が現れた。

クラゲ強化怪人「待っていたぞ成風龍東そして片桐早苗!!」

龍東「やはりお前らのことだったかガルーダ!!」

早苗「薄々感づいていたわ!!」

クラゲ強化怪人「今度こそ貴様たちには死んでもらうかかれ!!」

戦闘員たちは3人に襲いかかってきたがなんとか急襲を逃れた。

早苗「はあ、はあ、なんとか窮地を脱したわね」

龍東「はい、しかしまだ油断はできませんよ」

果南「ごめんなさい!!私が余計なことに首を突っ込んだせいでこんなことに・・・」

龍東「君が謝る必要はないむしろ俺は君に感謝しているよ」

果南「え?」

龍東「君が奴等を発見してくれたおかげで犠牲者はまだ出ていないんだ」

早苗「もし果南ちゃんが発見していなかったら今ごろたくさん犠牲者が出ていたわ」

龍東「だから俺たちは感謝しているんだ」

3人が果南の家に戻るとなんと果南の母親はガルダにさらわれてしまったのだ。助けに向かう早苗と龍東だったが、クラゲ強化怪人は罠を仕掛け待ち構えていた。

2人は罠に嵌まり触手に捕らえられてしまった。

早苗「な!?!なによこれ!?!」

クラゲ強化怪人「ふふふ、まんまと罠にかかってくれましたねお二人さん」

龍東「この触手は一体なんだ!?!」

クラゲ強化怪人「それでわ教えてあげましょう、その触手には100万ボルトの電気が流れる仕組みになっています」

早苗「ひゃ・・・100万ボルト!?!そんなのくらったらひとたまりもないわよ」

クラゲ強化怪人「普通の人間だったら黒こげになって死ぬでしょうねしかし私と同じ

強化改造人間のあなたはどうぞでしよう？」

早苗「まさか龍東くんを!?!やめて!!」

クラゲ強化怪人「ダメです、こいつはいつも我々ガルーダの計画を潰してきた!!だからこの私が今まで倒されてきた怪人たちの恨みを晴らすのです!!死ぬ成風龍東!!」

クラゲ強化怪人が龍東に絡み付いた触手に電流を流すが龍東は顔色ひとつ変えずそのまま変身し触手を引きちぎったのだ。

クラゲ強化怪人「ばかな!?!なぜ効かないのだ」

ブラックサンダー「残念だったなその程度では痛くも痒くもないぞ」

ブラックサンダーはクラゲ強化怪人との距離をダッシュで縮め腹部に右左右とパンチをくらわせる。

パンチを受け怯むが体勢を整え手のひらから触手を伸ばしブラックサンダーの首に巻き付ける。

首に触手を巻き付けられ苦しむが先ほどと同様引きちぎって脱出しクラゲ強化怪人との距離をとりそして空中高くジャンプするそして

ブラックサンダー「ブラックサンダーキック!!」

クラゲ強化怪人は爆散した。

そのあと無事さらわれた果南の母親を救いだし早苗と龍東は立花モーターズへと

帰っていった。

果南（龍東さん・・・また会えるといいな／＼／＼）

見事クラゲ強化怪人を倒した成風龍東。

しかしガルーダとの戦いはまだまだ続く。

次にガルーダはどのような強敵を送り込んでくるか・・・。

## 第25話 化石が蘇る!? 三葉虫強化怪人

みんなは三葉虫という動物を知っているだろうか。

およそ1800万年前の地球に生息していた動物だ。

その三葉虫の化石から古代の動物を蘇らせようという研究を続けている科学者がいた。

それは木山春生博士である。

木山「この研究が成功すれば古代に生きていた生物の調査がやりやすくなるだろう」

木山が研究に没頭していると研究室の外からドアをノックする音が聞こえた。

木山は不審に思いながらも「どうぞ」と返事をした。

すると研究室に入ってきたのはガルダの戦闘員だった。

戦闘員「木山春生、その研究を我々ガルダの計画のために役立たせてもらう」

木山「冗談はやめ・・・うっ!!」

木山は睡眠ガスを浴びせられ誘拐されてしまった。

ガルダはこの研究を利用し、新しい強化改造人間を作り出そうと考えていたのだ。

木山「ここは・・・?」

まゆ「お目覚めですか木山博士♪」

木山「お前はなにものだ!!」

まゆ「私はガルーダ大幹部の拘束のまゆです♪それより木山博士にはやってもらいたいことがあります」

木山「やってもらいたいこと?」

まゆ「ええ♪木山博士には今から古代の動物を蘇らせる研究を利用して新たな強化改造人間を作ってもらおうのです♪」

木山「ふざけるな!!私の研究は改造人間を作るためにやっているんじゃないその依頼は断る!!」

まゆ「そうですかまゆたちの計画に協力してもらえないですかならば博士の教え子たちはどうなってもいいということですか?」

木山「な・・・何だ?!やめろ!!あの子たちは関係ないだろ」

首領「それなら博士が協力してくれば教え子たちには一切手は出しません♪しかし拒否するのであれば・・・あとはわかりますよね」

まゆは木山を脅し三葉虫強化怪人を作り出すことに成功した。

そして三葉虫強化怪人はまず手始めに立花モーターズへと向かい玄関先で三葉虫の姿に変身し侵入した。

早苗「あら？なにかしらこの虫」

夕美「新種の虫ですかね？」

早苗が捕まえようと手をのぼした瞬間、三葉虫の姿から怪人の姿に戻り2人に襲いかかった。

早苗は抵抗したが投げ飛ばされ気を失ってしまった。

夕美は三葉虫強化怪人に血を吸われ意識を失った。

一方、ガルダーは木山博士の協力を得、三葉虫を蘇らせることに成功していた。

そして蘇らせた三葉虫たちを全世界にばら撒くため、三葉虫強化怪人を空港に向かわせた。

まゆ「この計画が成功すれば世界はまゆたちガルダーのものに・・・うふふ♪」

木山「く・・・すまないみんな・・・」

まゆ「木山博士にはこれからもまゆたちのために働いてもらいますのでよろしくお願  
いしますね♪」

その頃、早苗から話を聞きガルダー計画を知った龍東はターボサイクロンに乗り込み  
空港へと向かった。

三葉虫強化怪人「ここから始まるのだ・・・さて行くか」

ブラックサンダー「待て!!空港には行かせないぞ」

三葉虫強化怪人「くそうブラックサンダーめ……ならば貴様を始末して計画を進める」

三葉虫強化怪人は口から火炎を放つ。

ブラックサンダーはジャンプで避けそのまま蹴る構えをとる。

しかし三葉虫強化怪人の背中の殻に阻まれてしまった。

次に三葉虫強化怪人はブラックサンダーめがけて突進してきた。

ブラックサンダーは三葉虫強化怪人を受け止め腹部に右左とパンチをくらわせる。

パンチを受け怯んでいる間に空中高く飛び

ブラックサンダー「ブラックサンダーキック!!」

三葉虫強化怪人は爆散した。

それと同時に三葉虫たちも消滅した。

そしてブラックサンダーは誘拐された木山を救うためガルルーダの秘密基地へと乗り込んだ。

迫り来る戦闘員たちを蹴散らしようとう司令部へとたどり着いたのだ。

ブラックサンダー「お前はなにものだ!!」

まゆ「うふふ♪初めまして私はガルルーダ大幹部の拘束のまゆです以後お見知りおきを

♪」



ブラックサンダー「拘束のまゆ!! 木山博士を返してもらおうぞ!!」

まゆ「ええいいですよ三葉虫強化怪人が敗れた今この人はもう用済みですので♪」

まゆは木山を突き飛ばしその間に基地をあとにした。

基地は爆発したがブラックサンダーたちは無事脱出した。

無事木山を救いだしガルダーの計画を阻止した成風龍東。

しかしガルダーは攻撃の手を緩めるつもりはないだろう。

頑張れ我らの仮面ライダーブラックサンダー。

## 第26話 ブラックサンダー敗北!! アリクイ強化怪人

前回の作戦も失敗したガルルーダはブラックサンダーを倒すべく新たな怪人を生み出した。

その名はアリクイ強化怪人。

アリクイ強化怪人の主な任務はブラックサンダーを抹殺することであるがもうひとつ重要な任務を大幹部である拘束のまゆから使命を受けている。

それはガルルーダ科学陣が発明した細菌を人間に植え付け、破壊活動を行わせることだ。

まゆ「それでは頼みましたよアリクイ強化怪人」

アリクイ強化怪人「イー！」

まゆ「これで邪魔なブラックサンダーがいなくなれば日本征服は達成したも同然♪うふ♪」

アリクイ強化怪人は計画遂行のため、薫の友人の父を利用した。

細菌を植え付けられた友人の父は自らが住む団地の住人に細菌をばら撒いていった。

その現場を目撃した薫たちは立花モーターズへ向かい龍東に報告した。

薫たちの報告によりガルルーダの恐るべき計画を知った龍東は案内をしてもらい団地へと向かった。

団地へ着くとそこには細菌を植え付けられた人々がいた。

龍東「なんてことを・・・」

アリクイ強化怪人「どうだ細菌の効果はすごいだろう」

龍東「貴様はガルルーダの新しい怪人だな!!」

アリクイ強化怪人「その通り俺はアリクイ強化怪人!!成風龍東お前には死んでもらう!!」

龍東「そう簡単に殺されてたまるか!!」

龍東は変身するため構える。

龍東「ライダー・・・変身!!とお!!」

龍東は仮面ライダーブラックサンダーに変身し、アリクイ強化怪人に戦いを挑む。

先に仕掛けたのはブラックサンダー、まずアリクイ強化怪人の腹部にパンチを喰らわせる。

しかしアリクイ強化怪人に効果はなく、右手の鉤爪によってカウンターを受けてしまった。

ブラックサンダーも負けじと右左右とパンチを喰らわせるもやはり効果はない。

ブラックサンダー「クソ!!なんて硬さだヒトデ強化怪人と同等かそれ以上だ」

アリクイ強化怪人「どうしたブラックサンダー?お前の力はその程度か?」

ブラックサンダー「ならばこれならどうだ!!」

ブラックサンダーは空中高く飛んだ。

ブラックサンダー「ブラックサンダーキック!!」

ブラックサンダーキックは見事にアリクイ強化怪人に命中したがなんと弾き飛ばされてしまったのだ。

次にベルトの真ん中にあるウィンドサンダーダイナモを回転させ、再び空中高く飛ぶ。

ブラックサンダー「ブラックサンダー電光キック!!」

ブラックサンダー電光キックも命中したがこれも弾き返されてしまった。

そのあとブラックサンダーパンチを放つがアリクイ強化怪人にダメージを与えることができなかった。

ブラックサンダー「ダメだ・・・俺の技が全部効かないどうすれば・・・」

アリクイ強化怪人「もう終わりか?ならば次は俺の番だ」

アリクイ強化怪人は左右の鉤爪でブラックサンダーを滅多打ちにする。

そしてブラックサンダーは膝から崩れ落ち地面に伏せた。

ブラックサンダーは敗北したのだ。

その様子を見ていた薫はアリクイ強化怪人に立ち向かうが返り討ちにされ大ケガを負った。

その後、薫は病院に運ばれたが命に別状はなかったしかし自身にとってヒーローであつたブラックサンダーがなすすべなく倒されたショックと絶望で昏睡状態になつてしまつたのだ。

一方で龍東はアリクイ強化怪人に敗れたショックと何より薫を傷つけてしまつた責任で放心状態に陥つていた。

そこへ立花がやつて来た。

立花「龍東大丈夫か？そんな廃人みたいになつちまつて」

龍東「おやつさん俺はアリクイ強化怪人に勝てる気がしないよ・・・」

立花「なにをバカな事を言っているんだ！次は必ず勝てるさ」

龍東「無理だよ!!俺の技は全部あいつには効かなかつたそんな奴にどうやって勝つていうんだ!!」

立花「バカ野郎!!」

パアンと誰もいない廊下に響いた。

立花は龍東の頬に平手打ちをしたのだ。

そして龍東の胸ぐらを掴みこよう続ける。

立花「いいかよく聞け!! 薫にとつてはなお前はヒーローなんだ希望なんだ!! だからお前は勝たなければいけないんだ!!」

龍東「俺が希望・・・」

立花「お前に無茶なことを言っているのはわかってる・・・しかし今日本でガルーダと戦えるのはお前しかないんだ!!」

龍東は立花の指導を受けながら特訓を始めたアリクイ強化怪人に勝つため。

そして龍東はどうとう新たな必殺技を生み出したのだ。

新必殺技を携え龍東はアリクイ強化怪人が出現したとの情報があつた場所へ向かつた。

アリクイ強化怪人「よし今度はこの団地に・・・」

ブラックサンダー「そこまでだ!!」

アリクイ強化怪人「ブラックサンダーまたやられにきたのか」

ブラックサンダー「それはどうかな?」

ブラックサンダーはアリクイ強化怪人との戦闘を開始した。

前回同様、ブラックサンダーの攻撃や技はアリクイ強化怪人に効果はなかった。

ブラックサンダーは空中高く飛びドリルのように体を回転させる。

ブラックサンダー「ブラックサンダードリルキック!!」

強敵アリクイ強化怪人を倒したブラックサンダーはある場所へと向かった。

ブラックサンダー「薫ちゃん」

薫「わあ! ブラックサンダーだ!!」

ブラックサンダー「俺は勝ったよだから薫ちゃんも怪我に負けず早く治すんだよ」

薫「うん!!」

ブラックサンダーが立ち去ったあと立花たちがお見舞いに来た。

薫はさきほどのことを立花たちに話した。

立花（龍東、よくやったぞ）

強敵アリクイ強化怪人を倒した成風龍東。

だがガルーダは世界征服をあきらめるつもりはないだろう。